青鞜

大正四年九月一日發行（每月一回一日發行）第八號

第四週年記念號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷
第八號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紀念號目次

感想

個人としての生活と性としての生活との間に於ける爭鬪に就いて(一)　らいてう

別居に就いて思ふことども(一三)　岩野清

墮胎に就いて(三〇)　山田わか

詩歌

森の大樹(三九)　與謝野晶子

百首歌(四三)　三ヶ島葭

わがあやまち(五二)　茅野雅

山にて(五四)　齋賀琴

八月の歌壇より(五六)

小說

初戀のなりゆき(五八)　岡田八千代

お隣のおくさん(七〇)　小林かつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜（七七）　原田皐月

或る家（九三）　山田邦子

姉（一〇九）　久保田富江

青鞜詠草（一二一）

村の精神病者と生兒（一二三）　生田花世

日記

七月末の日記より（一三三）　濱野雪

折りにふれて（一三九）　岡野雪

手紙

私信（一四二）　野上彌生子

病衣を脱ぎて（一四八）　岡本かの子

九州より（一五四）　野枝

編輯だより（一六五）

新刊紹介（一六七）

表紙　奥村博

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

個人としての生活と性としての生活との間の爭鬪に就いて（野枝さんに）

——らいてう

野枝さん。

あなたが近頃「青鞜」や「第三帝國」で御發表になつた感想によつて、子供を產むことや、子供に就いてのあなたの御考や、それに關聯して避姙や墮胎といふことに就いてのあなたの御意見もほゞ知ることの出來たのを私はうれしく思ひます。

何故なら、私自身が此頃漸く是等の問題を、今迄のやうに只傍觀者としてではなく、又單なる思想上の婦人問題としてではなく、自分自身の問題として、自分の實生活そのものと直接の交渉ある問題として眞劍に考へられるやうになつて居るからです。いえ、考へずにはゐられないやうな境地に私自身が今持ち來されて居るからなのです。私は今、女としての十分な自覺の上に立つて、是等の問題を考へねばなりません。私の頭の中には是等に就いての色々の考へが晝夜渦のやうに湧き上つて居ります。そしてこれがあなたのあの感想や、皐月さんの墮胎事件を取扱つたあの創作に對して特殊な注意と興味とを感じさせる

と同時に、こんな手紙をあなたに宛てゝ書かずにはゐられないやうに私をさせたのです。

野枝さん、もう二年前のことになりますね、あなたの第一の御姙娠の時は、その頃、私はあなたの近くにあつて、あなたとよく逢つて、色々のことを話しあつて居ました。けれど私は遂にあなたから、あなたのお腹の中のお子さんに就いて、又は近くあなたが母となられることに就いて色々感じさせられたり、考へさせられたりしてゐられるのだらうと私には想像されたことに關してはあなたから何も直接に伺ふことが出來ませんでした。時として私はあなたのお顔付や、ふとした言葉の端々によつて、あなたが此の姙娠といふ動かすことの出來ない事實の前に立つて、ひどく恐れていらつしやるやうな、いやがつていらつしやるやうな、苦しんでいらつしやるやうな、困つていらつしやるやうな或ものを讀むことがありましたけれど、といつて、私からもすゝんであなたに御尋ねすることを妙に差し控へて居りました。それはあなたの中にもまだ世間の多くの婦人が始めてこの事實に出逢つたとき、他に對して本能的に感ずる羞恥の念や、又はいやなことには、怖いことには成るたけ觸るまいとする臆病な心が正直な發言を憚らせてゐるのではあるまいかとか、年こそ上でも、性的生活の經驗や、性の方面の發達から言へば、どう考へても年少者らしい、しかも一個の獨身婦人である私に(その當時はさうでした)あなたのこの新しい、貴い經驗

をお話しになるのはおいやなのだらう、それは無理もないことであるなどとも考へたからでした。

併しあなたのあの「動搖」を讀んだ時、正直に言へば私は多少の失望と共に、或る疑問に打たれずにはゐられませんでした。何故なら第三者の私にはあの事件の背景としてあなたの姙娠といふ事實を忘れることが出來ませんでしたから、あの時のあなたに生理的にも心理的にも非常な影響を與へてゐたに相違ないこの點を、出來る丈の反省をもつて明にお書きになつたなら、もつと確な、もつと眞實な、もつと意義多い、もつと深いものになつたらうにと思はれたからです。そしてさう信じて居たからです。然るにあなたは矢張り始めから終りまで、どの點でも只の一言も此事に言ひ及ぶことさへなさいませんでした。それはなせだらう。矢張り羞恥の念か――殊にあなたをたとへ瞬間にしろ誘惑し、あなたをあれまで動搖させたその相手の男に對していふに堪へないものがあつたのだらうか、もしさうだとすればそれは意識してか、しないでか、或は當事者といふものは實際は却てかうも自分自身の胎内の子に對して無頓着で、無責任で、否々全く意識的には無關係、沒交渉の狀態で生きてゐられるものなのだらうか、しかも一般婦人と比較すれば常に自分自身に就いて、自分の生活に就いて考へてゐられる自覺あるあなたであつて。これが、私の「動搖」

を評するときの最初のそして最後までの疑問なのでした。そして私はこのためにどれほど批評の筆を鈍らされたか知れませんでした。

野枝さん。

私は其當時あなたの極近くにゐるものの一人として、あなたの御妊娠や、御出產や、續いて母親となられたことや、その結果としてあなたの生活の上に、又は思想の上に俄に大きな變化の現はれて來たことを目擊しながら、わけても御子さんの成長と共に、あなたの御心の中にも次第〳〵に成長して來た到底計り知ることも出來ないほど深い、そして他のために己れの僅たりとも容易に犧牲にしないあなたが御子さんに對してはどんな犧牲も、矛盾も、苦痛も煩はしさも殆ど感じてはいらつしやらないのかと思はれるほど大きなその母としての本能的な愛情に尊ろ驚異の眼を見張りながら、種族と直接關係をもつた女性の生活言ひかへれば種族に對して有つて生れた女性の使命と個人として又は、社會の一員としての婦人の魂の生活や仕事や、職業などとの間の矛盾に就いての色々の問題が自然と頭に上つて、考へさせられることの多かつたのは事實です。併しそれは傍觀者としてにとどまつてまだ私自身の問題とは容易になつて居なかつたことは前申した通りです、のみならず

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其當時の私の中には、まだ私自身に何の批判力もなかつた早い時代に、無條件に取り容れられてゐた何といつても其根柢に於ては禁欲的な東洋思想――殊に佛教の思想が、その思想の殘骸が、最早思想としてといふよりも感情として私の心の一隅にこびりついて居たのと、今一つには、私共の周圍の到る處で見受けられる結婚生活の中にゐる多くの婦人達のあまりに虐げられた奴隷生活に對する公憤と、自分のさういふ生活さへ氣付かずに滿足してゐるらしい婦人に對する憎惡と侮蔑から來た反動と、なほ私一個の戀愛の經驗、もつと正確に言へば私自身の戀愛の成長發達の仕方なども手傳つて所謂「性」としての婦人の生活に對して今思ふと私には可成りな偏見がありました。そして性としての男子に對して憎惡と反感とを抱いて居りました。この偏見も憎惡と反感とが婦人の生活を正しく理解し、解釋する上に或は婦人問題を健全に導く上に一つの障害となつて居たことは少なくなかつたのは事實です。

野枝さん、あなたのやうな情熱的な、忽ち感激の中に己れの全てを投げ込むことの出來る種類の婦人には、私の過去の戀愛經驗は或は了解して頂けないかも知れませんが、または少くとも不眞面目なものとばかり見えるかも知れませんが、戀愛といふものは或時期の私には異性に對する單なる、しかし强烈な好奇心としてのみ現はれて居りました、しかも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それは可成り長い間續いてゐました。私はその好奇心のためには今思ふと呆れるほど向ふ見ずな冒險でも、どんな損失でも、嘘つくことでも、時には罪惡と言はれるやうなことでもやり兼ねないのでした。かういふ異性に對する愛情と性欲のまだ現はれて來ない前の（少くとも私自身の意識に現はれて來ない前の）戀愛は一見パッショネートなものに見えながら、そこには何の深い執着と云ふべきものも伴ひませんでした。相手に對する愛の要求も、獨占欲も、嫉妬もはつきりとしてはゐません。從つて共同生活の要求や子供の問題などゝは全く無關係なものだつたのはいふ迄もないことです。どうして其當時の私にこの好奇心が他日私の中にもまた現はれて來るべき愛情の先驅であらうなどゝいふことが分りませう。この眞理を始めて私に教へてくれたのはＨに對する私の愛でした。Ｈに對する私の愛はその成長とともに始めて共同生活に對する要求となつて私の中に現はれて來たのです。そして私は遂に今の生活を撰ぶやうになりました。それはあなたも御承知の通りです。かうして戀愛といふことが私にとつて漸く人生の、いえ私自身の嚴肅なそして重大な問題となつて來たのです。私は今迄とは全く別な眼を開いて、この問題を見直さなければなりませんでした。今まで殆ど無視してゐた女性としての、愛の仕事を營むものとしての側の婦人の生活の眞の意義や價値に就いて新に考へて見なければなりませんでした。あなたは私の狂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

道を乾度お笑ひになることでせう。けれど私の歩いた道はかうだつたのです。そして私は人間としての、又は個性あるものとしての婦人を解放するのみならず、女性として婦人を解放せねばならぬといふ問題が自分の前にまだ手も觸れられずに殘されてゐたといふことに今更の如く氣付き始めたのでした。この時、私の思索の上に、また實生活の上に、色々の暗示や材料を與へ、私の行き惱んでゐる思想をひき出したり、導いたりしてくれたのは、又は私の歩もうとしてゐる道の方向を見出す助力ともなつてくれたのはエレンケイの著書でした。

野枝さん。

ふたりの愛は共同生活にはいつた當時に比較すると僅二年足らずの間に隨分成長もし、變化もしました。そして私の中にまだ何といつても渾沌としてゐた、といふよりも寧ろまだ目醒ずにゐた女性としての自覺を日毎に明にして行つたのは事實です。併しそれと同時にこの愛の生活は人間としての、また個人としての私の内部生活、私の孤獨な魂の要求に基く仕事との爭鬪とならずには止みませんでした。

そして今また私は避け難い困難な問題として子供を產み且つ育てるといふ現實の問題に

眞ともに突き當つて仕舞いました。

エレンケイは現代の歐洲婦人中に起つてゐる最も重大な闘爭は健康と疾病、發達と退化との間に存するものでなく、等しく强健にして、美しき生活の二形式なるソールライフとファミリーライフとの間に存するものだと言つて居ますが、これはまた私達が今現に經驗しつゝあるそして今後益々多くの日本婦人によつても經驗さるべき運命を有する大問題ではないでせうか。

野枝さん、ほんとうに私達の今日の生活ほど多くのディレンマの上にあるものはないでせうね。そりや男子の生活の上にでも定めて多くの矛盾爭闘があることでせう。今ちよつと考へて見た丈でも妻子家族を扶養する生活費を得るための勞働と、その人自身の人間としての、または個人としての魂の生活が營む仕事との間の矛盾位はすぐ想像することが出來ますもの。併し自分自身の仕事や研究と生計のための職業との外になほ一方で、愛の生活を營むものとして家庭をつくり、子を産み、子を育てやうとする婦人の生活に比較すればどうでせう。

あなたは私がいつも子供を怖れ且つ避けてゐたことは御存じでせうね。併し私とて何もさう無暗に怖れてゐたわけではないのです、そこには私としてのまた相當の理由があつた

のでした。今その主なものをあげれば、第一、現在の自分にとつて何と言つても一番大切なことは自分自身を敎養し、人間としてのまた個性あるものとしての內生活を築くことである、そしてそのためには出來る丈多くの、そして落付いた思索の時間と勉强の時間と、仕事の時間と、又それらに注ぐべき出來る丈多くの力とが欲しくもあり、必要でもあつたこと。第二に、ふたりの愛の中には子供に對する欲望や、親になりたいといふやうな欲望はどこにもまた少しも見出せなかつたこと。そしてたとへ愛の必然の、しかも不任意な、寧ろ偶然の結果だとしても、自分達に於て何等の欲望も意志もない子供を造るといふことは親たる第一資格を欠くものとして自分に對しても、子供に對しても罪惡でもあり、無責任なことでもあるやうに思つてゐたこと。第三に、現在の自分達の其日暮しの貧乏生活は子供の維持敎育に不適當な境遇で、到底親としての十分の責任を盡せまいといふ不安などでした。そして私は色々の困難と戰ひながらお子さんを育てゝいらつしやるあなたを見るにつけ、今子供が出來ては大變だ、あなたの健康と、あなたのあの精力と、あなたのあの或種の無頓着と放任とをもつてしてもああなのだから………と心に思ふのがいつものことでした。

　私がかう言へばすぐ人生に對する卑怯な消極的態度だと非難する人があるかも知れません。併しそれは私達の實際生活を知らない、門外漢の空想的な「から元氣」だと私は言ひた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いのです。何故なら人がもち得る時間と精力には元來制限があります、そして人は同時に二つ若しくは二つ以上のことに自分の魂の總てを與へることは出來ません、餘程特異な人でない限りは。ですから或る一方の生活を深め且つ擴めやうとすれば、勢他方の或る生活に何等かの制限を加へなければならなくなるのは當然のことでもあり、またよりよく生きる上に必要なそして賢い方法ではないでせうか。その態度が積極的だとか消極的だとかいふこと丈で「いゝ」とか「わるい」とか「正しい」とか「正しくない」とかいふべきではなく、實は何に對して積極的だが何に對して消極的だか、何に價値をおき、何を撰擇し、何を抑へ、何に制限をおくかといふやうなことが私共の考ふべく、論ずべき問題なのだらうと私には思はれます。また苦痛や困難を避けてはならないといふやうなことをよく世間の人は言ひます。けれどそれも要するに一面の眞理であつて、もしそれが私共の生活を高め、私共の生命力を増大してくれないことには苦痛そのものに何の價値がありませう、それはいふ迄もないことです。この意味で私は十分の思慮ある撰擇を經ないで、苦痛困難の渦中に飛び込む或る種の勇者を無條件に賞讃する譯にはいきません。そしてこの點で私は人間の知力、理性といふものゝ必要とその價値とをも相當に認めやうとしてゐるものです。

次にまた或人はそんなに子供を產むことに不安と恐怖とがあるならば、避姙法を行へば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いいちやないかといふかも知れません。あなたも或意味で避姙を是認していらしたやうですね。(併し私はあなたのお書きになつたもの丈ではその是認の理由として內容ある何ものも殆ど見出せませんでした。否寧ろあなたが墮胎を只單に非常に不自然なことだ、自然を侮辱し、生命を輕視した行爲だといふ理由から「何處までも許しがたい罪惡である。」と斷定なさつたその見方で行くならば、避姙も亦當然あなたにとつては五十步百步の罪惡であるべきだと思はれます。何故なら人工をもつて生命の可能力を奪ふ不自然な行爲なのですから。さもなければ避姙はまだいゝが墮胎は惡い。墮胎はまだいゝが見殺しは惡い。といつたやうな感情論や常識論以上に出ないもののやうにも私には見えます。)私も避姙を決して罪惡だとは考へて居ません、のみならず、そこに正當な理由があつて、(といふのはその人が子供を產むことが、その人自身か種族か、又はその兩方の向上發展を害する場合、また例へば人口過多のため生活難といふ現象が起り、その結果、國民の疲弊、退化を來した時、一般に兒數を制限するやうな場合)そして有害でない方法によつて行はれる避姙なら、寧ろ知力の進步した文明人の特權であり、義務であるとさへ考へて居ます。そして私もまた或時は避姙の實行者でした。然るに何事でせう。避姙といふことを主觀的に見た私の感情は、私の內的な實感はこれとは全然相容れないものがあるのです。といつてそれは

罪惡感ではありません、併し實際にあたつて瞬間的に感ずる烈しい醜惡の感です。野枝さん、あなたはどうお思ひですか、私達戀するもの等の二個の異れる人格が結合、融和し、自他の存在を忘却する靈肉の法悦、絶對の境地の前に立ちながら、同時にその結果として現はれるかも計り知り難い未來の子供のことや、その種族に及ぼす影響などに自分達の瞬間の全き意識を分ち與へて、しかも或用意をするといふやうなことを。これは私にはどうしても自分自身を侮蔑し、ふたりの愛を汚辱する墮胎よりも寧ろ或意味で恐るべく、厭ふべき醜い、そして苦しい行爲としか思はれません。そして私はこの點に於ても常に人間の矛盾を感ずると共に皐月氏が「自分は人間の意識が性欲の結果に迄働き得ぬ不完全を喞ち乍ら、其時の來らんことを切に願つてゐる」と言はれたのに同情せずにはゐられないのです。

野枝さん。

私も自分がいよ／＼姙娠したのだと氣付いた時は、前に述べたやうな色々の理由から、ふだん子供をもつことに對して抱いてゐた不安と恐怖とを今更の如く一層明にそして突き詰めて感じました。と同時にあなたや皐月さんが（皐月さんのあの創作は姙娠中の氏の或時の夢から暗示を得られたものだそうですが）姙娠中に一度は囚はれたと同じやうな、墮

胎の空想に矢張り第一に襲はれたのでした、それはほんの最初の短い間のことでしたけれど。併し茲に私達をこの同じ墮胎といふ一つの考へに導いた不安、恐怖の原因に關しては多少の相異あることは認めなければなりません。といふのはあなたにしろ、皐月さんのあの創作にしろ、少くともそこに現はれてゐる丈で判斷すれば、その原因は貧困、即ち生活難といふ一事に盡きてゐるかのやうに見えます。あなたは現に「若しも私がその頃決して困つてゐなかつたらそんな考へを起しはしなかつたらうと思ふ。」と言つていらつしやいますし、また皐月氏の創作中の女性は頻りに自分は親としての資格がない、親としての責任を果すことが出來ないといふことを說いてゐますが、何故その資格がないのか、また何故その責任が果せないのか、その理由としては矢張り貧困といふこと以外別段これといつて具體的な、そして意識的な、內容あることに言ひ及んでは居りません。果しておふたりはほんとうに「性」としての婦人の生活――種族に對する婦人の天職――と「個人」としての婦人の自分自身の生活との間の矛盾衝突には左程苦しんでいられなかつたものなのでせうか。個人としての自覺なく、自分自身としての生活といふべきものを少しもまだもつてゐない在來の又は一般の日本婦人なら知らず、また何の敎養もない食べるといふことが生きることの全部である所謂下層社會の勞働婦人なら知らず、おふたりの如き婦人の上にこの種の

爭鬪を見ないのは私には却て不思議に感ぜられます。思ふに貧困から來る不安、苦痛、恐怖があまり大きいため、他の總てのものがそのかげに隱れてゐるのでせう。それともおふたりには、私の中になほあるやうな斯ういふ「個人」と「性」との間の爭鬪などは最早過去のものと化して今はそこに何か一段高い生活の中に兩者の調和統一を實際に於て贏得してゐられるからなのでせうか。私だつて何も貧乏といふことに無頓着でゐられる譯ではないのです、私達は今現に何の職業といふべきものもない、從つて一定の收入もないものですもの、そして私はかういふ絕え間ない生活の不安を一日だつて忘れたことがないのですもの、しかも私はあなたのやうに只漠然とした運命といふやうな都合のよささうなものに依つて、自分の不安と恐怖と當然自分が負けねばならぬ責任とをしばらくにしろまぎらしたり、またあなたの一種の敎育無能論（このお考には多少の眞理を含むのを私も拒みませんが、同時に人間生活と動物生活との區別を無視した多くの誤謬を含むものだと思ひます。）によつて親たるものが子供の敎育に對して當然有つべき大きな責任から逃れやうとするやうなことも出來ませんもの。（私はあなたがああでもお考へにならないことには到底堪へられなかつたほどお苦しかつたのだらうと察し得ないほど同情のないものでもないのです、併しそれが自己の責任に堪へられないものが自から意識せずして自己を欺く、云

はゞ女性的な、弱い、そして可愛い一種のあきらめであるやうに私には思はれるのです。（青鞜六月號七七頁參照）併しなほ矢張り私は貧困に基く不安の外に、否それ以上の不安として、個人としての自身の生活の向上發展を、自分自身の教養を妨げやしまいかといふことを忘れることは出來ません。もしまた私がこの上、教師とか、新聞雜誌記者とか、醫者とかいふやうな職業的な又は社會的な所謂公生涯なるものを有つてゐたとしたら、またこの方面に於て屹度今一つの抵觸を經驗しなければならなかつたことでせう。

次にあなたは親になる資格として、「本當に深く考へれば考へる程、私は未成熟のものでない限り、また或は缺陷を持つてゐる者とか、無能力者、白痴、狂者など、或る種の疾病をもつもの以外に、即ち普通の生活に堪へ得るものであつて生理的にも充分發育を遂げたものならば先づ資格はあるものにちがひないと思ひます。」と言つていらつしやいますが、生理的生活の外に心理的生活をもつた人間、殊に複雜な心理生活の外に或る社會關係と經濟事情の中に生きてゐる近代の婦人で、只これ丈けの資格を自身に具有してゐる丈でよく親たり得る十分の資格あるものとして安んじてゐられるものが實際あるでせうか。私にはこれ迄の婦人が自分の肉體の生命を助けるためや、小さな利己心から、又は貧困のためや、所謂それが不義の關係の結果であつた場合、世間に對する不面目や羞恥心などから墮胎し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのとは全く違つて、あなたがお示しになつたやうな親たる資格には缺けるところのないにも拘はらず、なほ親たる資格のないことゝ、その責任を果し得ないことを自覺して、または私が先にあげたやうな一自己の內なる異なれるそして相容れない二つまたは二つ以上の方面の生活間の鬪爭の結果、或る思慮と落付とをもつて靜に墮胎を行ふやうなものが、現代の若しくは將來の婦人の中には隨分あり得べく、また考へらるべきことのやうに思はれます。歐米の所謂解放されたと稱する婦人の中にはそれが正しいにせよ、正しくないにせよ、また婦人自身にとつて幸福なことにせよ、不幸なことにせよ、自己の藝術生活のために、或る科學的な研究のために、或はまた社會的事業のために――それが個人としての自分の精神生活を高めるのみならず、文明にも何等かの貢獻をするものだといふ信念のもとで――避姙したり、墮胎したりしたものが既にこれ迄も少なからずあつたことだらうと私は想像します。かういふ原因や理由から行はれた墮胎をも只それが生命を侮蔑した不自然なことだからといふおほざつぱな理由から、一般的にそして絶對的に許しがたい罪惡であると斷定し去ることはどういふものでせう。寧ろ今日の正しい文明は益々生命を重ずるが故に、それを自然のまゝに放棄し、只それが存續や數を增すことのみをもつて足れりとせず、却てその數を減じて迄もその質をよりよくすることによつて、生命そのものゝ進化

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

向上に努力してゐるのではないでせうか。

併し、あなたのこの墮胎否定說若しくは罪惡說を何のしつかりとした根據のないをはんの其場のお意見として左程の價値も置き得ない私も、あなたが、皐月さんのあの墮胎肯定說に何がなんでも反對せずにはゐられなかつたその止みがたい强い感情は十分に認めて居ります。そしてその感情のよつて來るところはあなたが仰有るやうなそんな不自然だからとか、生命を侮辱してゐるからだとかいふやうなものではなく、實はあなたの半ば無意識な本能的な母としての子に對する烈しい愛情そのものの現はれだといふことを私は見逃すことが出來ません。――なほ其外にあなた自身の反省をまだ經てゐない因習的な一般道德感情も含まれてゐるやうに思はれます――そしてあなたは旣に母としての愛情を十分經驗された婦人であり、皐月氏はまだ母としての經驗のない婦人であることを思ふときそしてそこからおふたりの意見の相異が來てゐることを思ふとき私はその點に寧ろ或大きな興味と意味とを感ずるものであります。

野枝さん、私は自分の心に墮胎といふことが浮んでゐたときも、あなたが御感じになつたといふやうな「良心のいたみ」は私にはありませんでした。それが日本の法律に於て、犯罪行爲、(併し墮胎といふことを無條件に犯罪とするならば國家は同時に、他方に於て、母

と子供とを保護する法律をも有つべきだと思ひます、或はまた育兒院とか養育院とかの設備を社會をして完全にさすべきでせう。さもなければ大變片手落ちなことだと私は思ひます。」とされてゐることや、肉體を害するといふおそれが伴ふといふやうな點に就いての多少の不安が何處かに動いてゐたことは認めますけれど、私の心に一番問題となつて懸つてゐたのは矢張り、今子供を否定することが、自分達の現在及未來の生活全體のために果して最も正しいそして賢いことだらうか、自分は現在の不安や恐怖のために、一時の感情のために全體と未來とに亘る十分の考察を缺いてゐるやうなことはあるまいか、そして他日悔いるやうなことはあるまいかといふやうな寧ろ根本的なことなのでした。

　そして私はかういふ自分の智惠の完全性に對する不信の中で、色々な困難な問題を心に繰り返しながら、その儘幾日かを經過しました。

　然るにその間に私は次のやうなことをだん／＼意識し始めるやうになつて來ました。今が今まで自分の中には全くないものと信じきつてゐた子供に對する欲望や、母たらむとする欲望が實は自分の愛の中にも潜んでゐるのである、只他の欲望の大きいため、また多いがためそれに蔽ひ隱されて表面に現はれて來ないといふ迄で。否々ふたりの愛の憧憬そのもの丶中にすでに／＼最初から子供を欲する意志が藏されてゐたのではあるまいか、只自

分自身それを明に意識し得ずにゐたといふ迄で。そして私は自分の内部に於ける欲求も、意志もなくして、子供を產み、母となるものを、母たる第一資格さへ有たないものとして一種罪惡であるかの如く思ひもし、またそれを人間の意志と自然の結果との間に存する大なる矛盾であるかのやうに感じてゐたことの、反省と考慮に於てまだ至らないところのあつたことを感ずると共に、一たび愛の生活を肯定し、そして自から選んでこの共同生活にはいつた自分が、しかも、今その愛に生き、その愛を深め且つ高めることに努めつゝあるその同じ自分が、その愛の創造であり、解答である子供のみをどうして否定し得やう、それはあまりに矛盾した、不徹底な行爲である、もし子供を拒まうとならば、愛の生活全體をまづ拒むべきであると。なほまた私はこんなことも考へました、よし自分は自分の他の方面の生活のために、自分の魂のすべてを子供の世話や敎育に與へることが出來ないにしても、そしてそれは成程自分にとつては苦しいことであり、子供にとつても不幸なことであるにしても、それでもなほ全く無自覺な無智な劣等な女から、しかも愛なき結合の中から生れ、さういふ母の無責任な手によつて育てられる今日の日本の多數の子供に比較すれば、それは乾度より優れた、そしてより幸福なものに相違ないと。

かうして私の心からは、いつか墮胎といふやうな考へが全く消え去つて仕舞ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

不安と恐怖と限りなき責任感と共に、一歩、一歩近づきつゝあるこの未知の世界に對して、新しい人生に對して、私は一種の貪欲心と、不思議な希望と期待と歡びとさへ經驗し始めたのです。のみならずふたりの愛の結合はこれによつて一段の深さと、眞面目さと、確實さとを増したやうにも思はれて來ました。野枝さん、私がエレンケイの The Renaissance of Motherhood を讀んだのは丁度この間から、この後にかけてのことでした。時が時だつた丈、私は色々考へさせられずにはゐられませんでした。併しこの限りある手紙の中でその思想の紹介をしてゐる譯にはいきませんから止めませう、只、私は今私の心に浮んだそして同じ書に引用されてゐた、ロバート、ブローニングの左の句を此處に書き付けること丈にして。

Womanliness Means only motherhood; all love begins and ends there.

併し野枝さん、

これで私の生活の中に起つてゐる、あの爭鬪が解決された譯では決してありません。また忘れられたわけでも、まぎらされた譯でもありません。寧ろ人生に於ける子供の重大とそれが女子の生活に於ける意義と價値とを考へれば考へるほど、そして Motherhood の尊

さを知れば知るほど、從つて子供の世話や教育を只社會や國家に、又は他人の手に委ねて安んじてゐらるべきものでないことを思へば思ふほど却てその鬪爭は慘ましさを增すばかりです。あなたはほんとうに今度のお子さんはお國へ殘していらつしやる御考なのですかそしてもうさう御決心がついてゐるのですか。私は自分で育てやうか、それとも他に托さうかと實は今まだ迷つてゐる最中です。併したとへそのいづれにしても、今後の私の生活は分裂の苦痛を經驗せずにはすまないでせう。私の魂と私のもち得る限りある時間と精力とは自分の教養と、仕事と、生活のための職業と愛人と、子供と、家庭との上にどのやうにか分け與へられて行かねばならないことでせう。そして私は私にとつて欠くべからざる第一要件である精神集注を今後は一層亂されもし、減じさせられもして行くことでせう。

ミセス・ギルマン一派の婦人論者は、婦人を今日の家庭生活に於ける雜務から脫せしめ、社會の人として經濟的獨立を有するものとしなければ、そして育兒、教育、料理などは總てそれ〴〵の專門家の手に任せるやうにしなければ婦人の生活には眞の自由も解放も來ないといふやうなことを言つて居ます。ところがエレン・ケイは是に反して、是等の所謂解放せられたる婦人を再びその家庭に引き戻し、愛の生活の中に、就中母たることのなかに最も高く美しき統一と調和ある婦人の眞生活を發見させやうとして居ります。彼女の所謂「大

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛」こそ人間生活の根柢に横はる相容れない諸力を、對立せる二元を調和統一するところのものなのです。

それはともあれ、私は今私自身の生活の中に存するこの色々な方面や部分をいかに撰擇し、統一し、調和し行くべきか、これが私の前に横はつてゐる、否私自身の生活の中に含まれてゐる重大なそして困難な、眞に意義あり、內容ある具體的な婦人問題なのです。私は今後の私の生活をもつて、この大きな問題を解決して行かねばなりません。しかもこれは決して私一個の問題ではない。今後の日本婦人の多くの上に蔽ひかかつてゐる共通の問題だと私は信じます。

以　上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

別居に就て思ふ事ども――岩野清

今度私と岩野泡鳴氏とは別居をする事となりました。そして岩野は私の家に雇つてゐた筆記者蒲原英江と云ふ婦人と同居する事になりました。私は病氣でまだ一月位は醫者の手を離れる事は出來ない身體ですが、かうした突發した事件の爲に、後始末や、考へなければならぬ事や種々雜多な事が內面からも外面からも蝟集して來たので、病氣の事もそれ切りとして、かうして居りますが、夜はまだ安眠が出來ません。然し私は一體に感情的にはならない女のやうです。これまで冷靜に考へても來たし、今も靜かに理性で行動してゐるのでございますが、まだ纒めて原稿に書くことが出來ません。で、斷片ですが、兎に角話したいとおもひます。

岩野がその女との關係を自白したのは先月の二十五日でございました。その自白の要點を申しますと、自分は今度、蒲原英江に對して愛を感じた。しかしあなたに對する尊敬には何等の變化もない。つまりあなたに得られないものを、他の婦人から補ふばかりの事で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

根柢に於ては何らの動搖もない。それであなたが愛を絶對に所有しなければならないと云はなければ現狀は維持する事が出來る。と云ふのでありました。

この自白の內容は岩野泡鳴氏の從來書いて來たものとは恐しい程矛盾してゐる事です。それで私はその甚しい矛盾を詰問しました。ことにその女との關係は、最初新聞記者にむかつては、淸子の決心をきいて別居する事となつてから始まつたのだと白々しい噓を申してゐますが、實は、六月の頃から、さうであつた事は私が知つてゐるのです。同時に二人の女を持つてゐたその不純な態度を私は質問しました。

それに就いて單に、岩野は、自分は今考へが變つて來てゐるので、昔云つた通りに今日では思つては居らない。兎に角、一人の女から得られないものを他の女から補つてもいいと考へる。それに對して、自分は何ら疚しい事もないとかういふのです。

この自白を聞いたのが前にも申す通り二十五日の晩でしたから、丁度それから十日の間私は私としてのしつかりした解決をつけるまでは、二人の行動に對して、際立つた干涉はしないと云ふ事を考へて、それを岩野にも話しました。それには兎も角も女と一言申さねばならないと思つて、二十七日の朝いつもの通り來た時に、呼んで話しました。私がもう

岩野からさうした二人の間を聞いてゐると云ふ事は、女も亦岩野から聞いてゐるに相違ありませんでしたけれども私からも話さうと思つたのです。そして私は、この際私はあなたに對して普通女の云ふやうな怨み言も云はなければ、又妨害もしなければ、元よりあなたと愛を爭はうとも思はない。今まで波瀾もなく、純一に保たれて來た私の家庭が、あなた方によつて破壞されたと云ふ事は、私に取つて取り返す事の出來ない痛恨ではあつたのだが、もう事件がかうなつたからは私としては何も云ひたくない。しかしあなたは弱い女であつた。もとより今度の事は男から誘惑されて、あなたが弱いために、それに應じたまでであらう。誘惑の前に立つてあなたに何等の反省のなかつたのが殘念であるが、しかし、かうなつて見れば、どうすることも出來ない。」あなたは最近私を避けるやうに〳〵としてゐるが、そんなにする事もない。「やがて私も私としてしつかりした解決をつけようと思つてゐると申しました。

女は暫く默つてゐましたが、重々申譯がありません。私が東京に來なかつたならば、こんな不幸な事は起らなかつたでありましたらうにと申しました。

この事件の解決をどうつけるかと云ふ事は隨分苦しい事ではありましたが、自分の事は

自分でするのでなければなりませんし、また、この場合私としてはどうしてもいい加減には出來ませんので隨分考へたのであります。そして私の考の成立した頃、平塚さんを訪問して、大體の話を致しました。

男とその女とが自白以前からさうした事になつてゐたのを私が默視してゐたのは、私としては二人に反省の時をあたへたのであります。かう私が申しますと岩野は、これは自分の欲求だから反省する餘地はない。勿論罪惡ではない。自分は家庭なんかを始めから考へてはゐないとともに、自分の生活が二つのものから補ふことの必要を感じて來た以上、その必要に從へばいいまでで、強いて自分から外形を破壞することはいらないと思つた、と申すのであります。

私たちが一緒になり、共同生活をするやうになつたのは五年まへでありました。その時の私の考では、自分の戀愛は先づ靈でなければならない、そして同居してゐる中にその自然な經路のもとに靈肉一致する時、はじめて純一なる戀愛となり、眞面目な生活がいとなまれるやうになる、それとともにもし男が他の婦人に對して愛を感じた時、たとへそれが普通の婦人であらうが、醜業婦であらうが、毫末なりとも愛が分けられる時、その時が我々の愛の生活の最後である。あからさまに、その時は云つて貰ひたいと云ふ事が二人の中

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

には約束されて居りました。

戀愛の撰擇は自由でありますが、そこには理智と反省とが働かなければその戀愛は下劣なものであつて、絕對の自由に盲動するものは禽獸の慾であり、それには高い價値のありやう筈はない。その戀愛が盲目であると云ふ事は尊敬すべき事ではない。殊に私の思想では、戀愛は靈から肉に及ぶべきものであつて、肉に始まつて、漸く靈の目醒めるやうな結合は在來の無智な習慣どほりの事であつて、私どもにはそんな無自覺な事は耐へられない私はそんな風に成立する戀愛をいいとおもふ事が出來ません。

この意味で、岩野とその女との戀愛が本當の純一な、本當に眞劍な、自覺のある、靈から入つてゐるものとすれば、二人に對して私は尊敬を惜しむものではありません。

しかし、よく〳〵考へて見るとどうもさうではない。殊に其後の二人には、益々私の心から二人に對する尊敬と友情とを奪つてゆく行動が現されてゐます。少くともあんな生活には何の權威と確信と立派さと眞面目とがあるであらうかと疑はしめるばかりでなく、輕蔑の念をまで起させます。

岩野の先妻の子供が當年十三歳でこちらの方で引取つてゐたのですが、これを岩野と私とのどちらにでも行かうと思ふ方に行くがいい。もう一人の人間としての判斷力も持つてゐるであらうから、自分の意志に從つて去就を定めるやうにと申しますと、私の方に止まりたいと申しますので、私の方に居らせる事に致しました。あの子は父親に馴染んで居りません。

私は離婚したのではありません。これが、あやまり傳へられてゐるかはしれませんが離婚はしないのであります。別居をしたと云ふまでであつて、戸籍は動かしません。

さて愈々泡鳴氏の出ると云ふ事に解決した時に子供から父を奪ふといふ事がいかにも殘酷なやうには感じられましたが、しかしまた一面から見れば父親の不純と不眞面目から暗くされる家庭の空氣の中で子供を育てるよりも、たとへそれがどんなに苦しい痛々しい事であつても、「生活の眞面目」を知らせるには、私一人の愛情で、子供はよく育つてゆくと信じて居ります。

私は斷じて妥協をしません。また屈從をしません。自分の力に就いて、自分と云ふ意識

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のはつきりしなかつた時代には、女はかういふ場合、かうした男の不道德に對して泣寢入をしたことでありませう。けれども自分と云ふものの力を認めるものに取つては、たとへ倒れるまでも自分の人間として生きて行くべき純一なる生活に生きて行くのが本當ぢやないかと思ひます。兎に角、私は、自分が弱いであらうか、強いであらうか、自分一人の力で、戰つて見ようと思ひます。そして、これを動機として、更に男子に對して、私の一層考へたり云つたりしなければならぬ事もありますから。

解決して了つてからは、ただもう自分が戰へばいいので、大變安らかな明るい氣持が致して居ります。經濟の方面にも、心の方面にも、五六年前の元氣な活動が致して見たいのです。

私はまだ岩野の新しい家へは一度も參りません。近所へもあまり出ません。下らぬ誤解を生じて、私の態度を忖度（そんたく）されるのは嫌ですから、何事にも愼重に致して居ります。

（八月十八日）

此一編は岩野淸氏が巣鴨のお宅に訪問された生田花世氏が、その時の談話を書いて下すつたものです。

墮胎に就て――山田わか

（松本悟郎氏の『青鞜の發賣禁止に就て』を讀んで）

幸福を得たい。此の心が私達人間の心を刺戟し私達を働かせます。けれども人間は四六時中幸福を求めて居ながら何故世の中には不幸が絶えないのでせう。それに付いて私はこう思ひます。「人が自然の法則に逆つた行爲をするからだ」と。

今日の文明は人間が自然界の法則を會得し、そして其の自然の力を人間に都合のいゝやうに支配した處にあるのだと云ふ事は誰でも知つて居ます。が併し此の文明がほんとうにあらゆる人間に幸福を感ぜしめて居るかどうかは分りません。目の弱い私なぞは、ジー〳〵音をたてゝギラ〳〵する瓦斯や電燈の下で細い活字を讀まなければならない時、又は疲れた目をチカ〳〵さゝれるやうに感じる時、いつでも夢のやうに覺へて居る行燈の灯をなつかしく思ひ出します。柔い其の火影でおばアさんが下女を相手に平和らしく糸をぶん〳〵紡いで居た、其の光景がたまらなく戀しくなります。と云つて私は文明を呪ふわけではありません。よしんば瓦斯や電燈が私の目をつぶすやうに私を苦しめ、さいなまうとも其れは病的な私の目が惡いのだから、つまり與へられた力以上に無理に目を使つた、則ち自然

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の法則に逆つた結果なのだから、何とか工夫してこれ等の燈火と自分の目との調和をとればいゝので、これを理由として一般の人が大きな利益を蒙つて居るこれ等の燈火を否定する事は出來ません。要するに世界はどう／＼と進歩して行きます。其の進歩に歩調を揃へて行く事は確かに一ッの幸福です。だのに偶々病的な人が自分の缺點を忘れて、進歩の潮流を無視しようとしたり、逆つたりします。それでも、それが其の病的な人、一人で云つて居る間はまだしもですが、時とすると大勢の人が其れに雷同して、大きな眞理でも發見されたやうに騷ぐやうになつては沙汰の限りです。

私達は人智の及ぶ限りを盡して自然の法則を發見し其の法則に素直に從つて生きて行く處に無限の幸福を得られます。けれども自然の法則に素直に從ふと云ふ事は、やがて私達の奮鬪の原因になります。私達が自然の道だと信じて其處を進んで行かうとする時に、其の途中に立ちはだかつて居る邪魔もの――偏見、惡德の類――を私達はどうしても爭つて取り除いて行く必要があります。宗教も哲學も科學も要するに此の自然の法則を發見する又は此の法則の働きを妨げる障害物を取り除く道具に過ぎません。

けれども、凡ての事柄に付いて、これが自然の法則だと絶對に定める事は、今日の人智では未だ出來ません。宗教、哲學、科學によつて先づこれだらうと朧ながらも思惟し得た

道を、道德と云ふのです。ですから千古不變の道德なぞは先づ今の處では無いと云うてもいゝ位ひです。道德は人智の進むに從つて着々變更されねばならぬ運命をもつて居ります。

處が複雜極まる現代に生きて、昨日の惡は今日の善、今日の善も明日は惡と絕えず變遷して行く中に居ても、私達は太陽が萬物を暖め育てゝ行く如く、母の愛が人類をうるほし育てゝ行く事の大きな力、及び其の善なる事の動かすべからざる事實を疑ふ餘地はありません。愛人に對する女の愛は隨分力强いものですが、併し子に對する母の愛程、深くはありません。ほんとうの「女らしさ」は母に始まると有名な詩人は歌つて居ります。あらゆる道德は母の愛から出發したとエレン・ケイは云つて居ります。

動物の境を未だ脫しきれないやうな人間が自分達には仕末をつけきれない程、澤山の子を生み並べて、地獄のやうな家庭をつくつて居るのを、私達はあまりたび〱見せられるので、子を生む事を輕んずる傾きがありますが、これは間違つて居ります。中世紀の歐洲の智識階級は俗衆が、むやみに、無反省に、澤山の子を生み出す、淺ましい有樣を見て、寺院に逃れたり、獨身生活を送つたりしたそうですが、其のために次の時代は下等な人間の子計り殘つて社會は大分退步したと云ふ話しです。

ですから、いつの時代でも、智識階級が精神的の人間が、今、自分の肉體となつて現れ

て居る、小さな自分計りを見て居ないで、自分と云ふものを、もつと廣く、もつと長くして見なければなりません。其處に、又、個人としての無限な喜び幸福があるのです。此の頃、自我と云ふ言葉が大分はやるやうですが、此の自我とは一體なにでせう。自我は貴いものには相違ありません。世界を得ても自分を失つては何にもなりませんから。けれども人間が昔の穴居者であつた時代はどうであつたか、又超人に達した曉にはどうであるかは分りませんが、先づ、今日の處では、私達は社會によつて育てられ、又社會のために働かねばならぬやうに、つくられてあります。絶對の自我と云ふものはありません。勿論一人々々に與へられた生命及び天分は他の人の犯すべからざるもの、一個の威嚴ある人格には相違ないのですが、それでも私達人間は時間的に空間的に大部分他の人のお世話になつて生きて居るのです。我と云ふ人間が出來るには、第一、兩親と云ふ、二個の人間が必要でした。二個の人間の向ふには四人、其う向ふには八人と云ふやうに。そう云ふたからとて其の人達が有り難いと云ふ意味ではないのです。そう云ふ風につながつて居ると云ふ事です。空間的に云つてもそうです。社會から、全く、きりはなされた個人などと云ふものは想像出來ませんが、かりに無理に、そう云ふ人間があつたとしたら、その人は野獸と等しいものでせう。何と云ふても今日の人間は、今日の社會に育てられたのです。今迄、あま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り個性が踏附けられて居たから、其の反動で自我と云ふ言葉が大へん勢ひを得ました。けれども各々の天分をきづゝけられずに育てゝ行かれゝば、社會がそれを妨げさへしなければ、そう自我を叫ぶ必要はないのです。要するに、前にも申ましたが私は絶對の自我の存在をみとめません。自分が社會にくッついて行くか、自分が社會をひきいて行くか、どつちかです。つまり、自分一人を守つて社會を無視して居たのでは、人間が生きて居る目的なる、幸福を得る事は、とうてい、出來ません。だから私達のどんな小さな行ひでも、其れが社會によつて又天上の神によつて批准されると信じる時、私達は如何なるインスピレーションを受けるでせうか。其の悦びは、それを實驗した人でなくては、恐らくは、分らないでせう。

こう考へて來て、私は墮胎も避妊も等しく大きな罪惡だと申ます。個人の幸福、並びに國の榮を破壞する大きな不德です。配偶を持つのは自由、天から附與された、人の權利なのですが、併し權利は享有して、其れから必然わいて起る結果を處理する義務を逃れようとするのは最醜惡な卑怯です。

「それはそうに違ひありません。大體としては。けれども此の複雜な社會の一人々々の場合ひに付いて考へて見たなら、そう計り云つて居られない時があるでせう。たとへば、今

自分の收入が、いくら、きりつめても自分一人食べるだけしかない。子供を持つたら、二人とも飢へなければならない時はどうします」

と、私が私の意見を云ふた時、私の尊敬して居る友人は注意してくれました。が、親になる資格がないならば、配偶を持つ前に、其の資格を先づつくるのが人の義務です。周圍の狀態が子を育てるに不適當ならば、其の狀態を避けるか又は改良するのが順序です。

「そんな事を云つて居たら、若い盛りを禁慾で過さなければならないではないか」

と云ふ人があるかも知れません。けれども、子を育てるに適當な狀態及び資格をつくるには、(その程度に、きりはないが、少なくとも墮胎の避姙のとさわがなくてもいゝ程度の)何にも何十年とかゝるわけのものではありません。又子供の持つて生れた天分をひき出してやる事は、あながち、物質の力ばかりではないでせう。其の資格をつくる間の自制力すら缺いて居るやうな不德義な人間なら、とても話相手にはなりません。私はそう云ふ人間をどし〳〵罰する法律がほしいと常に思つて居ります。法律は殊に刑法は下級な人間を制裁する機關です。ですから、智識階級は刑法などには、とつくに、超越して居る筈です。處がたとへ一言半句でも社會に對してものを云ふ位ひの位置の人の中に權利は主張して義務はまぬがれやうなぞとする橫着者が多いから、社會は複雜に複雜を重ね、罪惡が罪惡を

生むのです。

「けれども配偶を持つ時には、育てられる見込みがあつても、不時の出來事のために窮した場合ひには？」

と問はれるなら、そう云ふ場合ひには、何事を打ちすてゝも、食ふために働かねばなりません。よし、乞食をしても子の生命をつないで居ます。と答へます。

「食つて生きて居るだけが、人間の目的なら、それでいゝでせうが、それで滿足が出來ますか。子は自分よりは利口にするのが親の義務ではないですか？」

子はなほの事自分だつて利口になつて行かなければならないですが、其の場合ひに、とにかく食う事がさきです。そうして居るうちに、だん〳〵餘裕をつくつて行く事が出來ます。

「さきの事は分らない。もし何時迄も餘裕が出來なかつたら？」

全くさきの事は分りません。子があつてもなくても。唯、私達は與へられた生命を大事に保存して、其の瞬間のベストを盡して居るのがほんとうの生き方だと思ひます。

「まア、私達はそう云つて居られるとして、下層社會へ行つたらどうでせう。悲慘な生活をして居る彼等に墮胎を一がいに罪惡ときめて、しまつたら、可哀想な場合がいくらもあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るでせう。母子が食ふ事が出來ない場合はこうとか、幾人以上の子を持つた時はあゝとか國家が保證を與へて居ればだが、それがないから。のみならず不健全な子供を澤山殘されるより、墮胎さしてしまつた方が、よかないかしら?」

追付、國家はそう云ふ設備をしなければならないでせう。が、さしあたり其れがないからと云ふて、人間以上の力がつくつた生命を殺し、のみならず親の生命をも危ふするやうな事柄を、人命財産の保護を標榜して立つて居る國家が、正當として許す事が出來ませうか。盜みは大體として惡い。けれども盜みをする一人々々の心のうちへ這込つて見たら隨分同情の涙を流す場合が多い。だから困つた場合には盜んでもいゝと公然許して置けるでせうか。不完全極まる現社會の富の分配法は隨分不公平には相違ありませんが、それだからと云ふて、盜みを自由に許して置いたら、群民の制裁がつかないではありませんか。子の事に付いても「出來たら下せ」主義で、性交をほしいまゝにされたら其の結果はどうでせう其の悲慘な狀態は、或る資格の出來る迄配偶を持たせないのが酷である處の話ではないでせう。そして、不完全ながらも、今日迄向上して來た人間が、又後もどりして、野蠻時代に歸る事になるのではないでせうか。

勿論私の云ふて來た事は通則です。變則の場合はいくらもありませう。此の變則の場合

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にこそ、それぐ\處置をする方法を講じなければならないでせう。が變則の場合を標準として大體を誤まつてはなりません。

必要は道德をも法律をも超越した威嚴をもつて居ます。道德と云ひ、法律と云ひ、要するに之れは人類の幸福を增進せしむる、てだてとして存在するものなのですから、或る場合に大の幸福と小の幸福とが衝突したならば、社會は人類の幸福と云ふ立場から、小を殺して大を救ひます。親の生命を救ふために胎兒を殺すのと、墮胎とは、結果に於ては同じでも、其の動機はまるで違ひます。ですから、道德及び法律の上からは全く性質の違つたものなのです。

生命の可能性たる精蟲を無益に殺すやうな事柄や施設が公然許されてあつたからとて、其れが正しいからではないのでせう。人間が未だ全く無智であつた、何千年の昔から、地上に根強く、はびこつた此の猛烈な力を今日の施政者はどうする事も出來ないのです。それで餘儀なく姑息な制限をほどこして許してある迄です。宗教家にしても、道學者にしても、其れを罪惡と認めないのではなく、唯、其れに對抗して行くだけの大きな力の準備が未だ出來ないのだと私は思ひます。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

森の大樹——與謝野晶子

ああ森の巨人、
千年の大樹よ、
わたしはおまへの前に
一人のつつましい自然崇拜教徒である。

おまへはダビデ王のやうに
勇ましい拳を上げて
地上の赦しがたい
何の惡を打たうとするのか、
また、おまへはアトラス王が
世界を背中に負つて居るやうに、
かの青空と太陽とを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兩手で支へようとするのか。

そしてまた、おまへは
どうやら、心の奥で、
常に惱み、
常にじつと忍んで居る。
それがわたしに解る、
おまへの鬱蒼たる枝葉(えだは)が
休む間なしに汗を流し、
休む間なしに戰(わな)くので。
さう想つておまへを仰ぐと、
希臘(ギリシャ)鬪士(たうし)の胴のやうな
おまへの逞(たくま)しい幹(みき)が
全世界の苦痛の重さを
唯ひとりで背負つて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

永遠の巾に立つて居るやうに見える。

或時、風と戰つては、
おまへの梢は波のやうに逆立ち、
荒海の響を立てて
勝利の歌を揚げ、
また或時、積む雪に壓されながらも
おまへの目は日光の前に赤く笑つて居る。

千年の大樹よ、
蜉蝣の命を持つ人間のわたしが
どんなにおまへに由つて
元氣づけられることぞ。
わたしはおまへの蔭を踏んで思ひ、
おまへの幹を撫でて歌つて居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ああ願くは、死後にも、
わたしはおまへの根方に葬られて、
おまへの清らかな樹液と
隠れた熱い涙とを吸ひながら、
更にわたしの地下の
飽くことを知らぬ愛情を續けたい。

なつかしい大樹よ、
もう、おまへは森に居ない、
常にわたしの魂の上に
爽やかな廣い蔭を投げて居る。

（一九一五年八月作）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

百首歌――三ケ島葭

かにかくに生きむと思ふいつよりかかかる心とわれなりにけむ

今日をなほうしといふなりいかばかり後をたのめるおのれなるらむ

しばらくはそのかなしみをわすれけりわれに流るるなみだをばみて

世界みなととのひはててわれひとり衣もつけぬ今日にあらぬか

君がため身をも忘れて走りゆくそのおろかさもくやしからまし

いまさらにかへすすべなきそのかみを忘れざるこそくやしかりけれ

こひしさにいのち死ぬとも君がため祈ることなどなかれとおもふ

夏來る夏花咲くと時ならぬ花さくごとくおどろきにけり

死ぬばかりわれは妬ましいかばかり君はかの子の戀しからまし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山の井の釣瓶をおもふ青あらし青葉の中に竿のすべれば
ひとりゐて君を思へば初夏の若葉に強き風の音する
かなしさもなほこひしさのごとからむ美しからむ別れてあらば
可愛ゆさのはてしなき人さながらにわが子の如くはてしなきひと
おのづから君に怖づるやわがこころうれしき人を見れどをどらず
休むまもたのしむひまもなかりけりおのれまことに人をめづれば
あぢきなく心はたえず眠るなり身の苦しさは歎かざれども
くるしさを忍ぶがごとき姿してただゆくりなくものを思へる
何ごとも知らであらまし君とわが異ることも知らであらまし
いそいそと門の内掃く一人の囚徒ありけり鎖なかりき
待たるれば明日の糧なきまづしさも忘れてひたにゆかまほしけれ
眞中なほ赤き藁火の黒髪におほはるるごとく灰となりゆく

交りの深しといふもみ心のただみ心のふかきなりけり

何よりもわが子のむつき乾けるがうれしき身なり春の日あたり

世に生きて甲斐なきなげき忘れまし子には尊き母の身なりし

ただに子の眠ればこころ何事かなしをへしごと安らふなりけり

おもふこと日にかはりゆく身となりぬいのちは断たぬわれと思へど

あぢきなき身とも思はずいそいそと厨に立ちぬ客人のため

君と子とすこやかなればみづからの病もいつか忘られにけり

わけ入れば雑木の林ことごとく楓の如き芽を吹きてをり

かたはらの君に怖ぢてか足らひてかわれの心はさゆらぎもせず

一日を一日とだに思ひえず何をなしつつ暮す身ならむ

添寝する身に木蓮の花見えて病む子も今は睡りたるかな

おのれまづ髪など梳かばありし日によみがへりつつ歌ひうべきか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心あるわれにもあらでわが子をばなほいけにへの如く思へり

子の泣くにすべなく起きて朝月のかげふみゆけば道に花咲く

おとなしくいねてまつとも汝をおきて我れ徒づらにいづちゆくべき

あめつちのひろきをめでんやすらかに眠りたる子のたまものとして

爪立てゝ我をつかめる手の力ゆるぶが如し子の眠りつく

ものたらで泣きたるあとのわが心おもはゆきまで明るくなりぬ

夕靄のなかになげきて立ちをれば狂ひてひとり吠えたつる犬

かにかくにおそかりしかなあやまちと今知ることは悔しからねど

命をば命とおもふさばかりに寂しく生くる心となりぬ

かなしさに身をも忘れていでし家をわれとしもなくかへりみにけり

求めむか君と別るるかなしみのなかにいささかひそむいのちを

ゆるされし今もなほそのあやまちのおそろしくして口になしえず

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君がため涙にくれてあることも君をおもへばかたりかねつつ

心よりうすきあかりのさしそめぬ眞暗の道を静かにゆけば

やうやくにとりなほされしみこころにまた新らしく涙わくかな

朝の空流るる水のここちしぬ梢の若葉風になびけば

今更に思へばこころこそばゆしわが子を眺めわれを母かと

缺くるなき愛もはかなき心地しぬ思ひめぐらす時のなければ

まことには子のする咳におどろきてなげうつ筆を持てる身なりし

この子などわれの命を奪ふべきわれいたづらに身をば疲らす

まづ何をおぼえそむらむ負はれてはかまどに燃ゆる火など覗く子

あるときの心にかへる束の間はたへがたきまでもののなつかし

みづからを忘れたるまのこころよさ忘れがたさに物思ひする

相あれば君が心をわれとなくよそになすべきおのれなるらむ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わがこゝろ人を妬むにさきだちてののしりのこゑあぐるなりけり

このうれひわが身一つにかかるなり今はただかくおごそかにいふ

美しき夢とこしへたたへましはかなくせしはおのれなるゆゑ

わが愁ややうやく消えぬかく思ふいとまあらせず心ゆるびぬ

あまりにも眠るをさな子いねすぐることはなきやとまた憂ひつつ

安らひてわがなすことをなしうべきそのゆたけさをまづねがふなり

やうやくにひとの心のなごむとき別れんとこそ言はまほしけれ

何となくすさべる影の目にうかべまことやすらふ身とは思へど

君にえしおのがこころの靜けさも味ははずして何を思はむ

さびしさにさまよひ來しと知らるるは口惜しけれど去りがたきかな

大いなることなしはてし時のごとまづ悲しみを歌ひいだしぬ

あやまれる戀のみをせし我なるか今こそ戀のこひしかりけれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君思ひいねがたかりし夜のごとく家のことのみ心にかかる

歯入屋の殘して去りし鋸屑(をがくづ)を軒ばに見るもはらだたしけれ

こともなきけふに足らへるわがこころ呪はしうして悶えそめけり

親のかほけさやうやくに見いでたる瞳はいまだ水のごとしも

可愛ゆさにわれを忘れてあやす顔雲のごとくも子にはうつらむ

打ちつづく塀の棘死の色よりもあざやかなりし囚人の服

ふとみればおのが身に曳く鎖をも忘れしごとく土を運べり

よきおもひ湧くにさへ似てわが心ふるきことのみ思ひつづくる

疲れはて歌も書きえぬ憂き身よりうれしや乳のほどばしること

わが道を開くが如くしたまへる君うらめしき夕まぐれかな

まづわれのかなしき心まぎらはす子守歌ともなりにけるかな

しみじみと身の甲斐なさをおもへども涙もいでず立つすべもなし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あはれにも怒るよしなき身となりぬいささかものを言はせたまへば

何なればわれはなしつゝなげうちて今やうやくに憂しとつぶやく

つと溺ける涙のうちにみかへれば夢とうつつのさかひだに無し

やうやくに落ちつくこころは心また人戀しさにえたえざらまし

悲しさに涙ながせどなほ我は泣ける人とはおぼえざるかな

はしたなきものとおもへどみづからはなげうちがたきみづからのこと

酔ひしまま君がこころに酔ひしまま思ひがたきやみづからのこと

恥をさへ忘れはてたる身のあはれ人の中をばうなだれてゆく

埒もなく使はるるをばうしとせず身のせわしさを興がりぬわれ

新らしくおのがむかへしけふの日をまたみづからのさまたげとする

膝のうへ兎のごとくはねあがる子をば抱きてものを思へり

何とせむおのがなやみを押しかくすそれにすぎざるわれのさとりを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飽きはてて別れはしつれわが怒りつのれば更に逢はまほしけれ

いつとなく君に馴れけりかなしみになるる心も悲しきものを

日もすがら母の涙にひたる子の夕べとなれば父に抱かる

鈴ふればその鈴の音を食はむとするにやあはれわが子口あく

戀にさへ倦めるかあはれわが心いま子のほかに何ものもなし

初夏の光の白さめざめたる束の間はなほいのちありけり

詠草

青鞜社詠草として、ひろく短歌を募る。毎月十五日までに日月社編輯部へ、青鞜詠草と朱書してお届け下さい。

わがあやまち

茅野雅

一瞬のあやまちよりか戀人をしらぬ遠世に放ちやりけり

足ばやに通り過ぎむとねがふ日のひと月ばかりつゞくかなしさ

わが心漸く火とも炎ともならむとすなり。神も手ふれそ

秋よ秋よものを思へるわが肩に手かくるごとく口づくるごとし

秋の來ていたづら臥しもやうやくにものはづかしくなれる頃かな

すさまじくかき亂れたる空のいろ見るだにせちに人の戀しき

君が手を放ちし時のたよりなきもののさびしさに似て秋の來ぬ

自からのなげかひごとの隅隅に黄金の針をうちてとぢめむ

戀人は遠き世界に遊びつつ歸らずなりぬいかにしてまし

ダリヤダリヤ心しりてかこのあした眞紅にさけり口づけをせむ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ひそひそと語らふ聲と瀬の音とまじる河原の星あかりかな

わが寢屋の簾の端にうすいろの蝶のあそべり君や見に來し

火と水の境にすめる悲しさは物も云はれず命あやふし

秋の來てやうやくわれに靜かなる心を與ふ深く見よとて

戀人の夢より來しやなつかしき朱のいろの蝶水いろの蝶

手も足も冷たく凍り命なき蝋のごとくも見ゆる朝かな

ダアリヤの花よりほかにわが心しるものなしと秋をつぶやく

わが心漸く神にちかづくと思ふことさへいやさびしけれ

いたづらにこころいらだちわが帶のとけたるをさへしらでつまづく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山にて

齋賀琴

山々にとり圍まれし上つけの温泉の宿に來て秋風を聞く

温泉の宿の欄にもたれてたそがれの赤城をとほく眺めやるかな

蒼然とたそがれて行く上つけの山々見ればこゝろ淋しも

窓あくればかなたの山に姫百合の一もとあかく鮮やかに見ゆ

霧はるれば山の姿のほのみえて日はうら／＼と峰に映れり

秋近き深山の奥に女郎草香を吐くころを温泉の宿に來ぬ

秋草の爛漫として咲き揃ふ山路を過ぎて湖に出づ

この山のこの靜けさよ寂しさよわがさきの世のふるさとに似る

女りんの桔梗さしたる温泉の宿に晝しづけくも一人あるかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

温泉の宿の二日三日は昏睡の夜にも晝にも打つゝきけり

山に來てしみじみさびしそのかみの別れし人に消息を書く

きりぎしに夕日かぎろひ薄色の山紫陽花のうなだれて咲く

見る限り山あぢさゐの咲き匂ふ谷間に出でぬうつつともなく

谷合の岩に座りて嚴として聲なき山をふりあふぎけり

日輪は赤城の山の頂きに金泥流ししづみゆくなり

温泉の宿に秋風立ちぬしかすがに京のたよりのなつかしきころ

御料地に花火あがると打つどひ避暑の子供らざわめきてゆく

御料地も森も社も湯の宿も只一面の霧のわだつみ

旅に來て怪しき夢をみる事のいや繁きにぞ心うれひぬ

旅に來て人の情の美しき温泉の宿をこそなつかしみけれ

湯の香の岩にひびけば何となくなつかしくして去りも得やらず

八月の歌壇より

砂山のゆふぐれの風髪ふきてくろ雲ぞわくわがうしろより(萬朝報)　與謝野晶子

きよらなる素肌の人のはしりゆくここちするかなはつ秋の風　同

大いなる緋のダリヤさくその前にたてばいちごになきたくなりぬ(潮音)　茅野雅子

たぐりたる蔓の先にも赤き花あはれにさけり初秋のころ

あそびはぐれひとりし吾子はないてくる甘藷畑の一すぢみちを　若山喜志子

めづらしく心明るし渚よりかへらむとしてあふぐ海面

君が唇へ巧になよる盃のなまめかしさにさびしくなりぬ

ままならぬ身になれつつ物思ひなくなりゆくがみゆるこのごろ　同

おもひきはまりぬ野にきたり野のしづけくも果なき暮にうたれはてけり　山田邦子

我心祈りてやます野をこえて夜ぞ漆黒くうれりくるかも

街の灯を水の面にうつし隅田川片かげくらく海にいるなり　四賀光子

大川の水にうつろふ灯影にし淋しかりけり生てしあれば

ひつそりさみ下す底に光よりすいれんの花動きたるみゆ

あをみごろあかるくすけばかあをなる魚のあたまはむらがりてみゆ　同

雨はれぬにはかに眉をうちひらきわが許にくる君にはあらぬか(帝國文學)　岡本かの子

夕ざればさびしくひさのわが門にたつけはひして月見草さく　同

からかさの油の香さへ身にしみてさびしく雨の夜をわかれきぬ　同

月に三度三度の文をまちわびて三度の老をするここちする(水甕)　長岡さみ

つれなしさうらみしころの思ひ出もまぢりて夏は人のこひしさ　同

よくものにおもひふけりし君なりきかたれかたれささいなみゝしさ　同

ひそやかに涙ぬぐひぬ紀の川の船にゐこぞる人のなかにて　水町京子

このあたり目しひの魚やすむならむあまりさびしき河の流よ　同

ただひとり花などうゑてあらましさまたあたらしくおもふなりけり　同

大比叡の山をよろしさのたまひぬ山ごもりする君のかなしさ　松平みさ子

今宵はも比叡のみ山の山ごもりこもりつつ君なにおもふらむ　同

王朝のものがたりめき御僧めき山ごもりする君のよろしさ　同

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まろまろと肉づきてゆくさびしさや心にうれへなき人のごと　同

ふとおもふわが東京に一人きてやがて五年にならむとするな　同

たそがれのしじませまれば吾しらずひざまづきつつ一人いのりぬ　長谷川清子

おぞましや心一つにたもちかねわがかなしみをかたりにしこと　同

停車場の歩廊のしたの東京のまちうすぐもりみゆる朝あけ　岡本都夜子

雨はれぬ傘をたためば緑玉がくろ髪にちる森のひるすぎ　同

さと肌に風なよりきぬするすると鍋絹の帯をときし束のま　荒木亀子

おぢさゐにうす水いろの小雨ふる朝なりかろきつかれおぼゆる　同

水の上よぎりゆく蛇ひとすぢの水路つくりてかなしませけり（詩歌）　川端千枝

すがるべきよすがもあらず野の草の莖と莖とがまつはりてをり　同

夏むしのとぶはかなしもまひるまをとぶはかなしとわがなみだすも　同

むかひ山いまさらめきてつくづくとみいりてありぬ雨ふりきたり　同

土にうもれいきをる虫のあはれさとおもひあはせてうちもだしけり　小谷清子

みもしらぬ國のゆふべの落日の眞紅にもゆるその大きさよ　同

筆されば筆にいだせばいつはりとなるがわびしさこのおもふこと（國梁）　矢澤孝子

かくうらめばやさしき心のがれさり惡女の相となるをおそれぬ　同

あきらめのすゑはひじりの心もてひと〱ゆるしぬわれもゆるしぬ　同

風ふけば野は一つらにゆれなびきゆれてびきわがたゆき梭の手　若山喜志子

川底に石うつひびき敢切はひれもすなけどすがたみえなく　同

ものあらふと背戸にいづればおもはゆの君が紙べに列はゐるかな　同

湖近き高木の山は楢わか葉いよいよしげりかつこう鳥なく（アララギ）　久保田ふじ

ほのあかき躑躅の花のさきみだれかすみながれてゆく山べかも　同

梅雨の空からりとはれて水田の光の中をたまむしとぶも　同

人すまでひさしくとぢし家の內疊つめたくおりきてみるも　森山よしの

梅雨晴の庭にいづれば夕あかり苺の葉には露たまりをり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初戀のなりゆき——岡田八千代

「初戀と云ふものは男の方にとつてはどんなものかは存じませんが、女にとつては、ほんとに一生の門出のやうなもので、隨分この初戀のなりゆきに依つて、女は自分の一生を清くもむさくも、美しくも醜くゝも、正直にも不正直にも迷るやうになりはしないかと思はれます。たとへその戀は成就しないまでも、もし無邪氣に過ぎたものか清く通つたものか、樂しく見返らるゝものか、なんにもせよ、振り返つて見てそれに温か味のあるものであつたなら、必ずそれは女にとつては幸福なものとしていつまでも殘るでせう、けれ共、もし、それが、思ひ出すたびに俄かに氷の風にでも逢ふやうなものであつたなら、さてどんなに女の一生を不幸にさせるものでせうか、女はその爲めに、妻となり母となり、又祖母にならうとも、なほその胸には、何物をもつても滿しかねるある空虚を見出しはしないでせうか。なぜならば、それほどに、女の初戀——あだに動く戀心とは間違へちや困ります——は無邪氣な可愛らしい正直なものですから。私だとても、もし私のあの初戀が、總ての人から、も少し温か味をもつて取り扱はれたのだつたら、決して今かうして、御覧のやうなこんな淺ましい墮落の淵に落ちて居はすまいと信じて居ります。それはあながち戀人にばかり責任のある事ではありません、私はもし、子の母と云ふものが、もう少し子供と云ふものを尊重し、その言葉になり擧動になり、又は風俗にまでも、細心の注意を拂つて吳れるものであつたら、世の多くの墮落女も、自殺男も、どんなにか救はれはしまいかと思はれるのです。女學生が墮落した、靑年が自殺した、それはみんな學校の敎育が惡い、小說が影響した。かう一がいに云つてしまふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のは、どんなにその人達を悲しませるものかは分りはしません。私は子供の母に、第一の責任を背負し度いと思ひます。結果にばかり急がずに、もつとゆつくりと子供と足並を揃へて、母親 自分の幼時を思ひながら、少しでも自分の幼時の時の苦痛を子供には繰り返させて貰ひ度くないものです。けれ共、大方の母親は、

「母アさんの若い時はさうぢやなかつた。」

と云つて自分の幼時の苦痛を子供に再び強ひようとします。戀に就いても結婚についても彼等は平氣で同じやうな事をやります。母親と云ふものは、なぜ子供の苦痛を取りのぞかうとはしないで、自分の子供の時の苦痛を再びさせて、自分の復仇をしやうとはするのでせう。私にも、もつと温かい母があつたなら、かうして、こんな裏長屋のせんべい蒲團にくるまつて、苦しい咳をしながら、こんな昔話をお話し申すつらい運命にも逢はなかつたかもしれません、ホヽヽ思はず愚痴になりました。まア聞いて下さいまし。」

女はかうした長い前置をしてから、靜かに次のやうな話しをしだした。

一

私が一番始めにその男子に注意するやうになつたのは、まだ國の小學校にゐる頃で、ある日の運動時間の時でした。もつともその時分は男も女も同じ敎場で敎はる制度でしたから、その子が私と同級で、誰れよりも弱々しい身體付をしてる位の事は私にも氣がついて居ました、それにその子が學校へ上つた時から、あんまり友達もつくらうとはせず、一人別になつて遊んでるのが何だか高慢ちきのやうに思はれて、云はゞ「面が憎い」と云ふやう

な感情に常に押へつけられてゐるやうな氣がしてゐたのでした。その時もその子はたつた一人で運動場の眞中にある大きな櫻の木の下で遊んでゐたのですが、私はなんだかその子が何をしてるのか見てやりたいと云ふやうな氣がしたので、始めは何の氣なしに側へ寄つて行かうとしたのでしたがその子も私の方を見てゐてそれと氣取つたと見えて、急に私を避けるらしい素振りで、櫻の太い幹を、私の行く方とは反對の方へ、そろ〳〵と廻らうとするのです。私も又それに直ぐ氣がついたのです、早く私の向きをかへて、今度わざとその子の廻る方へ逆に廻つてその子に逢つてやらうとしました。すると、その子はひどく狼狽へたやうな氣色で、又逆に歸らうとしたのですけれど、そのときはもう私も櫻の幹の近くに來てゐましたから、さうはさせまいと云ふ腹で意地惡くどうしてもその子に打つからなくては濟ませないと云ふやうな樣子を見せますと、如何でせう、その子は何と思つたか身をひるがへして今度は櫻の木に上りはじめたぢやありませんか、私はそのやり方があんまり意表に出たので留める事も出來ず、あつけに取られてその子のする〳〵と身輕に上つてゆくのを下から見てゐるより外は仕方がなかつたのでした。そこは子供だつたのでございますね、云はゞこつちの計畫をひつぱずされたやうなものですから、もう少し年でも積つてゐたならば、向ふの木昇りに對して何か反抗的にこつちも女相當な事を考へさうなも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のなのですが、そんな事には一向氣が付かずにぼんやりとその子のどこまでもどこまでも昇つてゆくのを見てゐたのです。

處が、運動場に遊んでゐたものは、私とその子と二人きりだつたわけぢやありませんから、いつかその子が木昇りをはじめた事が、運動場にゐた者の目に觸れたものでせう、一人寄り二人寄り果ては運動場にゐた者大方全體はこの櫻の木の下に寄つて來ました、そして子供の常として默つてはゐません、「もつと昇れ」とか「下りて來い」とか「石をぶつける」とか「先生にいつける」とかさん〴〵な騷ぎになつてしまひました。けれども、妙にこの子に向つて慘忍な心を持ちたくてゐる私には、それが自然に私の勝利になつたやうな、好い氣味で仕方が無いやうな氣がして、私も外の子達と一處になつて、出來るだけの聲をしてわめき始めたのでした、する中にその中の一人が一際聲を高めてこんな事を云ひはじめました。

「やア、みんな次郎さんを見な、女のやうな腰卷をしてるよ。」

さア騷擾は一層烈しくなりました、それに此一言が酷く次郎さんを叩きましたと見えまして、今まであの上で小さくなつてゐた次郎さんが、急に下り始めやうとしたので、下の嘩し聲はなほも強まつて、遂には、柏子を揃えて次郎さんをなぶり出したのでした、無論そ

の中にはをとなしい子もあつて、「お止しよお止しよ」「やめろやめろ」などゝ云ふ聲もしない譯ではありませんでしたけれど、私はなんだか、私のしはじめた小さな仕事が俄かに大きくなつて、しかも勝利を得たのですから、酷く感激してしまつて、「やめろ」とか「止せ」とか云ふ子の口の端をつねつたり、押へたりしてその混雜の中を歩き廻つて、もう夢中になつてゐました。

その中に誰れか先生に注進をしたと見えまして、二三人の先生が教員室から駈け出して來るのを見ると、まるで甘いものにあつまつた蟻のやうにたゞ一本の櫻を取り卷いてゐた小さい者達は、俄かに水でもかけられたやうに、時の間に逃げ散つてしまひました。しかし、逃げてからもまだ遠卷きに次郎さんのなりゆきを見てるものが幾人かありました、私もその中の一人でした。しかも他の人のやうに無意識に見てゐるのではなくて、私の心には根強い意地惡と、嘲弄と、歡喜とが踊つてゐるのでした。

けれ共、間もなく先生に助けられて下りて來た次郎さんを見た時、最も深い驚きに打たれたのは恐らく私が第一番であつたらうと思はれます。

次郎さんは全で病人のやうな蒼い顔をして殆んど人心地の無いやうにぐたりとして先生に抱かれてゐるのです。此有樣を見た子供達は又一勢に其處へ駈けよりましたが、それは

直ぐ他の教師達の爲めに遮ぎられて、次郎さんは其儘教員室の方へ擔ぎ込まれてしまひました。

さア私の心配は一方ならなくなつて來ました。二三人跡を追つて教員室の方へ行つた子供もありましたが、私にはその勇氣もありません、多分私の顏も次郎さんのと變りなく蒼ざめて居たらうと思はれましたから。

他の生徒達は又直ぐに元の遊びに歸つてしまひましたが、私一人はたゞ呆然と次郎さんの事ばかりが氣にかゝつて、授業始めの鐘が鳴るまで遊びに歸る事は出來ずに立ちつくしてをりました。

それでも授業のある中は混れてゐましたが、さて遊び時間になると、又次郎さんの事が氣になつてしきりに次郎さんをあの櫻の上へ追ひあげた事が後悔されてなりませんでした。しかし、他の友達などが、ともして「次郎さんはどうしたらう」などゝ云ふのを聞くと、私の意氣地は又込み上げて來て「いゝ氣味だわ、いつでもあんまり澄してるから罰があたつたのよ。」などゝ云はずにはゐられませんでした。

二

間もなく學校が引けて歸る時間になりました。すると私は又急に淋しいやうな心持にな

つたのでした、それは、次郎さんの家は私の家よりもちつと先で、いつも學校が退けると私と次郎さんとはあとさきになつて道を行くのでした。けれども、私は例の片意地から、次郎さんに一處に歸りませうと云つたこともなければ次郎さんも又私の側へ寄らうとしませんでした。けれ共、しひて先へ行つてしまふのでもなく、後になるのでもなく、たゞ二人は往來の向ふ側とこつち側とを別々に歩いて同じ道を私の家の前までゆくのが例になつてゐるのでした。そして私が自分の家へ這入つてしまふと、次郎さんは一散に駈け出すのがお極りだつたのです、さアその人が居ないのです、私は始めてもの淋しさを覺えました。たしか一葉さんと云ふ小說家の小說の中にもかう云ふ時の心持に、「ある時はありのすさびに憎かりき」と云ふ歌が引いてあつたと思ひますが、私もはじめて見慣れた人の見えぬと云ふものはこんなにも淋しいものかとその時はじめて心底から、惡い事をした、なんで私はあんなことをし出かしたのだらう、今頃は次郎さんは大方學校から小使にでもおぶさつて歸つてうん／＼うなつてゝも居やしないだらうか、それにしてもどうして木の上であんなに蒼くなつたのだらう、などとゝり留めもないことばかり考へられて仕方がありませんでした。けれ共、又あんなに自分を恐れて、自分から逃げたいばかりに櫻の木へ昇つてしまつた次郎の心根が恨めしいやうな憎らしいやうな、又そんなにも厭はれた自分が辱か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しいやうな心持になつて、處々の町の角々などで外の子供の「さよなら」「さよなら」と別れてゆくのなども上の空に聞きながして歩くのでした。

私はその時フト思ひついたことがありました。それは私の家が醫者だつたので、若し次郎さんがほんとに病氣なら、きつと診察して貰ひに來るだらうと云ふ考へでした。私はそれに思ひ當ると急に何もかもがそれで解決のつくやうな氣がして、俄かに足を早めて家へ飛び込んだのでした。

私は「只今」と云つて玄關へ鞄を投り出すと一處に茶の間へ走け込みました。

「母アさん、今日ね、家へね、次郎さんて人來ない？」

と私は息せき尋ねました。

母は丁度こゝんで仕立物をしてゐましたが、呆れたやうな顔をして、

「なんですね、『只今』もしないで」

と恐い顔をするのです、私は直ぐしよげましたけれど、一生懸命に勢を盛りかへして、

「『只今』はしました。」

「いつ。」

「今、お玄關で」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お玄關で？誰れに」
「誰れにつてみんなによ。それよか母アさん、今日ね、學校で病人が出來たのだけれど、その人來なかつて？」
「なにしにさ。」
「なにしにつて診て貰ひに。」
「いゝえ、そんな人は來なかつたやうだよ、何年位の人だい。」
「私の級。」
「いゝえ、そんな子供は來なかつたやうだよ。」
「あら、どうしてゞせう、だつて家はお醫者樣でせう。」
「さうさ。」
「なら、家へ來なくちやならないのにね。」
「どうしてさ。」
「だつて何處の人だつて病人はみんな家へ來るのぢやないの？」
「そんなことがあるもんかね、お醫者さんは何處にだつて幾らもあるんだもの、家ばかりへ來るとは限つてやしないのだよ。」

「あら、さうなの、お醫者樣は家ばかしぢやないの。」

「さうさ、お醫者樣は此町ばかしでも五人位はあるだらうよ。」

母はかう敎へてくれましたけれど、私はそのために大變失望してしまつたのでした、同時に次郎さんの消息の知れないのが何より氣になりました。私は夕方までに何度か次郎さんの家の前まで行つて見やうかと思つたかは分りませんでした。けれ共、いつもは、よく其邊りまで鞠をついたり繩飛びをしたりして行く事もあるのに、その日に限つて何となく氣が咎めてどうしても行つて見る氣にはなれませんでした。

その中に夜が來ました、私は母に連れられて町まで買物に行く事になりました。したがそれには自然私達は次郎さんの家の前を通らなければなりませんでした。

「あら母アさん。あつちから行きませうよ。」

「何故。」

「何故でも。」

「母アさんはどんな譯もないのに遠廻りをするのは厭ですよ、御用が遲くなりますからね、こつちから行きませう。」

「だつても。」

「それぢやお前は御留守番をなさい、母アさんは急いで行つて來ますから。」

私の母はその頃から、大變に冷たい人でした。それは好く云へばつまり良妻であり賢母であつたのかも知れませんでしたが、しかし子供にとつては寄り處の無い温か味の無い母親には違ひありませんでした。

「でも私行くわ。」

私は是非なくすた〳〵と歩いてゆく母の後について、間もなく次郎さんの家の前を通らうとしました、すると、其處に思ひがけず、一臺の車が小ぢんまりさしたくゞり門の處に置かれてあるのです、町とは云へ、田舍の事ですから、車で歩くものはまア私たちには御醫者樣位にしか考へられませんでした。

「あら、母アさん、次郎さんの處に車がある、父うさんなの。」

「馬鹿な事をお云ひでない、父うさまは御家にゐらしたぢやないか。」

「でも車がある、御醫者樣ぢやなくて。」

「あゝさうらしいね。」

かう云つて母はだん〳〵にその車に近づいて行きましたが、梶棒の處に置かれた提灯の紋を見て、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あゝ△△さんだ、S町の御醫者樣だ。」
と云つたきり又ずん／＼歩くのです。
「母アさん、△△さんて御醫者樣上手なの。」
私は一生縣命に母と一處に歩きながら聞きました。
「さア、……まだ若いからね……」
と云つたきり又ずん／＼歩くのです。
私はもつともつと根掘り葉掘り聞きたかつたのですけれど、あんまりしつこくして叱られる事と、その理由を尋ねられる事を恐れたので、その儘默つて歩きました。（未完）

お隣のおくさん——小林かつ

お隣りのおくさんは「虫はなち會」を「ほうちゆう會」と云ふ人です。そのおくさんとこのまあるい顔にぱつちりした黒い眼のみひらいてゐる四つになる男の子と、それから今年の二月に生れたといふ可愛らしいさかりの赤ん坊とを、ひま人な若い志村のおかみさんは窓から首を出しては、あやしたりからかつたりよくしました。

子供達は、その若いおかみさんの顔をみるのがみんなすきでした。間がなすきがな、

「おとなりのおばちやん、何にしてらしやるの」

と上の子は聲をかけました。

「おとなりのおばちやん」

「はあい。坊ちやん」

「はあい。おばちやん」

といふ會話は若いおかみさんの御亭主をくさ〱させる程、一日にいくどとなくくりかへすことがありました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣にむらがあつて、わがまゝをいふ若いおかみさんは、本でもよんでゐるときにつくづくうるさいとは思ひますけれど、その男の子のまわらない口でおしやべりをするのをさすがににがい顔も出來ませんでした。――その男の子が窓に首を出すときつとそのあとからおくさんが赤ん坊をつれて、

「へいおばちやん」

と出て來ます。そうすると若いおかみさんは少し、閉口したらしい顔色を、うつかり眉の間へ出して了ふことがあります。

「ねえ、おくさん、裏の中村さんの女中衆はそりや無神經なんですわね。枝豆のごみは、そこら中水口にちらかしぱなし、お魚の骨はほゝり出しぱなし、そりやきたないんですの」

話はまづ裏にゐる中村といふ家からきつとはじまります。その家の女主人は、若いおかみさんがどうしても見た顔で、そうして、名の思ひ出せない人なのです。公園の活動の女優だといふのと、おそろしい大がたの絞りのきものとが、方々のおくさん達の注意をひいて、何かと云ふと、その女は噂のまとになる女なのでした。

とりわけて噂を云ひたがるのは、そのおくさんでした。やれあの方は、お湯屋へおこしも

しめずにくるの、お白粉が年のわりにこいのと、若い志村のおかみさんをつかまへてよく話しました。

ある時――志村のおかみさんと、その主人と、二人のお友達の若い洋畫家とが、窓下で話しあつてゐるとき、とん狂に聲を立てゝ、

「ねえ、おくさん」とおとなりからよびました。だまつて、志村のおかみさんが窓をあけると、おくさんは、もゝ色のおこしを、お尻はしよりに下から見せて、たすきをかけたまゝ、――黄い――と云ふよりどす黒いうでをむき出して、竹格子につかまつて、ゐました。

「あのね中村さんのあの人ね、今魚屋へ行たんですよ。そしてね、そこにあつた鯛のあたまを、いきなりひねくりまわして、これいくらだいつて、まあこうきいたもんです。とね魚屋で、いくらとか云ひましたの、とね、ぢやすぐもつて來ておくれ、中村だよ、知つてるだらうと云つて、つんとして魚屋を出て來ましたわ」

おくさんの話はそれだけなんでした。

「おやまあ、そうでござんすか」

志村のおかみさんは云ひやうがないんでそう云いました。若い洋畫家は、小さい聲で、

「少し、誰れかに、にてるね」と云つて、おかみさんの顔を見ました。おかみさんは、東

京ものなのと、淺草そだちなのと、生れた家が書きといふごく自由あけつぱなしな家なのとで、ていねいな言葉がつかへないやうな人なんです。ですから、

「まあまるで、あの人は男子みたいですね、いけぞんざいで」と、おくさんに云はれたとき人知れず、冷汗をかいた程でした。

そんなことからそのおくさん――お屋敷づとめをしたといふおくさんと、話すことはおかみさんに、いつか壓迫を感じさせました。

「おとなりのおばちやん、」とおくさんの聲で話しかけられて、ぞつとする程、おかみさんはいやな事がありました。

「何をしてゐらしやいますの」

「え、本をよんでゐますの」

「小說ですか」

「えゝ」

「何と申しますの、――やつぱりハイカラもんですか」

とこうのべつにきかれると、おかみさんは困つて了つて、兩方の頰の赤くなるのをおぼえます。それに、おかみさんは、じぶんのもつてゐる病氣から一種のわがまゝがてつだつて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐるので、よけいです。

「そんなにお仕事をなさると、いけませんわ。この暑いのに」

おかみさんがせつせと、どつかへ行くために着物をつめてぬつてゐるときなんか、かう云はれると、ほんとうにいやんなちまひます。

三越に見切りの賣出しがあると云つては、きずものを、やすくそこの旦那はよくかつて來ました。

その度に、見せられて何とか云はなければならないのはずいぶん、おかみさんにとつて、難儀な仕事でした。

うるさいと云つておこるわけに行かず、――と云つて一緒に話してゐることもいやだし、そのおくさんには、ほんとうに、つくづく困りました。

ある時は、ほんとうにひつこして了はうかと、志村の夫婦は相談することもありました。

人が訪ねて、かへつて行けば、

「お客樣でしたね。どちらの方。お姉さんですか」

きつときゝます。それが、とんでもない人でゝもあれば、おかみさんは忽ちある侮辱を感じます。

「だれでも女でさへありや姉さんだつてきくわ」

ふつと夫婦は顔を見合して笑ふのでした。

「あなた方はほんとうにお氣樂ですわね。あたし達はちよつと二人で出るたつて老人の前がありましてね」

散歩をしたり、買物に出たりする志村の夫婦におくさんはいやみらしく云ふこともありました。おかみさんは持前のかんしやくを一度そとで危くはれつさせそうになつたことがありました。

「何、色ぢやなし戀ぢやなし馬鹿〻〻しい」とお腹の中でぶつ〳〵云いながら、都々逸みたいな節でうたふお隣りのとしよりのカチユーシヤ節をおかしくつておかしくつてたまらなくきいてゐたこともありました。

どうかするとおくさんはすこしまわらなすぎると思ふ程、人の氣にとんちやくない人でした。

「ねえおばちやん、ねえおくさん」と云つた調子で、臺所の話、煮物の話、お主人の話、――どうかするととんでもなく、若い志村のおかみさんの顏を赤くさせるやうな色ぱい、しかも、きたない色ぱい話を、半日ぐらい窓で話しつゞけることがあります。

無神經でなくつて、神經質でないおくさんの御ていねいなねち〳〵した話を、暑いのに座つてゐるおいどをいたくしてきいてゐる志村のおかみさんは、つくづくをくさんののんきな太平樂な氣をうらやむこともありました。

お小夜——原田皐月

一

お小夜は荷物一切を幾つかの茶箱に詰め込んで懇意の家に一先づ預け、ほんの手周りの道具丈け持つて、婆やと二人切りで二三日前に極めて來た貸二階に落付く事になつた。氣まぐれ者だのお尻が落付かないのと皆に云はれる中で平氣で貸二階迄尋ねて、愈々小粋なこの世帶を疊むと云ふ處まで運んでは行つたもの丶さて今日となるとお小夜にもこれ迄のこの家の生活が懷しく顧られるのであつた。

日が高く昇つて障子の中硝子から派出な夜着の裾にかん／＼當る頃漸々お小夜は寢間着の裾を引ずり乍ら茶の間へ出て、其處にぺたりと坐ると揣板に肘を凭せて永い間敷島を吹かして、それからやつと湯殿に立つのが毎日であつた。そして新聞を見い／＼朝の御飯を濟ますとお風呂へ出掛けて、綺麗に整へた顏や髮に一日中の氣分を立て直して歸ると、婆やを對手に無駄咄しをしたりお茶を呑んだりして居るうちにもう夕方になつた。其頃になると若い青年は會社の引けをいつも此處へ廻る事になつて居た。お小夜に一つ年上でさる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

會社の重役の息子と云ふ事で、若い乍らもお小夜には少しの不自由もさせなかつた。

お小夜は半年の間殆ど毎日斯うして日を暮らして居た。此儘居たら一生も斯うした日が續く樣にも見えた。お小夜はいつか髮を結び乍ら中挿の兩天をこぼれる程多い自分の眞黑な髮を見て、若い年が何時迄續くでもない、いつかこの毛が眞白になる時もあらうのに、今から斯うした不自由もない代り面白味もない暮らし方に老い込む事が自分乍らつくぐ\勿體なく思はれた。そして今更らに斯うした無事なお團び者の月日を半年も送つて來た事に不思議な氣がするのであつた。

お小夜は知つて居る丈けの人に浮氣者だとか水性だとか云はれて居る程放浪性の強い女であつた。それが半年前から斯う音なしく身を落付けて居るので、逢ふ限りの人が羨み乍らも此度こそはいつ迄もこの幸福を取逃がさない樣にと云ひ云ひするのであつた。けれどもとうとお小夜は皆の羨んだ幸福を今日限り見棄てるのである。そして何處迄行つても同じ事を繰返す丈けの生活から又もとの放浪の世界へ戻らうとして居るのである。

「全く私位落付かない人間もないはね。其内腰が曲つて了ふ位が落ちなのかねえ」

お小夜は片づけの指揮し乍らしみぐ\云ふと、

「姐さんにや御無理もありませんよ。今の内ですもの。尤もお金の重みで腰が曲るかもし

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れませんけどね」

婆やは斯う云ひ乍ら瀬戸物類の詰め合せをして居た手を止めてお小夜の顔を振仰いだ。實際婆やはこれ丈けの器量と若さと手腕とを持ち乍ら、獨りの旦那のお圍ひ者位ぢや不足の筈だと思ふのだつた。

「其麽事云つたつて姐さん年にゃ勝てませんぜ。その面にも皺のよる時が來まさあね。其事だつてちつとは考へなくちやあ」

茶箱に繩を掛けて居た荷物を預つて呉れる事になつた亭主も口を出した。

お小夜は田舍から出て來た時汽車の中で乘合はした丈けの緣故で、今でもこの人の世話によくなつて居た。其頃お小夜は耐えに耐えて居た夫の亂業にほと〳〵愛想が盡きて一刻も止まつて居る事が出來ず、と云つて嚴格一方な生家には自分から好んで嫁入つたのであつて見れば怎うあつても歸る事が出來ず、とうと思切つて丸つきり手頼りのない東京に逃げて來たのであつた。行く處は幾等もあり乍ら追手の恐しい處許りなので行く事もならず幸心切なこの人の世話で兎に角呉服店の店員になる事が出來たのであつた。お小夜は僅か許り通つてるうちに人目の多いのを恐れて其處を出ると屋敷奉公でもしたいと思ひ乍ら山の手邊の口入屋を歩き廻つてるうちに夫のお友達に居處を嗅ぎ出されて了つたので、其儘

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無斷で其處を出て了つた。その時お小夜は泌々孤獨を感じた。今迄も小夜は誰を手賴る事も出來ず、周圍凡てが仇の樣な中に起臥して幾度となく弧獨に泣いた身ではあつたが、其時はもう涙でまぎれる樣なものではなかつた。其乗鉢の孤獨がとうとお小夜に生活を與へて此處迄導いたのであつた。此麽生活の中でお小夜はこの親切な亭主夫婦を煩はさなければならない樣な色々の出來事に打突かつて來た。其度に夫婦は必ず若い時が何日迄續くものでない事を說いては早く身を固める樣に繰返した。

「姐さんも辛棒の續く人だと怎んな運でも摑まへられるものを、あゝ落付きがなくちやあの器量も仇だねえ」

お神さんもお小夜の動く度にこんな事を亭主と云ひ合つて居た。實際心切な夫婦はお小夜の身の早く極る樣と骨を折つて呉れた事も一再ではないのであるが、かんじんの當人が一向氣がないので話はいつもお流れになつて了つた。初めのうちこそ傍の人も扼鬼となつて何の彼の云つては居たが、今ぢやもう又かと樣に何にもお小夜に云ふ人はなくなつて了つたのでお小夜は結何氣樂に思つて居た。

荷物を車に積み込んだ頃、今日一晩を名殘りに、何處か明るい巷で過したいと云ふ心持から、自働車を馳らせて來た男が、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「女は浮氣と相場が極まつたものだけど、此奴の樣なのも珍らしいものだ」

手傳ひの人を顧みて笑つた時、

「そりや誰のせゐだか知れやしない。貴方がさヾンからキリ迄惚れさせて置かないと云ふのも人間の情のない處だはね」

「情けないゝ處だね。お前の樣なのは。まあ一生野良犬つて格だね」

「野良犬でもいゝや。毎日同じお膳に向つて同じものをつつ突いて居るよりや、其處等中の塵溜めからでも勝手なもの丈け選つて歩ける方が余程いゝは」

お小夜は斯う云つて皆と一緒に笑ひ崩れた。そして荷物萬端を人任せにすると、

「さあ野良付かうぢやないの」

と云つてさつさと出て行つた。

二

お小夜は障子を明け拂つたお座敷の敷居際に塗枕を持出して、濃い綠に一杯に日の照した庭に背を向け乍ら永々と横になつた。

「此麼にして貴方と居るのはほんとにいゝ持だはね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は貰に火をつけて男に渡すと、男は、
「今迄の家ぢやお氣に召しませんかね」
「家が怎うの斯うのつて話ぢやないは」
「ぢや友染縮緬の布團でなくちや御獄に適ひませんかな」
「へえ、まあ其邊ですね」
と云ふとお小夜は全く調子をかへて、
「だけど群内の夜具ぢや全く世帶臭い譯だつたはね」
男はぷつと噴笑し乍ら身を起して、
「へえ。お前でも世帶臭い事があつたかい。怎んな匂ひか後學の爲に嗅がして貰ひたいね
お別れの印に」
「ウフ、、、。だけど貴方ほんとに店が極つたらちよく／＼は來て下さるはね。嘘ぢやな
いでせうね」
「ちよく／＼でなくちやいけないだらうね」
男が何も彼も茶化して了ふのでお小夜はむつとし乍ら、
「冗談ぢやありませんよ。だけど私やほんとに怎う云ふ性分なんでせう。男と見れば人一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

倍惚れて了ふ癖に、ぞつこん惚れ込む事は又怎うしても出來ないつてんですからね。これがほんの浮氣つてんでせうね」

言葉半ばでつく／＼お小夜は寂しい氣になつた。そして男の顔をしげ／＼と見入ると、

「まあ其麽處でせうなあ」

お小夜は男が一向取合はないので先刻から翫具にして居た男の手をいやと云ふ程打ち乍ら、

「たまに人が眞面目に話してるんぢやないの。少しは貴方も眞面目に聞くものよ」

さう云ふとお小夜はから／＼笑ひ乍ら庭下駄を突かけて池の周りに跼つてる蛙を一疋々々追廻して居た。

お小夜は男を送り乍ら式臺の上に立つて、

「ぢや家が極り次第お知らせしますからね。屹度來られるでせうね」

と幾度も繰返して居た。そして遠退いて行く男の車を見送つて了ふと、新らしい部屋の樣子などが急に見たくなつたのでお小夜もこの家を出た。

お小夜は撒き水に濡れた道を歩いて居ると輕い風が絣絞りの裾を飜るので、其度に向脛に快い縮緬のしぼの肌觸りが傳つて何處迄も斯うして歩いて居たい樣な心地となつたので

家へは寄らずに此儘心當りを廻つて見る事にした。

お小夜は小さくてもいゝから待合を出して見る氣で居た。男はそれに就いて別に何にも云はなかつたが兎に角別れる時は過分の金をお小夜は貰つて居た。前から心當りを頼んでも置いたし、一二ヶ所話がないでもないので今日は其方へ行つて見る氣になつたのである。お小夜は川の多い町へ出て其處の柳の川風に靡いて居る下を歩いて居ると、遂先きの十字街を橋を渡つて停留所の方へ急いで居る男の見覺えのあるのに思はず足を速めた。お小夜の下駄の音が相手の耳に屆く頃男が振り向くと、

「やあ」

とそつと立ち止つた。

「矢張り貴方でしたのね。暫くでした」

「此頃ぢや大變に落付いてるつて話だが怎んな工合なんだい」

「駄目、又謀叛起しちやつたの。近いうちに一軒出しますから何分御引立てを」

お小夜が輕く頭を下げると、

「そりや有難いね。此度はどの邊だい。まさか又彼處ぢやあるまいね」

お小夜は廿三の去年迄淺草に女を置いて店を張つて居た。其頃まだ男は學校に通つて居

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たのであつたが、學校を出ると同時に兜町へ乘出して仲買ひを始めたけれど、其頃お小夜はもう其處の店を閉ぢて居たのですつと逢はなかつたのであつた。

「立吶しもをかしいからまあ歩かないか」

二人は川口添つて歩き出した。風が少し强くなつたので薄い羽織が胸元から後へずるつこけるのをお小夜は氣にしい〳〵話しつゞけた。

「園部さんは怎うなすつたでせう？」

「さうしては始終思ひ出すんだらうなあ。園部はあやかり者だよ。彼奴今保險に居るんだがね、待合を出すなんて聞いたら喜ぶだらうよ」

「どうぞね、宜敷く御披露を願ひます」

「嫌やだぜ。君子は危きに近寄らす」

「まあ」

お小夜は道行く人を振り返らす程大きな聲で笑つた。

「燒かれた日にや事だからなあ。然し改めて伺つて置きますが何方が一體正實だつたのだい」

「どちらも」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「さうさ。金を出して遊んで行く馬鹿野郎はな」
「さう云ふ馬鹿野郎は大事なお客で大事な人ぢやないんですよ。貴方達は人の方よ」
お小夜は其頃より二人が落合つては兩方とも面白くない顏をして歸へつたりした事を思ひ出した。
「貴方達は全く贅澤だはね。世界中にや自分獨りより男がない樣な顏をしてるんですもの女にかけちや。さうは行きませんよね。あばたも噯つて事があるけど私にや怎んな好いた人のだつて矢張りあばたはあばたよ」
お小夜は皮肉の笑を相手に投げて居た。
「さうぢやなくつて？それが正直な人情でせう。だから貴方のあばたの目に付く日には外の人の噯を待つて居るし、園部さんのあばたの見えるには貴方の噯が見たくなる譯ぢやありませんか」
「成程浮氣哲學だね。處で今日はあばたか噯か何方だいと何方にしても斯うして歩いてる丈けぢや疲れる許りだ。乘らうぢやないか」
「私のは憚り樣ですが浮氣とはちつと許り違つてますからね。貴方達が充分なら誰も浮氣はしませんよ、足りないのは其方樣でせう」

「おや〳〵。其方の腕ぢやなかたかなあ」
「大きに。來世からは捜ね鉢で男を捜ね直す腕を貰つて來ませうや」
何處へ行くともなく電車に乘つた二人は菖蒲の廣告から氣まぐれを起して蒲田へ行く事にして停車場へ迄のつた。けれども汽車の出る頃は國府津迄の切符を持つて二人ともにこ〳〵して居た。
箱根へ着くとお小夜は婆やに丈け葉書を出した。
「余程彼の婆やが大事だと見えるね」
「私がほんとに大事にするのは彼の婆や位なものね。居なくなると直困るもんだから。あとは出て面白い時丈け入用な人許りよ」
お小夜は横目で相手を見乍ら輕く笑つた。
「おや〳〵。御挨拶だね。さう云ふ果報者とは知らずに箱根三界迄お伴仕つた鼻の下の長きには自分乍ら諦れるよ」
「なんかつて貴方なんかが遊ぶ時外一生懸命になる時のない人ぢやないの」
お小夜は先のつかへた樣な昨日迄の生活から急に扉の開かれた嬉しさに無暗と燥ぎ廻るのであつた。

三

昨夜お少夜は更けてから呼んだ藝者達の中に這入つて、はめを外づして騷ぎ廻つたのと輿に乘じて飮んだ酔醒めのだるさとに日の暮方迄床の中に腹匍ひになつたまゝ、傍に寢たり起きたりして居る男に憎まれ口をきゝ乍ら莨許り吹かして居た。
「おい。少し歩かないか。お前の口だからいゝ樣なものゝさう喋りつゞけの呑み續けでは大抵口が堪まるまい」
「堪らないのは貴方でせう？ 何しろ一風呂浴びて來るから待つてね」
お小夜は手拭を口に銜へると、長く引いた水色のしごきをくる〳〵貸俗衣の腰に卷き乍ら廊下へ出た足を又返して、
「私は天迄も行かれる樣な氣がしちやつてよ。ほんとに伸び〳〵して馬鹿に世の中が廣々して了つたは。怎うも私は獨りつきりの男なんかにこびり付いちや居られない性分だはね」
首を縮めて舌を出すと、とんと一つ廊下を高く踏み乍らばた〳〵と馳けて行つた。

四

婆やは新らしい部屋に只獨り待ち疲れて、もう口小言も出なくなつてべたりと火鉢の傍に座つて居た處へ箱根から葉書が着いたのであつた。

「二三日中に歸へるからね、待つてゝおくれよ」

と書いてあつた丈けなので婆やはいざ別れとなると矢張り未練が殘るのも人情だらうと思つて、下駄屋へ嫁入てる姪の家へ遊びに行つたり、淺草の知つた家をおちこち歩き廻つたりして日を消して居た。約束の二三日が又三日も過ぎた日の午後婆やは湯上りの緩み切つた筋肉を、明け拂つた椽側の前に伸してうと〳〵して居る處へお小夜は歸へつて來たのであつた。そして婆やを見るといきなり笑ひ出して、

「私つたら箱根から歸る積りで國府津へ出たんだらう。それが又熱海へ行つちやつたんだもの中々歸らない譯さ。おゝ暑い。めつきり暑くなつて了つてね」

お小夜は珍しさうに新らしい部屋を見廻して居た。婆やは着換を持つて行かなかつたのを氣にし乍らもとうと迭る事も出來なかつた事を繰返しながら、お小夜の不斷着を揃へて居た。

「誰と行つてたんだか當てゝ御覽?」

「おや檀那ぢやないんですの?」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は婆やの迂散臭さうな顔を見てにや／＼笑ひ乍ら、横坐りの儘羽織を脱いで帶止めをはづして、帶を解き出した。

「分らないだらう？」

「吉岡の梶那ですか」

濱町の席亭の爺で前からお小夜を物にし樣として居た男の名を云はれて、

「馬鹿におしでないよ。彼麼狒々爺のもんかね」

「分りませんね」

「太田さんなんだよ。驚いたらう」

「へえ、珍らしいぢやありませんかそれは又。ですけども何處でお逢ひになりましたの」

「まあ緩り話すはよ。サイダーがない？。ぢや上り花でもいゝから苦い處を一つ。甘いものは何があるの」

お小夜は伊達卷のまゝ長々と伸ばした足を兩手で叩いた。

「何處からも何とも云つちや來ない事？」

「まだ參りませんよ。私も深川へ行つて來ようと思つては居たんですけど、何しろ今日はお歸りか明日はと思つては毎日家に許り居てとうとまだ行かなかつたんですよ」

「私はこれから一二軒行つて見樣と思つてるの。婆やも都合がよかつたら深川へ行つて見て頂だいな」

お小夜は茶を飲み乍ら此四五日の話しをし出した。

「ほんとに呑氣だつたぢやないの。何だか世の中が變つちやつた樣な氣がするよ。今迄だつて何も窮屈な思一つしたわけぢやないけれどね」

お小夜は時に自分が馬鹿にふしだらな者に見えて自分乍ら愛想の盡きる樣な事もあるが其那氣も直世の中の女に對する憐みの心に變つて了ふのであつた。

皆よく唐變木見たいな男を抱へて一生平氣で小供や亭主の番がして居られたもんだ。あれで文句がなけれあそれこそ半間だし、文句があつても云へないとなれやこれも意氣地のない話だし……此麽事を考へては自分許りが完全な生活をしてる樣な氣になつたりするのだつた。

「太田さん立派になつたたせうね。何しろあの男前ですもの」

「それに商買の方も景氣のよささうな口振りだつたよ」

「園部さんは恁うなすつたんでせう」

「保險の方へ出たとかつて話だつたよ。さう云ふ連中を尋ねて始めの日にや皆來て貰ふん

だね」

お小枝は手拭の模樣や菓子折の趣好迄をもう考へて居るのだつだ。

「婆やも名前を考へてお呉れな。姓名判斷に早く賴んで置いた方がいゝからね」

「まあそれもさうですが家の方を先にしなくちや」

二人は顏を見合はして笑ひ出した。(未完)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或る家

——山田邦子

ガラ〳〵と門の戸が開いたので弓子は慌てゝ立つて玄關へ飛び出して見たがそこには誰れも立つて居なかつたので、

「政次さんよ」と明るい調子で座敷の夫に聲をかけると飛ぶやうにして座敷の前の縁に走り出した。そこへ植木のかげから白い浴衣を着た政次さんがニコ〳〵として現れた。

政次さんは弓子の家の二軒先きに家を持つてゐる、弓子の遠い親戚にあたる光代さんといふ人を妻君にしてゐる文學士である。此政次さんと弓子とは、光代さんが許婚の頃から大の仲好であつた。そしてお互に結婚してからも不思議と近處に住むやうになつたので、政次さんの夫婦と弓子とは勿論昔からの仲好であるし弓子の夫も人なつこい方なので、今では兩家が非常に仲好くなつてゐる、それで政次さんは門の戸を開けると、玄關の横を通つて直ぐ座敷の椽の方に廻るくせになつてゐるのであつた。

「いゝ天氣ですなあ、君」政次さんはいつもの輕口な調子で弓子にからかふやうにかう言つて這入つて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「今日は朝から家に居たの？何故來なかつたの？待つてゐるのに」弓子は丸で一年も逢はなかつた兄弟に逢つたやうに、もう飛びつくやうな調子で政次さんのあがる方へついて行つてなつかしさうにたてつゞけに聞いた、いましがた夫と二人でお茶を飮みながら「政次さんは何してゐるだらう、出て來ればいゝのに」「きつと用事に行つたでせう、でなけりや今日は日曜だから來るはづですもの」と、いふやうな、噂をしきりに言つてゐた矢さきであつたから、弓子はじつとしてゐられない程政次さんの來たのが嬉しかつた譯で、時には折角政次さんがやつて來ても、ちよつと目を其方へ向けるきり笑ひ顏もせずに本を讀んでしらん顏してゐる時などもあるのである。弓子は政次さんに對しては可成り遠慮なく思ふやうに振舞つた。

「暑いね君、今君の噂を言つてゐましたよ」

「さうですか」

弓子の夫と政次さんとから言つて挨拶をした、弓子は飮みあらしの茶道具をいそ〳〵と片付けて、葛餠の葉ばかりになつた菓子鉢を引きながら、

「十錢お出しなさい」とそこらに聞える位の程度の小聲で夫に笑ひかけた。

「どう〳〵取るな」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子の夫は其財布から十錢玉を一つ出して弓子に渡した、弓子はそれを受取るとそは〳〵と自分の部屋に這入つて小さい自分の「がまぐち」から更に十錢の銀貨を一つ出して勝手口から井戸ばたの「しづさん」を呼んだ。

「も一度お菓子を買ひに行つて來て下さいな」

「先程と同じものでよう御座いますか」

「エヽ」

さうして弓子は瓦斯に又鐵瓶をかけた。

座敷に歸つてくると政次さんと夫とは丁度碁盤を持ち出した處であつた。

「アラ、政次さん私と一席圍みませう」

「バカ、下手が又出て來る」

「何んでもいいのよ」かう言つて弓子はぐん〳〵黑い石を盤の上に置きはじめた、せい目四つ目風鈴といふ大變な石の置き方である。

「ヘン、又百五十ばかり勝つてやるかな」

政次さんは笑ひながら敷島に火をつけた、弓子の夫も可笑がつてあは〳〵笑ひながらそばに座りこんだ。

勝負は勿論百三四十も弓子の負けであつた。

「あゝつまらない、碁なんて面白くも何んともないものだわ」

「だん〳〵面白くなつて來るよ」

「さうですね、少し分り出すとたまらなく面白くなりだしますね」こんな事を言ひながらやがて政次さんと夫とは碁盤に向つた、弓子はお勝手へ出て來て買つて來させた菓子包を受取ると「今日も亦これで三十錢お菓子を買つてしまつた」とはつと胸を打たれた、けれども其時座敷の方からアハヽヽとたまらなく可笑さうな二人の笑ひ聲が聞えて來たので弓子の心は直ぐに其なかにたあいもなく引こまれて全身をどるやうに、

「何があつたの！」と菓子鉢を持つて座敷へ飛びこんで行つた。

碁を打ちながら三人は暫く無駄話をしたり輕口を言ひ合つたりしてゐた、やがて又門が開いて此度は玄關に案内を乞ふ人があつた、三人はハッとしたやうに耳をすましてゐると「しづさん」が名刺を持つて這入つて來た、それは弓子の夫への來客であつたので弓子は慌てゝあたりを片付けだした、政次さんは歸りさうにして立つた。

「まあ君遊んでゐらつしやい、いゝんです遠慮のいる人じやないから」

「いゝでせう政次さん、私の室の方へ行きませう、あそんでゐらつしやいな」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

弓子は取りちらした茶道具を片付けて間の襖をしめながら政次さんを呼び止めた、それで政次さんは又あそんでゆく氣になつて弓子の室の方へやつて來た。お茶を出すやうに言ひ付けると弓子は室にかへつて來て政次さんと二人で今年弓子が行かうとする避暑地の選擇などそれからそれと盛に話し合つた。

鹽原にしやうか木曾にしやうかと弓子は迷つてゐた、政次さんは信州の高遠といふ處が非常によいと言つてそこらを見廻して七八枚レターペーパーをかりとぢのやうにしてある粗末なものを手頃と思つたかして机の上から引おろしてそれにエンピツで地圖を書かうとした。

「アラ、それはいけないこれでも今月の簿記よ」

「アハヽヽ、君がそんなものをつけるのかね」

「今月からはじめたのよ、さんざん叱られて」

「つけたつて駄目だよ、君は金を持ちさへすれば使ひたくつてもぢ〳〵する人だもの」

こんな事を言ひながら政次さんは外の紙きれをさがしだしてざつとした地圖を書いて其町の説明をはじめた、町のすぐ横が斷崖のやうになつてゐて其下を眞蒼な山の水が流れてゆくといふ事や、日本南アルプスが町から向ふにクッキリと見えるといふ事などが弓子の

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣を一度に引付けてしまつた。

「ア丶よかつた、やつと定まつたわ、私高遠へ行きませう」

弓子は安心して定めこんだやうな樣子であつた。政次さんは弓子の性急な調子を可笑がつてアハ丶〱大きな聲を出して笑つた、すると次ぎの間から弓子の夫が

「何を盛んに大きな聲をして話してゐるの、政次さん出て來給へ、遠慮の人ではないから」

と聲をかけた、弓子はちよつと肩をすぼめて、

「行つちやあいけない事よ」と小聲で言つた、政次さんは矢つ張り笑つてうちわを用つてゐた。

お客さんが歸つてから夫はあくびをしながら出て來た。

「大きな聲で又例の田舍行きか、どこに定めたつて？」

「大將はね、僕が高遠といふ町の話をしたら「もうそこに定めたわ」なんて言つてよろこんでゐるんですよアハ丶丶丶。」

政次さんは笑ひ笑ひ便所へ這入つた、弓子の夫も氣嫌の好い顏をして笑つてゐた、と、弓子は此時だ！と瞬間に思つて二日も前から氣にかゝり通しに氣にかゝつて、しかも言ひ出す折がなくて――其言ひ出して好い折は弓子には直覺的に分つた――笑つてゐてもなん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも此一つの事だけは心の底にこびり付いてゐた重荷の始末をつけるべく、さつきの高遠の地圖の書いてある紙きれのはしに「六」といふ字を書いて、
「取つて置いた方のがこれきりになつたの」と甘えたやうな困つたやうな調子でかうさゝやいた。
「どうして、俺は知らないぞ」と言つて夫はまだ笑つてゐる、弓子は心のなかでまづ安心と思つて机の上からさつき政次さんから取りあげた粗末な紙のつゝり合せを取つて夫の前に置いた。
「これを見て頂戴」
「まあ後さ」
政次さんが便所から出て來たので此話はこれで尻切とんぼになつた。
夕方近くやつと政次さんは歸つた、お夕飯をすませてから弓子はハタ〳〵とうちわをつかひながら打水をした庭に向つて籐椅子に腰をおろした、そこへ夫がやつて來た。
「さつきの帳面を見せてごらん」
「おこるの？」
「おこりはしないがずゐぶん分らないな、あれだけ渡しておいた金をみんな使つてしまつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て又あの臨時費の方まで用ひこむなんて」

「だつてかゝつてしまつたんですもの」

此一句を弓子は自分でもなさけなささうに悄れ切つてつけ足した、そうして今まで生々としてゐた顔が急にかうも變るかと思ふ程白らけた顔になつてしまつた。帳面を持つて來て横になつてゐる夫の前に置くと急に子供のやうな、ふざけたやうな、其くせ意地になつたやうな妙な表情をして夫の瞳を見つめたまゝだまつてゐた、夫は少し笑ひ出しさうな顔をして弓子を見てゐたが「困つた奴だ」と獨言を言ひながら帳面を見はじめた。

「おや、此間しづさんを連れて行つた費用は二圓の筈じやあないか」

「だつて二圓じやあ足りなかつたんですもの」

「それ、それだ、あんなに言つて出て行つたじやないか、此度こそこれだけでして見せるつて獨言にまで言つて出て行つたじやないか、そして又何故こんなにかゝつたんだ」

「だからそこにくわしくつけてあるわ」

二人の聲はだん／＼いら／＼して來るのであつた。

それは此度田舍からたのんだ「しづさん」が、藪入に行くのに東京には別段親戚もなし一人で遊びに行きたいにもまだ東京の勝手が分らないといふので三越と淺草に弓子が連れて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

行つてやる事に夫と二人で相談した。毎日毎日の天氣で暑いから朝早く出かけて三越へ行つてそれから淺草へ廻つて活動寫眞でも見せて三時頃片日影がついてから歸るといふ豫定で、電車賃が幾何、お晝飯が幾何、活動が幾何と計算して二圓あれば間に合ふと弓子は受合つた、さうして家を出る時は弓子は「此度こそこれでやつて來る」と自分で自分に誓ふやうにして三ツになる一人娘を連れてしづさんと一緒に出かけたのであつた。三越の門をくゞつて、二階に行くまではまだ其心持が心を領してゐた、三階へ登つて玩具の並んでゐる處へ行くと弓子は急に子供に玩具を買つてやりたくなつて來た。

「鈴ちやんおもちやがほしいの？どれがほしいの？」

此母親らしい言葉と其實行が、弓子の心をいかにも快くそゝるのであつた、子供は嬉しがつておもちやを選り分けた、弓子の心には其子供の嬉しい心持が直ぐに響いて來て一緒になつて踊るやうであつた、さうして自分も夢中になつてあれこれと玩具を選り出して、其なかゝらこれとこれを鈴ちやんに、と思つてゐるうちに政次さんの家の松ちやんを思ひ出して、こんな玩具をやつたら又どんなに喜ぶだらうと思つて別に一つ松ちやんの玩具も選り分けたのであつた、さうしてそれを買つてしまふと弓子の心はいかにものんびりと愉快になつて漸く遊びに出て來たやうな樂しさを感じはじめて來るのであつた。さうして其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明るい光線の下に並べられた種々の髪かざりだの色どりの美しい半襟だのを見せて其まゝ其所を出てゆくのが何んだか若い「しづさん」に對して可哀さうな事のやうに考へられてせめて流行の束髪のかんざしなと一本買つてやろうと前後を忘れたやうな心持でかんざしを一本買つてやつた、四階へ行つてアイスクリームをのんで外に出た頃にはもう藪入にとゐてた二圓の金は勿論すんでしまつてゐた。

「ア、私は又熱を病む人のやうになつてゐる又何をするか分らない」快くふわ〳〵と酔つてゐる心の一方にさゝやかな小さいつぶやきが起りはじめた、さうして例のやうにそれがやるせない快樂に酔ひひたつた心にひや〳〵と觸れて、どうする事も出來ない其熱に浮かされながら、はつきりとそれが悲しくて仕方ない心持を又味ひながら上の温室に無意識的に足をはこんで行つた、じり〳〵と暑くなつてくる十一時頃の日ざしを受けたガラスばりの室のなかに這入ると明るいサボテンの花の強い光が瞳を射たので弓子は全身勞れてしまつた、さうして其室から力の死んだやうな心をして出て來ると「ア、いやだいやだ、わづかかんざし一本、おもちや二つ三つ買つた二圓足らずの、金の爲にこんなに心配してこんなに自分を苦しめられて、又苦しんで行かなけりやならないなんていやだ、一度に百圓も買物をする人だつて今此人たちのなかに有るに違ひない」とかういふ考へがむら〳〵と湧

きあがつて弓子は何となくまわりのうよ〳〵した人を見廻した、さうして自分に線を引かれた物質生活といふものがいかにもみすぼらしくあはれになさけなく感じられた、けれども窓によつてエレベーターを待つてゐる間に、脳貧血でたほれた人の顔色が漸々なほつて來るやうに、其何んとも言はれない暗い、不平な心は自然に生々として來て「二錢だつて二圓だつて二百圓だつて「使ひやう」といふもの丶上からいつたら同じ理屈であらうから二圓ばかりの金でなんてそんな考へ方は愚だ、……そうして金の事でいろいろ苦しむよりも自分にはもつと苦しんでゐる事がある、又苦しまねばならぬ事がある」とそんなふうな心持が湧きはじめて、今迄の悲観してゐた自分が可笑しく思へたので青い勞れたやうな顔にちよつと苦笑ひが現れた、然し又其次ぎに、「買物をする面白さ」は今こそかくおさへ付けられて寵を失つた女のやうに力なくひそんでゐるけれど、これが此もの丶永遠の滅びではない、又いつか——恐らくは近く——猫のやうな忍び足で、そろりそろりと頭を持ちあげて、ついには一時身の内のどのやうなものも其勢力の下に虐げられてしまふ程の暴力をふるひ出すといふ事は、あまりにはつきり弓子の心に分つてゐた。さうして又、そこまで行つてからでなくては眞實の心持にどうしても歸る事の出來ない自分が思はれて弓子は思はず涙ぐんだ、どういふ自分なのだらう、かうした苦しい同じ事を幾度も幾度もくりかへし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て來た、さうしてまだ此先きおそらくは死ぬまで此くりかへしは續くであらう、それはたゞに金づかひの事ばかりではない、弓子の生活は一切が此循環である事を思つた、はしやいで騷いで止むに止まれない發作のやうな心で輕はづみな行爲をして、そこまで馬鹿を知りながらつくして、さうしてそこで毒瓦斯を吐き出した後のやうな淸らかさと嵐の去つた後のやうな恐ろしい程の靜かさ淋しさにかへつて、自分を打つて打つて打ちのめしたく、悔と恥と責めとにさいなまれ、新らしい聖い考へ深い生活をたてなほさうと心から振ひ立つのであつた。多くの事に吃驚する程從順に、每夜の祈りにも全身打ち出して唯神の御心のまにまに導き用ひ給へと長い祈りを捧げるのであつた、それだのに、何の連絡もなく時々に、もう全身どうする事も出來ない力をもつて發作のやうにはしやぎたつ心がおそつて來る、さうして弓子は又かと深い絕望の底に沈みながら其魔力にかゝつて自由を失つてしまふのであつた。百年の難行苦行ももろく一瞬にくつがへされてしまふ、其宗教的物笑ひのそれを弓子は自分の內外生活の凡べてに苦く持つてゐるのであつた、シャヴンヌの繪に心靈を打たれて見入る心が眞實にあるのになほ歌麿の繪は時に弓子の魂までも赤いまぼろしに掩ふてしまふ、それをどうする事も出來ないのを弓子は深く悲しんでゐるのであつた。

かうして弓子は其日にもそれからもう制する事の出來ない心持で淺草へ廻つてお晝飯を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

すませて水族館に這入つたり活動を見たりして五時近くに家に歸つたのであつた。そして費用は五圓をこしてゐるのであつた。

「ほんとにどういふんだろう、お前は馬鹿か？……ちり紙まで通帖でとつておきながらそれで毎月の小使が十五圓も二十圓もかゝるなんて、こんな小つぽけな家でこんなに小使を用ふ家が有るか聞いて見い」

弓子は口を結んで椽の柱によりかゝつたまゝうなだれてゐた。

不思議と其晩は風がサヤ〱と吹いて何んだか秋の夜のやうな感じのする夜であつた、丸い月が明るく家のなかまでもさしこんでゐた、弓子は自ら何んともしれない涙がポタリとおちた、夫が又いつものやうに經濟といふ事について、又主婦の勤めについて本を讀むやうに說いてゆくのを聞いてゐるのが如何にもつらい事であつた、それらの事は皆弓子自身も讀んだり聞いたりして知つてゐた、けれども其、夫の考へ方は餘りに古く、弓子みたやうな女にあてはめようとするには滑稽な程舊式の事であつた、弓子の夫も日頃はそれ程までに弓子に實行を求めはしないのであるが一つ何かの事が有つて弓子を責めはじめると定つて「女大學」のやうな事を求めたり說いたり始めるのでそれが弓子を心服させなかつた、さりとて弓子は今の自分を決して善いとは思ふのではなかつた、自分の足りないだらけの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

家政には自分で愛想がつきはてた、例へば一日、或は半月、つゝましやかに送る事が出來たとしても、一度沙漠嵐のやうな發作がやつて來る時、一切は根こそぎくつがへされてしまふ、それを思つて弓子はやるせない涙が止め度もなく流れるのであつた、人に言はれるまでもなし、自分で自分が其爲に始終苦しめられ苦しんでゐるにも拘らず何故彼の發作は自分の身の内に底知れぬまで深く喰ひこんで根をはつてゐるだらう、自分はもう到底さういふ生れつきの人間でそれを正す事は出來ないのだらうか、と弓子はこゝまで考へた時、「罪を犯さゞらんが爲には自分のやうなものは死なゝければならないのではないかしら」といふ事が眞面目に考へられた、さうして太い溜息をついた。

弓子の夫はそれが自分の言葉が多少でも弓子を感心させたと單純な考へ方をして一層熱心に婦道といふやうなものを說きだした。

弓子はそれを輕蔑する譯ではなかつたが、かうまで奇形な神經を持つてゐる自分といふものに本よみのやうな婦德などを說いてそれでそれが正されるものと思ひこんでゐるらしい「夫」といふ人を思ふと、あまりに理解のない心と心の寄り合つてゐる其「家」といふものも非常に淋しくなさけなく、弓子には自分自身も夫も、從つて家といふものもみなそれ〴〵にたまらなく絕望なものに思へて來るのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いくら言つて聞かせても返事をしないで弓子がだまつて考へこんでゐるので夫は又此度は自分の言葉に反抗してゐるのかと思つて直ぐ腹を立てゝしまつた、さうして強情な女、反省のない女だといつて罵しつた、弓子はそれもなさけなかつた。

「お前の終りはきつと悲慘だよ、おれはさう思ふ」

夫はしまひに投げ出したやうにかう言つて横になつた、弓子は夫はどういふ意味であれを言つたゞらうと思つたが、どんな意味にしろ弓子はそれは事實であらう！とさう思はれた、もう自分が長生きをするならば、自分の老年は悲慘なものだらう、少くも此まゝでゐるならば確かな事だと思つて弓子は暗い心にとぢられた、到底自分には家庭は持てないと絶望的にかう思つてもう默つて此まゝ此家を出て山のなかでお寺か何かへ行つてしまはう、さうして苦しむとしても樂しむとしても自分一人の心にまかせてまがりなりにも自分の心の道を歩いて行かう、それはお金もないし今よりもつとみぢめな生活に相違ないけれど、こんな自分を此家に養はれるのは夫に對してはすまないし、自分の心もためきれないで苦しい型にはまれない、もつとみじめな生活でもこんな離れ〴〵のものを合せやうとして合はない家に人を苦しめ自分も苦しんでゐるよりまだよいやうに思はれて來るのであつた、然しそれではどうしてそれを實行しやうかと思ふに至つて弓子の心には子供の事や

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

思ひがけない程入りまじつてしまつた其他の心持が思ひ切つてさあそれでは「今」、といつて立ち上れさうもないのに氣がついた、弓子は苦しく自分のどちらに行くにも生地のない心に怒りが燃えた「こんな自分は何の爲に生れて來たのだらう、何の必要あつてかうして生てゐるのだらう」といふ心が一杯になつて來て弓子は目を据えて指をかんだ。

夫は眠つたふりを裝ほひながら時々細い目をあけて弓子の樣子をぬすみゝをしてゐた。ヒヤ〳〵した風が時々二人の間に投げ出されてある例のレターペーパーの帖面を吹き動かしてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

姉――久保田富江

半年振りでお盆の夜實家の閾をまたいだ姉のお美代を、お久が玄關に迎へた時、何も云はず目を見張つて突立つてしまつた。

お美代は妹の前でも怖づ〳〵した容子をして笑つて居た。

「まあ。來たの……」

とお久は漸く斯う云つてから初めて笑顔をして、姉の脊に縛り付けられた男の子を見遣つた。其の子は面長の目付の好い子だつた。

「誰だい？」

奥の火鉢の傍からかすれた母の聲が聞えると、お久はちよつと姉を押えるやうにして急いで奥に驅け込んだ。

「誰だい？」

母は今一度お久を見上げて聞いた。お久は中腰になつて母の耳に口を寄せた。

「米田のが來たんですよ」

「おや！さうかい」

皺の多い母の顔に意外の色が漲ぎつて、浮腰になつたが直ぐ冷めたい目色をすると落ち付いて煙管を取り上げた。

「姉さん此方へ來ると好いわ」

お久は母の顔色を見い〳〵其所に立つた儘呼んだ。

「お無沙汰しちやつて……」

と癖のやうな笑ひ聲を出し乍ら、大きい包みを下げて入つて來たお美代を見ると、流石に母は顔色を柔げて、

「來たかい」

「どうも御無沙汰しました」

「はいお暑くなりました。どうしたい？子供等は……今日は一人限だね。おゝ大きくなつた。おや〳〵此の子は好男子だね。雪夫より尚好い子だ。何ていふ名だつけね」

「豊つていふんです」

「あゝさう〳〵。豊ちやんかい？お前は好い男だよ。おんりしな。おんりしな」

母は獨りで景氣好さ相に饒舌つてお美代の顔は故意と見ずに子供をあやして居た。

「暴ん坊で困つちまふの！」

と子を下ろし乍らお美代は始終愛想よく、そしてハラ〳〵して物を云つた。包みから中元の砂糖袋が出された時母は、

「そんなことしなくても好いのにさあ」

と嬉しくもなく云つてのけた。

お久は其の袋に（米田欽三）と姉の亭主の自筆で書いた紙切れの張り付けてあるのを見て不圖不思議な淋しさを覺えた。そしてお美代の背立つて貧相な顔を見詰めて居た。髪が引詰めの銀杏返しでバサ〳〵してゐる。燒けたやうな素顔の目が大變窪んで、何だが病み上り見たいだ。それでも綺麗な縮みの着物を着て、子供にも上等の風をさしてあるのが、いくらかお久の若い心を安心させる。

お美代は他にせんべい袋と、お久にと束髪の簪の箱を取り出した。

「まあ美しい！」

お久は氣の毒げに受けて箱を開けて見た。ぷんと好い匂ひが鼻を打つ。

「何？好い香り」

「鶴香水が殘つてたからかけて來たの」

「あら道理で……好い匂ひだ」

とお久はにつこりして丁寧に机のひき出しに仕まつて來た。

母はまとまりの付かない世間話しなどして、空つぱ向いた心持をまぎらして居た。

お美代は只出る暇がなかつたもんだからとばかりを幾度も、辯解らしく云つた。お美代に抱かれた豊は未だ口もきけないでちよつと人見知りをする。父や大きい兄の前では氣詰りでならない樣をしてゐるお美代は、子を皆に親しませようとして汗を流して居るのが、お久には氣の毒でならなかつた。

父も兄も、お美代の子供達を深く愛さない理由も知つてゐる。ちよつとばかり呵責めるやうに弄かつて其所をどいてしまふのが、却つて輕い安息を吐く位だつた。お久はまた麗々と書いてある米田欽三の四字を見た。いく度見ても變な氣分に襲はれる。其のあとにはきつと、姉が氣の毒とも母の素つ氣ない容子するのが無理ぢやないとも考へられる事を思つた。

母の心はお美代と逢ふ前まで、過去のある憎しみでいつぱいになつて居た。

——それは去年の暮れのことであつた。

お美代の亭主は極く氣の強い意固地な男で、お美代が嫁いでから家は間もなく殁落して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しまつたが、強情な欽三は決して他人に便らうとはしなかつた。殆んどあらゆるおちぶれた商賣を行つて見て、一つも思ふやうにならずにしまつたが、どうしても成功して見せると口癖のやうに言つて居た。その勝つた氣性は賴母しかつたけれど四五年前迄は、やゝもすれば苛酷な眞似をしてお美代が泥濘に髮の毛を摑んで引きづられたと、夜中に泣いて來たことも幾度かあつた。そんな度每にあとで母が愚痴つぽく、お美代の總領の雪夫に、「お前の母ちやんはお祖母ちやんの大切な娘なんだよ、お靜叔母ちやん見たいに若くて綺麗な時分、澤山着物を持たしてお前の所へやつたのに、父ちやんは皆なくしてしまつたらう？そして何時でも打擲つたり何かして非道い目に合せるから、あの母ちやんをお祖母ちやんとこに返しておくれ」

などゝ其頃五つばかりの子に斯んなことを聞かせた。闘拔けて利巧な雪夫は大きな目にいつぱい涙を貯めて默つて居た。

そんなことは忙はしい母の胸から何時となしに消えるやうに忘れて行つた。欽三も貧に馴れたしお美代の苦勞して來たことを想つてすつかり氣が折れて、大變お美代を大切にするやうになつた。其の後はどんな辛い苦しい事があつても、お美代は實家に心配を掛けには來なかつたし、漸く此の節盛り返して來たので、皆はつと一息した。それでも實家から

受けた世話は一通りぢやなかつた。

欽三の心中は今迄他人から見くびられて居たのにモヤ〳〵苛立つて、景氣付く程昔の豪慢が更び戻つて來初めた。何時かお美代の父から借りた金が、何年たつても返せなかつたのを、少し都合の好い道を見付けたら手に現金を握らないうちに、馬鹿に氣が強くなつて今にも叩き返して遣ると云はないばかりの有樣だつた。恰度折も折、不圖した事からずつと以前に雪夫に對して母が云つたことが欽三の耳に入つて大きに憤慨してゐると、或る者の話に依つてお美代の實家にうるさいことを傳へた。それは母一人に對して欽三の曲解から罵りがかゝつて居るといふ。

「何でも雪夫が饒舌つたんだらうよ。こんな事云つてたつて。お前の母さんは家の子だから着物も何も返しておくれつて……そんな事云はなくても好い、そりあお袋のことで家に來てもお靜の亭主の惡口を言ふ位だから俺れの事などどんなに他で惡く云つてるか知れない。どうせそんな事を氣にしやしないが、一度嫁けて米田家の者になつてるものを、着物を返せなんて云つてくれちや困る。殊に彼んな小さい者に云つたと、米田の方ぢや大騷ぎだとさ」

と或る者から聞いたお美代のすぐの兄がこう云つて告げた時、母はそんな覺えは無いと

不思議想にした。

「有つてよ、有つてよ。着物を返せとは云はないけど母ちやんを返してくれつて、お母さん確に云つたわよ」

お久は其れを幽におぼえて居たので母が思ひ出すやうに口を添えた。

「左様だつたかね。そんな事で怒つてるんかい」

「それだけぢやない。何時か借りた二十五圓もね、もう直きに何百圓とか他から工面する事になつたから、出來たら第一にお袋の顔に叩き付けてやるつて云つてるとさ」

「へえ。まあ彼奴は一體何を恨みに思つてるんだらうねえ。それつばかりの事で……ぇそりあお前、娘等の亭主にろくな者はないから何方かうまく納まつて居る方へ行つて愚痴を云ひたくなるぢやないか。彼奴だつて以前の事を考へたらそんな生意氣はいはれた義理ぢやないよ」

母の顔には老いた者を苦しめるなんて情ないといふやうな色が浮んで居た。そんないさくさが毎日の様に家中に繰り返されて母は欽三を此の上なく憎み出した。母の憎しみは第一物質上恩を着せたことから初まつて居る。長兄はそんな卑しいことは云ふなと何時も叱りつけてゐたけれど、母にはこんな事でもいふより他欽三を遣り込める工夫がなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「金を返して呉れゝば有難いやね。今のやうな渇して居る時には十圓でも好いと思つてる位だからね。叩返されたら左樣ですかと受け取つとくよ」

と負惜しみらしい言葉も蔭で漏らした。

暮れにお美代が歳暮を持つて遣つて來た時、

「何だつて？欽三が威張つたさうぢやないか」

と長兄はだしぬけに聞いた。母はもう耐えられぬやうに馬鹿にしてゐるあんまりだとお美代を責めた。

「いゝえね。別に金を叩き付けるなんていひはしないけど、返さないうちは何も云ふ事が出來ないから今のうちは何事も我慢してるつていふんですよ」

「何々我慢する事があるんだらう。隨分私のことを惡く云つてるさうぢやないか。今迄散々世話して遣つたことを忘れてさ」

「そりあ世話になつたわ。世話になつた事は」

「それに欽三は金さへ借りなきやどんなことでも恩ぢやないつていふさうだね」

「だから金を返したよでなくつちや云はれないつていふの!!欽三だつてそう云つてるわ。

安田の親父や兄貴はまことに好い人間だけれど、お袋はどうも彼あした人だから例へ何と

いはれてもかまやしないけど、小さい子にあんな事を敎へてくれなくても好いつていふんぢやありませんか」

お美代は泣き出し乍らつけ〳〵云つた。

母もお久も此の時は寧ろ呆れてそれを眺めて居た。父も兄も沈默つてしまつた。

「それだが私が欽三のことを他へ行つて惡くいふなんて飛んでも無いこつた。四五年も以前ならいざ知らずね、今ぢや賞めて居る位なんだよ」

「いえ昔はいろんな事は有つたけれど、今になつて云はないでも好いつて……」

「何時私が何と云つたい？」

母も聲を震はして口惜しがつた。

お久は此の時許りは姉が憎くつてならなかつた。

「そりあおつ母さんがお靜姉さんところの人のことを惡く云ふのも、皆此の姉さんの時の事を忘れてるからでせう？仕方がないわ」

とお久は何方とも付かずに斯う云つた。

「あゝさうさ。忘れてるから仕方がないのさ」

とお美代は涙を拭き乍ら其の話を切り上げた。其の日は何となく打ち解けない氣分で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

晝の間にお美代は歸つてしまつた。

「もういくら肉身の娘でも、あゝなつちや親に情も何もありやしない」

「すつかり亭主付きになれるんだから駄目ですね。あの權幕たらどうでせう」

父と母はほつとしてあきらめたやうな心を顏に表はした。

後にまた或る者から、

「お美代がそんなに遣り込めて來たなら、俺れは來春になつたら笑ひに行かうかな」

と欽三が誇り切って云つたといふことを兄の口から傳へられた。然し欽三は兎も角お美代も子供も遂に一度も來なかつた。

「態あ見ろ。何たつて怖くつて來られないだらう。馬鹿者共つ」

と安田の者等は嘲笑つて居た。お久のすぐ上の兄は麻布迄使ひに行つた途中、米田の家の前を通つたら、雪夫が居たので呼んだら白眼めて中に引込んだと、プン〳〵怒つて歸つて來た。

「ほんとに親があゝだと子供まで憎くなる」

と皆が一しよになつて云つた。――

そんな理由で無音で居た今日である、お久は姉にちやほやする事も出來なければ、母の

素つ氣ない樣に同化することも出來ないで苦しんで居た。
それでも母はお美代に壽司を取つて遣つたりして、しまひにはホイ〳〵云ふやうになつて來た。
「久ちやんは今裁縫してる？」
とお美代はきいた。
「いゝえ。何もしないで此の節は書物ばかりよんでゐるわ」
「此の子はお郡の所からも賴まれてるし、家のも澤山つかへてるんだけれどちつともしないんだよ」
母はちよいとお久を白眼る眞似をしたので、お久はついと立つて自分の部室に行くと、本箱から原稿を澤山引出してすぐ戻つて來た。
「これだけ書いてあるの」
「それぢや作家になるつもり？」
お久は美しく笑つてうなづいた。
お美代は頁をバラ〳〵と繰り乍ら、今度ゆつくり見せて貰ふといつてお久に返した。そして晩いから歸ると立ち上つた。

豊を手傳つて負はせてやつて、お久は母と共に格子口までお美代を送つて出た。
「久ちやん遊びにおいでね。ほんとに」
「えゝきつと行くわ」
お美代は歸りかけてはいろんな言葉を振り返つて殘す。それを何時までも受けて引き止めて置きたいのは矢張り姉妹だとお久は思つた。
格子を閉めても物を云つてゐる。お久も母も奥に入つてしまつた。
「お前に遊びに來いといつても私にや云はないね」
と母はつぶやくやうに不滿な聲を出した。お久は鼻先で笑つて居た。
「治ちやん。治ちやんちよいと……」
とまた表でお美代が呼んだ。お久の弟はぬーつと表へ出て行つたが、暫くごちやごちや云ひ合つてる聲がすると弟はニコニコして戻つて來た。
「ね、おつ母さん!」
さも大事の秘密でもあるやうに母の耳に口を寄せて掌を見せた。
「どうしたつて?」
お久は覗き込んで聞いた。治夫の手には五十錢銀貨と十錢玉が載つて居る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「呉れたの？」

「私に五十錢呉れたよ。あれでも親と亭主の間に入つて上手くやつてるんだよ。此所ではきまりが惡いもんだからねえ……」

「あたいが十錢貰つたんだ！」

「さう……」

お久は何だか悲しくなつて來た。それ限り何共云はず壁を見詰めてぢいつと考へてゐるうち、目先が熱くにぢんで來るのを知つたのでふいと椽側に立ち出た。

「こんなにまでして機嫌取つてゝかと思ふと可哀想になるよ」

と母はしんみり後で云つた。

お久は柱に寄り掛つて今の姉の老けた貧しい姿を何時迄も頭の中に描き乍ら岐阜提灯の絶え〴〵な灯のまたゝきを見詰めて居た。

隣りの庭でお迎ひ火をたいて居る。（をわり）

――（四、七、一五）――

青鞜詠草より

その一　日枝みどり

花柘榴緋にもえたてるそのなかにあなつかしや御堂こもらひ
空あふぐそのならひさへうれしさとなれる窓べの柘榴緋にさく
おほぞらに光みなぎれりまたれつつ胸おごりつつむかふ緋ざくろ
はれわたる空はうれしもまたれゐてもゆる柘榴にしたしめりけり
汝がすめる家の柘榴の月あかりさそはれいでてすぐかへりきぬ
ひとすぢに心汝にゆくまひろ間のざくろ張りきれむばかりなりけり
ふとりゆく柘榴さびしやうつそみにひとときもえし心をおもふ
うつそみにもえてあさなき思ひより青きざくろの日ざしさびしも
青青しざくろの實よりさびしさのわきてすべなく夏ふけにけり

その二　石倉さゝ子

ふけし夜のねざめの床のひろびろとなほ戀しさのまさりくるなる
わすられぬ人をばすでにわすれつゝことはり顔にいへるはかなさ
小夜ふけてひとり巷にわがたてば星のなくさへきくこころちする
名もしらぬ人にはあれどそのをりのやさしきおもはわすれかねつも
はしりさる汽車のなかなるおもかげをおひて果なきわれのさみしさ
雨の音の底にめざめてゆくりなく君とのがれし温泉をなつかしむ

その三　土橋堯子

青きかほ髪のみだれのものすごき鏡のわれにこころをびえぬ
たらちねとわかるるごときおもひしてさりしは何時ぞ濱の松原

その四　楡木まさを

山ふたつその谷ぞこの停車場に夕日さびしも汽車うごくとき
丘さびし四洋人がくちぶえをふいてすぎゆくをそ夏の丘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

村の精神病者と生兒——生田花世

此夏は清一と一緒に國に歸らう、かう思つて田舍にも知らしたり、友達にもさう云つたり、自分もその氣でいろ〳〵と準備もしてゐましたのですが、世の中の事は本當に思ふ儘にはなりません。種々の事情から餘義なく延期しなければならなくなりました。でも、私にはその延期がそんなにいつまでも愚痴が云ひたい程に氣に染まない事にも思はれません。無理をして歸つたところであまり好くもない、自然に樂に歸れないのは、寧ろ歸ることが不自然なので、もつと適當な時さへ待合したなら、勞せずとも流れに沿うて降るやうに自然に歸る事が出來ようと私は思ふのです。單純な私は直ぐ樂天家になるのです。

けれども村の事を思ひ浮べずには居られません。今夜も亦さうなのでございます。日が暮れてから打水をしましたので、朝顏の青い葉や撫子の紅い花やコスモスの細長い莖や芝草の若芽等の上に露のきら〳〵するのが見え、それらのものが座敷から照らす電燈の黃ろい光のために巧妙な明暗の曲を奏でるやうに戰いでゐる、と夜風がざわ〳〵と吹いて來て植木棚の端れの硝子製の風鈴をちろ〳〵と鳴らせてゆきます。かうした情景にうつとりと

心を浸してゐると、もうすつかり村の事を思ひ出して居りました。

『村』と云ふ音の出し方が私には非常にしんみりとした夢幻的な快感を呼び起します。村の事をぢつと思つてゐますと、どんな現在の辛い罪でも慰められて來ます。然かも村は私の幼少時の幸福の水を湛へた壺でゞもあるやうな感じがいたします。この壺の蓋を取ると私の幼少時の幸福な事がきら／＼と星のやうに一つ一つ光り始めるのです。

村は私にいろ／＼の物語を蘇生（よみがへ）します、小山の上の土塊り、麥生の中の燕の巢、若宮樣の祭禮、葬式、女をひき殺した水車小屋、さては村の人々の死亡や出產や、疵我や、爭論や、婚禮や、發狂や、身投げや、そんな人生記錄（ヒユーマンドキユメント）が、――然かも都會人には決して味はれさうもないアダム、イヴの原始さをもつて――私の記憶力の前に展開してまゐります。その中の一つの興味のある事を私は今こゝに書き付けようと思ひます。

それは丁度今夜のやうな涼夜でありました。空には唯今のやうにまるい月が――多分今日がその日だつたかも知れないのです――七月の十七日の夜の月が、山峽を照らして、谿の流れが、どう／＼と響いてゐる時でありました。つひ自分の家から十町とは離れてゐな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い母親の里家へ私は遊びに行つてその歸りでありました。女中に送られて馴れてる道の事ですからすた〱と道を歩いて、昔は大蛇がゐたと云ふ五抱へ位――當時八歳位であつた私たちの手で――もある若宮神社の松の下の路まで來ました。そこの暗澹とした莊嚴な景色はちよつとどう云ひ現はしていゝか言葉が見付かりません、何でもその松の大木の枝が向ふの小山の頂に伸びて了つて、丁度地獄の入口ででもありさうな巨大な門を造り、根方を這ふ白蛇のやうな道路をふちどつて、隣村の用水がさら〱と如何にも山の清水らしい響きを立てて流れてゐました。黑く鬱蒼とした森の中の神殿は奥深く見えず時々梟が鳴きました。然しこの暗い門を出離れると眼界が一時にぱつと展けて村で一番廣い田や原が水色に澄み切つて見えるのでした。

少からずそこは怖しい處なので二人とも四方を見ずにすた〱と歩いてゐますと、水色に見える田の畔を傳ふて白いものゝかげが動いて來るのでした。

「竹さん、何やら來る！」と私は顫へ聲で云ひました。すると竹さんもちよつと怖さうにぴつたり立止つて眼を凝らしてゐましたが、やがて落着いたやうに云ひました。

「人間ぢやがな。孃（ちやん）！」

二人は無氣味に自分の足音などに胸を冷やしながら一町ばかりも歩いて小山の端のこん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もりとした木群(こむら)の路の十字路(よつつぢ)まで來ますと、白いものかげに見えた姿も亦畔からそこへ上つて來ました。私たちの草履の音がばた〳〵としました。けれどその女は裸足でしたからもの音もしませんでした。

「孃(ちやん)、お粂ぢやがな」と竹さんはひそ〳〵と袖を引いてさゝやきました。私は化物の正體が分つたと思ひました。けれども決して落着いたのではなかつたのです。このやうな寂寞とした山の蔭で、薄青い狂女(きちがひ)に出逢つたのですから。

二人が身を忍ぶやうにして女と行き違はうとした時にぴつたりと女は立留つて二人の道を塞(ふさ)いでげす〳〵と笑ひ聲を立てました。

「丸平(とらひら)の令孃(さま)だらうでがな」

「お粂はんでか。今晩は、もうお歸りよるんでか。町へいつとつたんでか？」とお竹は恐怖のために自然と言葉を多くして訊ねました。

「私(うつちや)はなあ、唐太はんくへ手傳に行とつたでわ。」

「忙(せわ)しいだらうな」

「うんにや、そんな事があるでかだ？」

そして彼女はすた〳〵と歩いて遠ざかりました。せうづかの婆もあんなだらうかと私は

お竹にさゝやきました。するとお竹はしつと叱りました。それが聞えたかと思つたのです、蓬々とした赤毛の髮と、尖つた顋と、ぎら〳〵した眼とをもつた中脊の姿がぼうつと月夜の暗がりにすつかり消え去つた時、その甲高い聲と、たえず打振つてゐた首とが、ぞつと物凄く私の手足をびくびくとさせました。

「孃、怖ろしかつたでかい」

「えゝ、ほんまに恐ろしかつた」かう云つて私はお竹と顔を見合して吐息をしました。

狂人のお粂の家は若宮神社の松の下の路からまだ〳〵十町ばかり奥の、和泉寺の下の用水に沿うて細い谷の土手を傳つていつたところの山峽の左側の山麓の松林の縁にたゞ一つ建つてゐました。建つてゐると云ふ事が出來ませうか。それは唯荒々しい松の枝を引結んで四方を山土で塗つて、荒莚をしいてあるばかり、土竈を一つ築いてあるばかりの穴倉のやうなところでありました。私達はせんぶりや(薬となる山草)や茸を取りにその山に入つた時には大抵お粂のこの家へ入つて見るのでした。惡戯い男の子などは、お粂の留守を幸にして、鍋の中や薄團の中に石や、馬糞や、殺した蛇を投げ込んだりするのでした。

誰がお粂のためにその家を造つたのかは知りません。しかしその地所は西地のものでした。そして西地は私の母の里家であつたのです。お粂には親戚も兄弟も何もありませんで

した。殊に阿波の女ではなく、峠のむかふの讃岐の引田港のものでした。

お兼が雑魚賣商や奉公人達とともに峠をこして阿波に來ましたのは彼女の廿五位の時で酌婦をしてゐた事もあつたり、いろんな憂目に逢つてゐる間に、男にひどく欺されたのが元となつた色情狂だと云ふ事が私の村の人によつて傳へられてゐました。病氣が昂じた時には、道路の若い男を追ひ駈けるのでした。病氣の薄らいだ時は上手な、なめらかな優しい聲で歌を唄つたり、踊つたりして見せました。

お兼はとう〳〵讃岐の引田の町よりも、阿波の山峡の村の方がよくなつたものと見え、いつの年よりか歸らなくなり、若宮神社の松と對ひ合つてゐる小山の上の祇園の社で寢起きするやうになりました。けれどもそれは村の人の嫌がる事でしたから、村の寄合の時の相談で、ずつとあの山奥の水源に近い西地の山の麓にその家を拵へてやつて住むやうにさせました。そして田植や、田草取やいろ〳〵の野良仕事に雇つてやつては、麥や着物を與へました。そのあひまには松葉を掻いて町へ持つて行つて、金にしたりしました。それで病が起らないと、お兼は重寶がられました。

お兼は色は薄黒くなつてゐた——それはもう構はなかつたからで——けれどその皮膚は細かで、眉の濃い、元は中々美い女である事が窶れた顔にも殘つてゐました。寺の庭で毎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

年催される盆踊りには、いつでも眞先になつて踊り狂ひました。すると村の若衆はお兼を笑はせたり押し倒したり抱えたりしては笑ひ興じました。さういふ時、お兼は正體もなく喜んで跳ね上がるのでした。山門のあたりでわあ〳〵と云ふ子供達の喚き聲の起る時にはお兼が、惡戯い若衆の人々に仰向に倒されたりして笑ひ狂つてゐるのでした。

丁度私が九つの時だつたと思ひます。

「お兼の腹のふくれてるのを見いや、孕んだのぞよ」かう村の者が口々に申すやうになりました。その中にお兼の姙娠はもう隱す事が出來ない程臨月に近付いてゆきました。

あの狸の穴のやうな暗いところへ、あの寺の下の暗い用水土手を傳うて、誰がそんな不氣味な色事をしたのであらう。村の若衆の誰か彼かと噂を立てられましたが、流石に盆踊の夜や、祭りの晩には抱いたり倒したりした若衆達も一人として相手らしい證跡をもつてゐませんでした。けれどもお兼はそれを隱しませんでした。

「お兼はん。お前はんの男は誰れ？」

かう云つて訊ねたものがありました、するとお兼は待ち設けたものの樣に云ふのでした。

「私の男でかな。木を樵りに來る人でわな」

それは山峽に入り込んで小屋を造つて働いてゐる隣村の樵夫達の事なのでした。しかし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

多くの樵夫の中の誰であるかは分りませんでした。

「私の處へ來て泊るんぢやけんど、どんな顔をしてゐる人やら私が知るでかな」

それはお兼の云ふ通りでありました。宵暗の間に忍び込んで、朝闇の間に潜りぬけて山に歸つてゆくので男の顔がお兼には分らないのでした。

「お兼が子供を生んだ」

かう云ふ事が村中に知れた時は誰も彼もが見に行きました。私も亦四五人の子供達と一緒に家を覗きに行きました。その穴倉の中からは本當に、赤子の鳴き聲がきこえました、狂女がこわいし子供は見たいし、あちらこちらとうろ〳〵してゐた時、丁度山から歸る女連れに見付けられて叱られて連れ歸られました。

ところがお兼の身體が肥立つてからは二三日とはたたない中にその生れた子供はお兼の小屋の中に見えなくなりました。怖れて誰も訊ねませんでした。お兼は産の前後ともに氣が荒くなつて居りました。

すつかりお兼が落着いてから村に出て來るやうになつた時、女達がその子供の事をたづねました。と、お兼は無雜作にげす〳〵笑ひました。

「谷に放つて了うたんでわ」

「お兼が子供を谷に投つた」

から云ふ話が村中に傳はつた頃でした。私たち、七八人の子供は、毎日々々、怖ろしい好奇心から村の谿を下流へ上流へ夢中になつて探し歩いたり、幟が淵とか、天狗が淵とか云ふ青黒い渦の巻く深い淵を岸から見下したり、白い岩の頭をさうかと思つたり、烏の降りてゐるのをさうかと思つたりしたものです。

七重に山の折り重つた山脈は夜露にまつはれ、夜霧はまた、折柄の月にぽつと白い。地球の生物の寝靜まつた深夜に山はかつと眼を見開いて、色情狂とその生んだ兒とを見守つてゐる。

お兼はぼろぎれに包んだものを抱へて、畔を傳つて谿の方へとゆく。そこは二年程まへ粉屋の女房が、水車の歯にはさまれて八裂となつて砕けて吐き出された水車小屋の水口の崖にそひながら、なほも岩を飛んだり、登つたりして幟が淵の方へ、骸骨のやうな尖つた後影と、猿のやうな身輕い素足とをもつて歩いてゆく。

泣聲が起らうとする。その聲の洩れた時、お兼はぼろぎれを、はたと岩に打當てたりさら〳〵と流れてゆく水に浸したり、自分の足が、水苔に辷つて轉んだり……

山は上からきちがひとぼろ、、、きれとを眺めてゐた。

今から四年前の事でした。私が歸省した時お兼があの小家で病み衰へて死んだといふ事を聞きました。何の病氣で倒れたのだかそれは知りません。お兼の小屋はそのまゝに置かれてありました。

父の墓參りの歸りに西地の前の山から北の方の山峽を見た時、山裾の松林の陰に、便所ででもあるやうにお兼の小屋が灰色に見えてゐました。稻の黃色い實りの輝く中に含まれてゐる山地の秋が身に迫るやうでありました。

今年歸る事が出來てゐたなら、淸一と二人で私はきつとあの山峽を見るのでしたが、しかしお兼の小屋は今も猶あるでせうか、それは私に分りません。(八月廿二日稿)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

七月末の日記より

濱野雪

手術臺に上つて眼をつぶると、もう頭腦の底がズーンとしてくる。でもゝう今日限りだ——さう思つて、じつと息をつめてゐた。

ほんたうに齒の痛みといふものは苦しいものだ。齒を病んだ事の無い人には、とてもとても想像もつかぬ位堪らないものだ。私はかなりその苦しみに馴れてゐる。けれど、馴れるといふ事が少しも苦しみを減らしはしないで、一層ひどくするやうだ。實にたまらない。

ジー、ジー、と不快な音を立てながらエンジンが齒に觸れる。なんといふいやな音だらう。私はあの音を聽く度に、齒を削るのではなくて、心のそこの神經を削られてゐるやうな氣分になる。ひよつとしてそれを一時間も續けられようものなら、きつと昏倒するかも知れない。堅く組合せた手掌にも、顔から背にも、タラ／＼と油汗が滲んで來た。

「さあ拔きますよ、今日は大丈夫ですか」

笑を含んだ先生のお聲がした。私は二度も三度も腦貧血を起した、意氣地なさを思出して恥づかしくなつた。笑はうとしたけれど笑へなかつた。けふでもうおしまいだ——亦さう思つて、三本目の齲齒の神經を拔かれるのをじつと堪へてゐた。

チリチリと微な鋭い音を立てゝ、細い曲つた針が喰ひ込んで行く。刺すやうだとも、灼くやうだとも、何とも言ひやうの無い痛みである。私は私の胸が、大きな氷塊をでものせられたやうに、重く／＼、冷たく／＼なるのを感じた。さうしてぎゆつと眼を閉ぢてゐるのに、銀色をした細い／＼神經が、うろの肉からゑぐり出されるのがはつきりと瞳にうつた。——

「さあ済みました」と言はれた時には、ほんとうにどんなに嬉しかつたらう。私はうがひをしながら鏡に映る面を眺めた。ひどく蒼ざめてゐる。さうしておしろいがすつかりはげてゐる。でも私は嬉しくてたまらなかつた。半月以上も悩んだ歯がすつかり癒つたといふ事は、思ふても〳〵うれしかつた。

私はまるでこどものやうに、食べたい物をいろ〳〵と考へて見た。

——十六日——

私は毎年きまつて夏まけをする。でも今年は大丈夫らしいと油断をしたら。さう〳〵やられて了つて、今日でもう四日臥つてゐる。時々ひどく熱が浮いて、足の附根がちぎれるかと思ふ程だるくて重い。右のこめかみのまわりだけが疼くやうに痛むで、飲んでも〳〵咽喉がかわく。机の上の小鏡を覗いたら、唇が氣味の悪い程まつ赤に干乾びてゐた。

ほんとうに私はよく病氣をする。又虚病かなどゝ冗談交りに言はれゐくらゐ、病氣をしない月は殆ど無い。時には自分乍ら厭になる事もあるけれど、弱い意氣地のない私のこゝろが、ぢき病氣の陰に自分を隠したくなるのだつた。全く病氣をしてる間は可也自由だもの。うるさい周圍から逃れて、全く一人つきりで、好きな物思ひに耽る事が出來るもの。この意味で。むしろ私は病氣を喜ぶ氣味があつた。——それを卑怯だとは自分でも知つてゐる。奈何かして強くなりたいとは自分でも希つてゐる。けれど私はこどもの頃から弱かつた。弱い體は心をまでも弱くして了つたのらしい、私は年中病氣をしつゝけて、ほんとうにみじめな生き方をして行く。だから、見るから強健なからだを持つてる人と對つてる時は、何時も知らず〳〵の間に壓迫されて、無意識のうちに輕い反感を抱く事が間々あつた。それが自分の好きだとか、崇拝する人である時はなほの事、寂しいやうなこゝろもちになる事さへもあるのだつた。——

私は小さい氷のかけを口にふくむだ。かすかな苦味が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舌に殘つた。枕をひつくら返して右を下にしながら、障子を二寸ばかりあけて見た。松葉牡丹がいつぱい咲き擴つてゐる。昨年ほんの十株ほど植ゑたのが、ことしはびつくりする程ふえた。所々ひよつこりと、思ひもよらぬ位遠く離れたところへ、一花二花づゝ咲いてゐるのが、なんだか哀れらしかつた。紅だの、黄だの、樺だの、紫つぽいのだの、さまぐ〱に咲き比べてゐるのが、かなり生な色をしてゐると思へた。ちよつと新モスの友染でも眺めるやうな氣がした。

――廿一日――

夕方みんなが行水を使ふ時の騷ぎつたら無い。斯うして臥つてゐる時には(いつもは馴れつこになつてゐるけど)辛抱しきれぬ程じりじりしてくる。十五を頭に三人の男の子が、勢いつぱいはねまわるのである。私が叱つた位で止めるやうな、そんな生優しいあばれ方ぢやない。私はじつと耳を押へてゐた。と、ふと涙がにじみ出た。莫迦々々しいこつた――さう思ひながらもにじむまゝに任せてゐると、その三人のわんぱくどもが、揃つてまつ黑な頸へ汗しらずをいつぱい刷きつけて、すまして湯殿から出て行く姿が見えた。私は思はず笑ひ出して了つた。

――同じ日――

蚊帳を釣りに來たふさも、やつぱり汗知らずをまつ白につけてゐた。まじ〱と眺めてゐたら、浴衣の袂でぐい〱擦りながら。「みつともなうござんしよ」と言つて笑つた。その笑ひ方がひどく寂しいものに思へた。私は「いゝえきれいだよ」と言つて遣つた。そして、いくらおつけといつても白粉をつけた事のない、ふさの事を考へてみた。私とはたつた一つしきやちがはないのに。

――同じ日――

熱がすつかりさめたらしいのに安心して、午後から髮を洗つて見た。今日も九十度以上あるけれど、大分風があるので凌ぎよい。私はたゞぼんやりと窓の下に坐つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ゐた。

――丁度五時頃だつたらう、私はだらけきつた姿のまんまで鏡臺の前で髮を梳いてゐると、玄關に案内を求めるけはひがしたので、何氣なく振向いて見た。と、そこに眉の美しい、きれいな人が立つていらした。「あゝNさまだ」さう氣がつくと直ぐ、私は櫛をはふりだして逃げ込んでしまつた。ひどく動悸の打つ胸を押へて、じつとたゞ居すくんでゐたのである。「なんといふはづかしいこと」と思ひながら、聽きたいやうな氣がした。

あんなにもだらけきつたしどけない姿を、初めて會ふ人に見られたのがわけもなく恥づかしくてたまらなんだなんと御覽になつたゞらうと考へると、このまゝ會はずに濟ませたい氣さへして來た。

ほんとうに私はしよげてしまつた。すつかりあわてきつたのである。そしておづ〳〵と自分ながら厭になる程氣の利かない御挨拶をした。束ねもしない髮がうるさく頰にへばりついた。

その室には、Nさまから頂いた中折畫が掛けてあつた。その側に白秋さまの短册が風に搖れてゐた。もう日はかげつて涼しい風が窓いつぱいにふくらんで吹き入つた。でも私は暑かつた。私は膝ばかり見詰めて、繪だのお芝居だの小說だのゝお話をした。Nさまのお袴のかつきりした縞と、自分の浴衣のはでな絞りとを眺めてゐた。

Nさまはおかきになるお繪の、ひどく才に富んだ輕い厭味のない江戸ッ子らしい氣分をたくさんに含んでゐるのとは少しちがつて、たいへんしんみりとしたなつかしみのある、感じのいゝ方であつた。私はそれが何より嬉しくてたまらなかつた。――斯ういつては失禮だけれど――實際作家だの畫家だのゝ中には、お作ばかり拜見してればよかつたと思ふやうな、お目にかゝつて悔に似た怨じをうける方が少なくないのだから。(私は私の我儘な事を、安つぽい感情に囚はれすぎる事を、愧づべき事だと知つては居る。でもどうしてもしかたがない。)

「お目にかゝつていゝ事をした」と、繰返して考へてゐ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。夫といつしよに、こんな汚ない面をしてゐるといふ事が、氣になつて〳〵しようが無かつた。私は私の不縹緻なことを悲しい程知つてゐる。だからなるべく白粉を離さぬやうにしてゐる。だのに今日に限つては、碌々手水さへも使はなかつたのだもの。あんまり不意にいらつしやりすぎた――斯う思ふと、少しNさまが憎らしいやうな氣にもなつてきた――。

途中までお見送りして、そのまゝ街の角に佇んだ。今夜の空はたいへん美しい。星が高い高いところにあつた。その星を數へ乍ら、斯うした美しい夜を、もつと〳〵更けてから岐阜提灯一つともしたその下で、しみ〴〵とお話が伺ひたかつたのにと、愚痴な心がまだ呟いてゐた。「お莫迦さん」さう言つて、ふつと自分で自分が嗤つてやりたくなつた。

――廿二日――

もう雨を見なくなつてから、彼是半月にもならう、何處も彼處もカラ〳〵に乾ききつて、植込みの八ツ手などの葉裏が白々と光るのも、見るから咽喉のいりつく氣がする。あの私の大好きな雨の日のしめやかな情緒を、すつかり忘れて了ひさうで淋しい。雨が欲しい。ほんとうに雨が欲しい。斯う喰ひ入るやうに思ひながら、コツ〳〵と物を書いて暮した。腕に汗が滲むので、紙の上へインキの跡が薄く散るのを、何だか氣になるので幾度も書直して見た。私は今ひどく疲れてゐる。

夜は花火が美しかつた。妹たちは涼み縁にゴチヤ〳〵かたまつて、誰が奈何しやべつてゐるのか解らない程賑いでゐる。でも相變らず妹がいちばん一同を笑はせてゐるらしい。ほんとうに無邪氣な子だと思ふ。いつまでもあの無邪氣のまゝで置きたいとも思ふ。けれども十七だ。それを思ふとつい皮肉な笑が唇に上る。この頃奈何かすると、人知れずじつと鏡の前に坐つてるのを見掛けることもある。――そんな事を考へながら私はひとりで中二階にゐた。夜になると一人でゐたい。

また夢でも見たくなつたのだらうか――。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

—廿四日—

夕方Kさんがいらした。「耳が惡いのでね、首尾よく徴兵をのがれましたよ」と言つてにこにこしてゐる。なんか輕い皮肉でも言つて遣りたい氣がしたけれど、あんまり罪の無い笑ひ顔をしてゐるので、つい自分まで微笑して了つた。「――これから大いにやりますよ」さういつてKさんは皈つて行つた。いつか歌留多會の時に、まつ赤なトルコ帽をかぶつてゐた事が、いつまでも思ひ出される。

—廿五日—

夜聖天さまへおまゐりした序に、Yちやんのとこへ寄つて見た。例の通りお留守だつたので、をばさんや姉さんとお話してゐた。若い女形のYちやんはドイツ語をやつてゐるといふ、それが皮肉におもへていけない。私は微笑しながら書棚の上の大理石像を眺めた。その書棚の水色絹と、机のひきての翡翠色をしたのとが、たいへん涼しげに見えた。そして机には久保田さまの雪と譚談本とが上つてゐた。「――Yもこの頃はすつかり生意氣になりましてねえ」とをばさんは嬉しさうな面をして切拔通信を見てゐる。昔が偲ばれるほんとうにあくぬけのした面だ。姉さんもそれはきれいな人だ。とりわけて眼と姿がいゝ。さう思ひ〳〵、私はちと膝をくづしてお話した。

そとへ出ると明日十五夜といふ月があかるかつた。私は今戸橋の上から月と水と灯とを眺めてゐた。河岸には黒い影がいくつも動いてゐた。こんなに澄みきつた空よりも、月には少し邪魔にならぬ程のうす雲が欲しいと思ふ。そして、今戸橋といふ名には、たとへ朽ちかゝつてゐようとも、やつぱり元のやうな板橋がふさはしいものをと、少し口惜しい氣もした。

Iさまの二階の障子が明け放してあつた。まだそんな事まで氣になるのかと思ふと可笑しい。

とにかく夏の夜といふものは、ひどく人なつかしいものだ。私には今逢ひたいと思ふ人が三人ほどある。

—同じ日—

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

折りにふれて

——日記より——

岡田ゆき

水曜日にお稽古に上つた時Y先生は、
「どうぞ、病氣をなさらない様にして下さい。私は自分の命をけづられる様に思ひますよ。御病氣つて事を伺ふと。」
とおつしやつた。
私は默つて歸つて來た。自分でも病氣には決してなりたくないのは知れ切つて居るが、先生がそれ程に云つて下さるのがうれしかつたのである。
その翌日から、また二日ばかり私は、ひどい熱で床に居た。丁度先生の御言葉が何かの暗示でゞもある様に。
三十九度近くの熱で寝てゐた時、私は自分の臨終を夢にみて泣きながらさめた。涙は頬を傳ふて居た。そして氷枕はなまぬるくとけて居た。私は實に、いやな思ひがした。
生あるもの、總ての終局は死である。
然し、自分は未だ終局に行きつくべき者ぢやない。おそらく誰れしも事實死ぬべき時が來て居ても心に死の翼の音をきゝながら、自己の死を否定するであらう。今、自殺しやうとしてゐる人間でも、心の一隅では「今、自分はこうして死なうとしてゐる。然し、ひよつとして思ひがけない、運命のもとに死なずともすみはしないだらうか。」と考へて居るに相違ないのである。
兎に角私はもつと／＼生きるのだ。しかも生きがいある生活をするのである。
私は日頃から、車の上で本を讀むのが常である。
今朝も四谷に行くのに、いつもの様に本を讀みながら、赤坂あたり迄行くと、
「車の上で本を見てゐる生意氣な奴だなあ。」
と、誰れだか、大聲に云ふのを聞いた。無智な車力かなんかゞ云つたのであらうが、私は何の氣なしに人から借

りて來たものを、「お前はそれを盜んで來たんだな。」と云はれた樣な感じがした。

私はたとへ一分時たりとも、空な時間を費さないために、又、あたりが、恐ろしくさわがしく、その上自分の體が動いてゐるにかゝはらず、不思議に意識が一點に集るところから、車上で讀書をするのである。

私はみえで本を讀むのではない。世界の偉人の思想を幾分なりとも、自分のものにし、自己を大きくしたいと云ふ心から、熱心に讀書するのである。

他人の心の根底も知らず、やたらと罵詈する無智な人間は呪ふべきである。

朝、部屋に居た時プロペラアのすさまじい音を聞いた。椽に出て見ると、飛行船雄飛號である。自分の頭の上に奇怪な形の偉大なものが居ると思ふと、何んとなく上から、おさへつけられて居る樣で、精神的に壓迫を感じる。それにあのプロペラアの音は、下界の人間をおどしつけてる樣に思はれる。

そして妙に腹立たしい、いらいらした心持ちになつて來る。こんな氣持ちになるのは、自分ばかりかも知れない。

然しかう、種々な、外界から來る、刺戟に取卷かれて、生活しなければならない都會人を思ふと自分は眞に靜寂を欲するのである。少くも、音響のない世の中はないであらうが、浮世繪に表現された樣な世に憧憬を持つて居る。のどかな駕籠舁の掛聲と、輕い下駄の音と、しめやかな話聲より浮世繪は音を持つて居ない樣な感じがする。

ぼんやり、椽の手摺によつて、こんな事を考へてる内に、雄飛號は漸次遠ざかつて行く。

いやなプロペラアの音は未だ聞えるなあ、と思つた瞬間、思はず袖で耳を掩ふた。

先日から、京都のK氏の編輯してゐられる、雜誌「M」に印度繪畫に就いて、“The Festival of Empire.”から譯す事になつて居たので、此の間から書きかけの原稿を

昨夜書き終つたので今日から始めて見ると、まるで上手にいかない。悲しくなつた。餘り自分が貧弱なので情けなくなつた。

日頃から自分の實力のない、貧弱さは知つて居るが、かう目前にみせつけられると、たまらなく悲しいのである。けれども自分の貧弱さを自覺しない人よりは未だましであるとも考へるがやつぱり悲しいには、相違ないのである。總てに充實した頭と腕が欲しい。否、必ず得なければならない。努力。努力。此の悲しみを救ふに努力をおいて何があらうか。

千里行つた人も、必ず One Step から始めたに違ひないのだもの、只徒らに悲しんでゐるひまに、自分は努力しなければならないのである。自分は墓穴に下る迄、努力し、自分を大きくしなければならない。

けたゝましく笑ふかと思へば、そゝられた樣に泣く、狂女の樣なと、でも云つたなら、昨日、今日の時候にあてはまるかも知れない。なまあたゝかい、南の風が吹いて、青葉に照る太陽の光りが、赤銅色に私の目を射たのは、昨日の事であつたのに、今日はまたどうしたのであらう。此の寒さ。襟垢を拭きとつた袷を又、ひき出して着なければならない程である。今朝から雨は小止みなく降つて居る。

ピーエル、ロッティが「日本の秋」に雨の日の事を、何處から、何處迄も泣いてゐる樣に見えると書いてるのを思ひ出した。未だ體の具合がよくならないので、稽古にも出られないので、只ひとり部屋に座つてゐる時、單調な雨の音で、私の頭は、ぼうとしてしまつた。

一週間ばかり、運動しないので、胃も惡くなつたし、頭の具合も惡い。自分のすべき仕事にとりかゝる前に確固たる健康を握られればならないと、考へる。まとまつた事をする氣でもかう、つまづいてばかり居ては仕樣がない。いつも、自分の體の弱い事を考へると、たまらなく悲しくぢれつたくなるのである。(終)

――(大正四、六、二)――

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私信

野上彌生子

野枝さん。この前は長いお手紙をありがたう。久しぶりの故郷があなたに與へた色々な印象を想像してゐます。而して私はそれを本統に近くまで分るに適してゐると思ひます。少女時代の夢の搖籃を、私も丁度あなたの國の近傍に持つてゐる身なのですから。門司を起點として分れてゐる二筋の九州線に依つて上を走ればあなたの村へ行けるのでせう。下へ降りれば私の町があります。去年の旅のことが又新らしく思ひ出されて來ました。私達が一年前の九月に通つた路が、また今度あなた方の旅になつたのですねえ。海峽の岸に建つたあの待居室であなた方も對岸の九州から來る連絡船を待つたのでせう。窮屈な汽車の箱から出て、海峽の笹濁りしたおだやかな波を目の前に見た時には、本統のう〱したいゝ氣持ちになりました。ことに子供達の悅びやうつてありませんでした。一晝夜箱の中に監禁されてゐたやうなものですからねえ。手足は自由になるし、意外な廣い海はあるし、且つその上には大きな軍艦から汽船、帆前船から小さいボートの類まで、おもちや屋の棚をひつくら返したやうに浮いてると云

ふ有樣ですからこの上の愉快はない譯ですとも。私達は旅をしてると云ふ心地も忘れあたりにあわたゞしく動いてゐる人足や、釜山の連絡船に急ぐ船客の群れにも無關心で、子供連れで何處か公園の池の畔へ遊びにでも來てるようなのんきな氣分になつてゐたのでしたよ。こんなことを思ひ出すにつけてもまこさんのことが考へられます。三ッの小さい子供に、初めての旅と云ふものがどんなに印象されたでせう。何かお氣のついたことはありませんでしたか。まこさんには山も海も河も、初めてなんですものねえ。すべてがどんなにお珍らしく、且つ奇怪に感じられたでせうと思はれます。去年の二人の子供の旅も、沿道の光景のあらゆる事が彼等には驚異であつたらしく見へました。考へて見れば無理もありませんわねえ。私達をとなは一と口に山だ海だつて平氣に云つて仕舞つてゐますけれども、その山なり海なりを、今新らたに、子供等の第一印象の如く考へて見るとしたらどうでせう。不思議なものですものねえ。あたり前の土のある地面よりかは何千尺も高いのだと云ふその異形なものは一體何でせう。又土とは色の變つた、柔らかそうな廣々した平面の上に、碧い水見たようなものが一杯動いてゐるのは何でせう。且つこんなものはどうしてあるのでせう。斯んな不審の起きた時、私達に根本的の説明を與へて下さるのは誰でせう。地史學の先生でせ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うか。さう。私達はその先生から敎はつて簡單ではあるがそれ等に就いての一般的智識を持つてゐる筈であります。だからもし子供から尋ねられたら、その智識に依つて彼等に說明しなければなりません。けれども子供の質問はしつこいものです。根堀葉ほりそれから、それからと問ひ進められたら私には答へられない。私は一言に、

「何もかも世界ぢゆうのものは神樣がお拵へなすつたのです」

と自信を持つて云ひきる程の、強い宗敎的信仰も持つてゐない、同時に自分にも推論し、人にも滿足させられる丈けの科學上の智識を持つてゐない母親を自分から憐むものであります。こゝに例へ口には出さない時でも、彼等のその眼は、あらゆる質問――山や海は云はずとしても、庭の花に樹木に、草に、その葉の上の小さい蟻に對して持つてゐるらしく見えますもの。私は子供が世に出た暫くは盲目であり、聾である事は、造化の巧妙な用心からだらうと考へた事があります。何故と云つて彼等の出來上つた計りの初々しい諸神經や官能が、直ちに自分達の周圍を取り卷く萬有の珍奇、驚異に脅かされるのは、餘りに殘酷な仕方でなければなりませんもの。でなければ生れると同時に氣違ひになる子供があるかも知れません。ねえ、さうはお考へになりませんか。こんな風に思ひかゝるといろ／＼な問題が考へられますねえ。あなたも又今

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

度は母親の世界、子供の世界に就いて色々な感じを味ふ機會の多い事と存じます。お歸りになつたらゆつくりお聞きかせ下さいな。私は又まこさんが、今までの青白い、子供のやうでもない憂鬱な表情を、すつかり亡くして、活潑な元氣のいゝ小さいお兄さんになつて歸つてゐらつしやる日を待つてゐます。此の處にゐるまこさんの二人の子供友達は、相變らず元氣よく騷ぎ廻つてゐます。お兄さんこの頃しきりと家の外の世界に興味を持ち出しました。どうかすると默つて染井橋の近所までも出掛けて行つて、

「僕ちよつと散歩に行つて來ました。」

なんて得意になつて歸るのに困つてゐます。妄りに一人で外出してはいけない事、出入にはきつと許可を受ける事と云ふ窮屈な規則の意味が、彼には本統に呑み込めないらしいのです、その上云つたら留められやしないかと云ふ用心もあるし、又それ程深い思考の猶豫もなしにたゞぶらりと門の外に出て見度くなるらしいのであります。庭續きになつてゐたあなたのお家にさへ一人では行けなかつた昨年の夏に比較すると大變な違ひになりました。外界に對する好奇心と一種の自由を愛する心持ちから生ずる、幼年時代の放浪性が現はれかけたのだらうと思つて、よく注意して觀察してゐます。Little vagabond と云ふ仇名まで出來てしまひました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それから見ると弟の方は依然として赤ん坊じみた顔や、動作を失はないでゐます。お兄さんが善い事にも惡い事にも、人間性の著しい發達をなしつゝあるに對して、それは非常な對照を作ります。本統にこの小さい者のために、私は地上にはなりえない事の如くにさへ考へられてゐた最上級の人道的の道德が、易々と實行されるのを見るのは珍らしくありません。このことだけでも何程この子供に感謝しなければならないか知れないのです。

　丁度二三日前の夕方でした。私は勝手に出て煮物をしてゐました。子供達は側で繪本をひろげてゐました。そこへふよが井戸傍から米研ぎ桶を抱へて來ました。而して行きなり嘆美の聲をあげました。

「まあお坊ちやま御覽なさいまし。きれいな雲ぢや御座いませんか。」

　彼女も私達もうつ向いて計り仕事をしてゐたので、その時西の空に現はれてゐた夕の美しい光景には氣がつかないでゐたのでした。私達は立ち上つてその夕空を眺めました。瑠璃と金と紅と錯雜し混亂した色彩、それを明るくし、暗くして入り亂れてゐる光と影、それ等のすべてを戰せながら靜かに暮れようとしてゐる目の前の夕空の一片は、松や檜葉やその他の綠樹を前景にして全く見事な有樣でした。私は煮物の箸を握つたまゝ暫く見とれてゐました。お兄さんはもつとよく見ようとして、臺所のまん中に踏臺を持ち出して來てその上に上つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て見ました。弟も高いところから見たがりました。私は抱いてやりました。すると彼はこんなことを尋ねました。

「あれ、なアに。」

　あなたの知つてゐらしやる通りのおぼつかない、幼なげな云ひ方で。

「あれはね、雲と云ふものですよ。」

　私は斯う答へました。

「あすこへ行きませうよ。」

　この奇抜な發意には私も一寸と驚かされました。でも私は賛成しないではゐられませんでした。

「えゝ、行きませうねえ。」

「お母さま、お兄ちやま、いゝや、みんなして行きませうねえ。」

「えゝ、行きませうともねえ。」

「明日行きませうねえ。」

「えゝ、明日行きませう。」

　彼は私のすべての同意に滿足して腕から下りました。私は日に幾度か彼とこんな會話を交換し得ること、そう云ふ神聖な天上旅行に同行を求められると云ふことを、この上もなく幸福に且つ光榮に思はれます。

　野枝さん、あなたも彼のために同行を諾しておやり下さるお一人でせうねえ。

　あなたがお歸りになつてからまだ一と月もたちませんが、私達の知つてる人々のまわりには可なりいろ／＼な出來ごとが起つたらしう御座います。女の内的生活と云ふことが、この頃は殊に意味深く復雑に考へられます。折があつたら又そのことに就いて何か書いて送るかも知れません。

　まあどうぞ御大事になさいませ。みな樣へもよろしく。

病衣を脱ぎて

岡本かの子

生田花世樣に

生田花世さま。あなた樣は、一昨年の十一月中旬の或日、私の不在でした私の家を、わざわざ御訪問下さつたことを、まだ、あなた樣の御記憶のなかに、御とゞめ置き下さいますでせうか。たしか、あの後、間もなく生田樣との御結婚も御座いましたそうで、(私は特に、そうでと茲には云はして頂きます。その譯は、あとで御分りになることで御座いますから。)隨分御心せはしくも居らしつたで御座いませうが、どんな一些事にしても、御自身のかつて遊ばしたあとを、輕々しく紛らはしたり、容易に忘れたり遊ばさぬあなた樣は、きつと、遠い一昨年の、あの日のことをも、はつきり、御記憶下さることゝお信じ申上げます。

けれど、あの日御訪問下さつた御厚志を無に致したばかりでなく、間もなく後に頂いた御書信のお返事をすら差し上げないで、今日まで、御無沙汰いたし續けて居りました私が、いまごろ突然、何を申し出すかとおあやしみにもなりませうが、斯う書きさしましてさへ、もう、私の眼の中には、どつと涙がにじんで參るので御座います。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其に就きましては、とても涙と戰慄なしには居られないあの當時からつい近頃まで私をさいなんで居た悲慘な苦痛の追憶を、申上げなければならないので御座います。けれど、細く申上げましたらきりも御座いません、今はたゞ、御無沙汰の理由を、みどめて頂るだけの程度に致して置きます。一昨年の八月下旬、丁度あなた樣が御訪ね下さつた二ケ月半程まへに、私は産を致したので御座いました。産はかなり安産で御座いました。けれども、どうも、あとの肥立があまり思はしく御座いませんでした處へ、或日、思ひがけぬ刺戟に襲はれたので御座います。其刺戟の内容に就いては、今細か〻申上げませんけれど、とにかく、私がはつと致しました其瞬間、俗に云ふ「産後の逆血」と云ふ奇怪な發作によつて、私の全身の血は、恐ろしい勢をもつて、私の頭へ一途に登り結め、同時に、私は、殆んど正氣を失つて仕舞つたので御座います。まことに、まことに、あの苦痛、あの懊惱を何と形容致しませうか、其は生血を吸ひ取られるよりも、また、黑髮を逆手にからまれるよりも、全身にするどく針を突き刺されるよりも、きりきりと毒蛇にまかれさいなまれるよりも、……眼を据え、歯をかみしめ、慟哭し、悲鳴をあげて、あらゆる手段で、私は苦痛に抵抗しようとし、もがき、訴へたので御座いますけれども、女子のみの病氣、まして其女の中の幾人が知ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うかとさへ思はれる奇怪な病氣には、博士と云ふ名を持つた醫師すら、充分な理解を持たれぬ樣に見えました。私は無我無中だつた裡からも、私の激烈な狂亂の炎には一滴の水にも價しない樣な、敎訓のみ試る中年の博士の型の堅い顏立ちと、看護にあぐねて、始終私をあやす樣にして居た世ずれた看護婦の面ざしを、おぼろげながら、覺えて居ります。實際私は、幼少の時から隨分色々な病氣の苦痛を味ひましたが、世の中にあの時の樣な奇怪な病苦の存在して居ることを兼て豫想だに致したことは御座いませんでした。

あなた樣が、靑山の家をお訪ね下さつた時には、斯うした私が、下町の或病院の二階の窓から、大きな澄んだ秋の夜の月を見上げて「あれ、お月樣が狂者になつた、いまに私を呑みに來る……。」と云つては泣き、「あれ、あれ、あの女がまた、私の生血を吸ひに來た。私のこの眞赤な戀の若い血をねたんで、あの醜い女が、汚い紫色の唇をして、眞黒な大きな口をあいて、あれ、あれ、あれ、あそこへ……。」などとふだんから私の戀をのろうて居る女の名など呼び續けたりして、居た最中なので御座います。こう云ふ凄慘な狀態がなほ幾日幾夜續いたあげく私は、やうやう、强度の藥液によつて、何ケ月ぶりかで、正氣にかへりました時の全身を荒れ亂ふ血を涸らしつくして、からうじて生命ばかりをとりとめ得たと云ふばか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りの、殘骸の樣な私の肉體と、困惑と憐愍の眼を私一つに集めて居る私の家族を私の周圍に見出したので御座います。で、ともかくも、肉體の苦痛からはのがれ得ましたものの同時に私は私の眞の生命を失つたと云ふ自覺によつて、更に更に、大きな心の苦痛を持つ樣になりました。私の眞の生命とは、其は若いにほやかな血液が釀す「歌」の感興や、「戀」のよろこびや、また、わづかながらも私相應に持つて居りました「若き姿」のほこりなので御座います。けれども其等のすべてはことごとく、むごたらしい病魔の手に引きさらはれて、嵐のあとの廢園の樣な殘骸がなんで私に必要なもので御座いましたでせう。淺ましく拔け落ちた私の髮や、無慘に褪せた唇を用捨もなく寫し出す鏡や、戀と云ふ一字を書く熱情さへ失つた、細く力ない手に、筆持つ張合ひは少しもなくなつて仕舞ひました。そして極端に病的な私の考へが、私の肉體も精神狀態も永久に斯して續くべきものであると、獨斷して仕舞つたので御座いました。其結果、私は失望と、嗟嘆に閉ぢられて、むしろ「死」をのみ願つたやるかたない懊惱に、また幾月かを空しく過しました。

けれども、昨年の秋の初め頃、ふと、投げ出された枯木の枝の樣な手足の肉付きや、むしられた人形の頭髮の樣にみじめだつた毛が、少しづゝながらも、とゝのひ始めたのに感付きまして、にはかに、自分の體を、

ながめまわし出しました。いつの頃からか、心の盛衰は、肉體に支配されるものと、信じて仕舞つた私の觀念が、病中殊に强度となり、なほまだ、此時まで續いて居ましたので、わづかながらも、肉體の回復を意識すると同時に、心もやゝ明るくなつた樣に覺えました。しかし其はまだまだ惡夢にさいなまれた夜のあとの、曉の窓に面した樣な、かすかな薄明にしか過ぎませんでしたけれど。其頃から私の家族の者は、追々少しづゝの安心をもつて、私の病中の出來事や、一ケ年あまりも私に秘して居た、知人の消息やを、やうやく語る樣になりました。それから、私の病中、根氣よく青鞜社から送られた「青鞜」を一かかへ、私がのぞいても見なかつた、書棚の奥から出して來たり、私を刺戟することを恐れて、かたく仕舞つてあつた諸方からの書信の一束になつてあつたのを、ほぐして見せたり致しました。そのなかで、平塚明子樣が幾度となく、私の消息をおたづね下さつた御書狀と、小林哥津樣の紹介狀にお添へになつた、まだあなた樣が「西崎」とおなのり遊ばした頃のお名刺と、ほかにまだ一通あつた御書狀とに、何のお挨拶をも申上げなかつたなほざりを殊に心苦しく存じました。で、平塚樣には、あわただしく筆を執つて、お詫狀を出しました。けれどもまだ始めてのあなた樣には、其が何とはなしに、あまり突然の樣で、ついつい今日まで、御無沙汰致し續けて居りました。小林哥津子樣も、今はどう遊ばして居らつしやりますやら、四年前、「青鞜社」の會のかへりの御一緒の電車のなかで、丁度、お人好の姉を世話する氣のはしよつ

た妹の樣な調子で、氣のきかない私に、乘換切符の面倒まで、見て下さつた氣さくなあのお方を、折々おなつかしく思ひかへして居ります。

今、私は、恰好も無く肥えきつて、隨分健者で御座います。歌の感興も、漸く少しはよみがへつて參りました。私はそれによつて、かすかな喜びを覺えつつ詠んだ最初の歌――それはもふ二ケ月ほども前ので御座いますけれど――を、三年前の御厚情に御むくゐ致すつもりで、あなた樣の御まへにお捧げ致します。けれどもあの大患のために「以前の私」をすつかりなくして、また新に造りかへられた樣な私に對して、なほ、三年以前の私なり私の歌なりにお拂ひ下さつた御厚志が續くものやらと思へば、何となく、心淋しく御座います。（七月下旬）

ひなげしのなつかしさよな青白き病衣をほせる初夏の椽

からうじて博多の帶もひとりして結び得るまで病癒えけり

前髪をかくさへたゆく力なき指もて折りぬひなげしの花

めさむればみとりづかれにまろねする君がうなじに淋しく照る灯

火の海か氷の山か三年ほどうめきて我のさまよひ來しは

我ながら心憎くも肉つきぬまたも病の來ずやねたみて

かにかくに生きてみそばに幾年かまた添ひまつる身となりにけり

紅き花とぼしくなりし我髮にさされていかに淋しくあらん

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九州より

——生田花世氏に——

野枝

生田さん、私たちは今回三百里ばかり都會からはなれて生活して居ります。

私達のゐます處は九州の北西の海岸です。博多灣の中の一つの小さな入江になつてゐます。村はさびしい小さな村です。私たちは本當にいま東京から大變遠くはなれてゐるやうな氣がしたり、それからまた、でもかうして原稿用紙に向つてペンを運んでゐますと矢張り東京にゐるのだと云ふやうな氣もします。けれども矢張り遠いのです。お友だちのことなんか考へてゐますと夜分にも會へるやうな氣もしますが一寸はどうしても會へないのです、あの窮屈な汽車の中に二晝夜も辛抱しなければならないのだと思ひますと、何だかあんまり遠すぎるのでがつかりします。一寸かへつて見ると云ふやうな自由がきかないのです。

此處は私の生れ故郷なのです。けれども矢張り私たちにはこんな處にどうしても滿足して呑氣に住んではゐられません、かうやつて家にゐますと全で外からは何の刺戟も來ないのですもの。單調な青い空と海と松と山と、と云つたやうな風でせう。此處で生れた私でさへさうですから、良人など

は都會に生れて何處にも住んだことのないと云つてもいゝ程の人ですからもう乾度つまらなくて仕方がないだらうと思つてゐます。それもこの附近はかなり景色がいゝのですしいろ〳〵な立派な偉大な自然に接觸することが出來るのですからそんな處も歩いて見ると少しはまぎらされるのでせうがいろ〳〵な事でまだそれ程の餘裕を種々な點で持ち得ませんので本當に氣の毒です。私もこちらへ來ましてから半月にもなりますが、まだ本當におちついて物を考へることは勿論書くこともよむことも出來ないしまつです。あなたはどうしてお出になりますか、お忙しう御座いますか。

私は東京にゐる間からかけづり歩いた疲れも旅のつかれも休めると云ふやうなゆつくりした折は少しもないのです。體はいくらか樂ですけれども種々な東京に殘した仕事についての煩はしい心配や氣苦勞で少しも休むひまがなく心が忙しいのです。

大分青鞜が廢刊になるとか云ふうはさも廣がつたやうですが私はどんなことをしても廢刊になど決してしないつもりです。讀者の間には隨分心配なすつた方があるでせうけれど引きつぎの當時にお約束したやうに、どんな困難にあつても、たとひ三頁にならうと四頁にならうと青鞜だけは續けてゆくつもりです。兎角事あれかしと待ちかまへてゐる閑人の多い中ですから一々うはさをとり上げてゐては大變ですけれどあん

まり馬鹿々々しく吹聴されるといやになつて仕舞ひます。

今の處實際雜誌はもとよりも貧弱になつたのは申すまでもなく私もよく承知して居ります。けれども私はまた私の考へで正直な處を云はして貰へるなら、私はむしろいま世間でチヤホヤされてゐる立派な人々の原稿を頂いて讀者の御機嫌をとつて雜誌を多く賣ると云ふことよりも寧ろこれからのびやうとする苗を培ふことにつとめたい、勿論私自身もその苗の一つなのですもの、さうしてお互ひにもつとずつと近しくなつてゆきたいと思ひますの、賣れなくなつては苦しいには違ひありません、私も出來る丈けは賣りたいと思ひますの、ですけれど私はすべてをすてゝ手段に走らうとはどうしても思ひません。いくら目的の爲めの手段とは云へ、そんなことを考へますといやになります。さうして手段と云ふやうな事に向つて事をやり始めますと、私の負けぎらひな向不見な性質がどう走るかしれないと思ひますとぞつとします。折角これまで、一歩一歩にどうにか質素な内輪な歩き方をしてゆかうとしかけてゐる私がどうなるかしれないと思ひますと、嫌やになります。女の世界の速記を御覽になりましたか。可なりぬきさしもあつたやうですが、あんなに馬鹿氣た、いやな私が頭をもたげるのです。私自身にもあれを見ましたときには本當に耻しくなりました。私の心持ではあの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

時に嘘を云ふつもりで嘘を云つたのは一つもありません、けれども卑怯な態度をとつたことは恥かしいと思つてゐます。つまり、いろんな不純な氣持から、こんなことを云へばまた面倒な質問をされると思つたり、煩さいからと云ふやうな横着な氣持からホンの二つ三つのうそをついたことが、その時は當然だと思つてゐました。けれども今では可なり恥かしく思つてゐます。

それもあの場合、向ふの人が眞面目にさうした問をかけてゐると思はれたら私は躊躇なく本當のことを云つたでせう。けれども私はあの野依と云ふ人を厭な人だとは勿論思ひません。どちらかと云へば氣持のいゝ好きな人の方ですが――あの人の態度とか思想とかについては私とは何のつながりもないことを知りすぎてゐました。其處で私の不純な悧巧が頭をもたげたのです。おまけに向ふの問ひ方が少からず不眞面目でしたから私もその氣になつてお相手になつて居りました。けれどもそれは私の卑劣な云ひ譯けに過ぎませんでした。私はまだ本當に嚴肅に自己を保ち得る力がないのをつく〴〵情なく思ひました。私は何故あの場合あくまで私の信實をもつて、眞面目をもつてあの人に當らなかつたらう。と思つたときにかなしくなりました。矢張り少さい時からの惡いくせは何處までも纏りついてゆくものだと思ひました。それは本當に私の惡いくせです、小さな卑怯者とは私のこと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

です。私は幼い時から失策をしたときに、その失策をありのまゝに他人の前に持ち出す信實を少しも持ちせんでした。私はその失策に氣がつくや否や、先づそれをそのまゝに持ち出すよりも前に何とかそれが尤もらしく他人に思はれるやうな理由を附けるか、或ひはそれを全くかくして仕舞ふやうな方法を講ずることを知つてゐました。しかしその爲めに、私はどの位自分でも苦しんだかしれません。苦しみながら私は矢張りそれを續けました。もしも私がそのことを平氣でする程になつてゐましたら決して生涯私はすくはれることはなかつたらうと自分でも思ひます。けれども私は幸ひに、平氣でそれを過して續けることは出來ませんでした。けれども何時と云つてそれを改めることは出來ませんでした。何故なら、私の周圍の人たちは皆私のその惡いくせを知つてゐました。そして私のすべてがそれによつて價値づけられました。勿論他人に、私のその惡いくせがそれ程私自身を苦しめてゐることがどうして解りませう。私はもがき〳〵だん〳〵ふかみへはいつてゆきました。けれどもふとしたはづみで私はすつかりその嘘の皮をぬぎました。私は大變樂になつたのです。本當にそれは何とも云へ、ない輕い氣持になりました。私は本當に、すつかりそれで嘘がきらひになりました。私は思ひます。それは〳〵澤山なうそを私は云ひました。またこしらへました。けれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ども私はその爲めに自分ひとりでどんなに苦しんだでせう。その苦しみが私にはあんまりよく解りすぎますのでもうそんな苦しみは決して負ふまいと思ひます。

けれども本當に油斷は出來ません。私は一寸、ほんの一寸油斷をした爲めにまた自分に對して不忠實なことをしました。小さな、微かな、ツマラナイ、本當につまらないヴハニテイを私が起したからです。自分でもどうしてそんなつまらない心持を起したかわかりません。「馬鹿にされまい」と云ふやうな野心を起したのです。只それ丈けです。そして私は私の生眞面目があゝ云ふ人にはたゞ馬鹿氣て、子供らしくしか見えないと云ふことを知つて居りました。それは、明日に迫まつた金の爲めに困りぬいてあすこに行つたと云ふことが一番の私の弱味でした。つまり一寸したすきに私が乘せられたのです。私はかうして考へて來ますと、本當に情なくなります。かうした、一寸した機會にすらも乘せられる自分をかなしまずにはゐられません。まだ〳〵私にはどんな處に出てもどつちを向いても一歩も半歩も自分の信實は讓らないと云ふ程確實に何時でも自分を賴んでゐると云ふ自信がありません——かなしいことですけれど。向ふが大手をひろげて一杯に正面から向つて來ればそれに向ふことも出來ますがすこしすきを見せて横手から出らるれば直ぐにゆだんをしさうになります。これでは本當

に危つかしくて仕方がないと思ひます。もう少ししつかりしなくてはとても雜誌を一とつ背負つてたつと云ふことは出來ないとつくづく考へます。

をとなしい、すなほな調子で出られること單純な私は直ぐその調子に引き込まれさうになります。小さな煩さい感情を失くしたいと思ひますがなかなかさうならないものですね。もう少し物事を眞直ぐに、克明に照らす理智を欲しいと思ひます。

自分の愚痴ばかりをながながと喋舌りたててすみません。私はたつまへにあなたの御本について何か書くことをお約束しました。けれども讀むはよみましたけれどもいま落ちついてあの御本について一々何か申上げると云ふやうなことはとても出來さうにもありませんからあの御本をよみましたときあなたについて感じたいろいろなことをちぎれちぎれにかいてそれで許して頂かうと思ひます。けれども私の感じたことが直ちに本當のことであるかどうかは私にもわかりません、私の感じたことゝ書くことの間にちがひは勿論ありませんがあなたのお書きになつた心持ちと私の感じ方の間にちがひがあるかもしれないと云ふことなのです。

私はあなたと向き合つてゐますと何時でもろくにお話が出來ないのです。私はどうしてか、此度お目に懸つたらと思つてゐま

すけれども會つて見ますと、どうしてもよくお話が出來ないのです。私は隨分まへからそのことに氣がついてゐて、考へてゐました。そしてそれがどうやら、あんまりあなたが丁寧すぎるので私が困ることに依るのだと云ふ風に思はれます。

あなたはあんまり丁寧すぎるのですもの夫はあなたがこれまで訪問なんかを仕事にしてゐらしたその習慣があるのかもしれませんが面倒な禮儀などにうとい、粗野な私たちにはあんまりあなたが卑下なさりすぎるので、なるべくうちとけてお話したいと思つて無雜作にはなしてゐる自分が何だか傲慢らしく見えて來て直ぐいやになつて仕舞ひますので何時でも默つて仕舞ふのです。私は何時でもあなたが下ばかりむいてゐらつしやるのが氣になつて仕樣がないのです。何故ちやんと向き合つてもつと親しくもつと大きな聲で遠慮なく話して下さらないのだらうと思ひます。私はあなたの或る點では非常に引きつけられながら一方では焦れつたくて仕方のないやうなことがあります。私は時々あなたの手をグン／＼引つぱつてドン／＼馳け出したくなることがあります。何を見ても、何たがオド／＼してゐらつしやるやうな處があるやうな氣がして仕方がありません。

私はあなたのあの御本を拜見しながら何處をよんでもさう思ひました。本當にあなたは正直すぎ單純すぎ、あきらめすぎると。

あなた自身は本當に美しい心をもつてゐらつしやるのですけれどあなたの周圍は何時でもあんまりあなたに邪慳すぎたのですね本當にあなたのやうなまじりつ氣のない感情をもつてゐる方もめつたにないと思ひます。その點ではあなたは何人に向つても大威張りだと私は思ひます。

　あなたは何時でも、自分の滿足よりも他人の滿足するのを見て喜んでゐる方だと思ひます。これはあなたのどんな場合にも必す伺はれることで誰にもわかる事ですが。そしてまた私は思ひます。それがあなたにとつての滿足なのだからあなたには立派なことなのですわ、でも、あなたがもし他人の喜ぶかほを見て喜こんでゐる間にでもあなたの足場がひつくりかへるやうなことのないやうに注意してゐらつしやることが出來れば申分はないと思ひます。けれどもあなたは大抵の場合あんまり正直すぎて背負なげを喰はされてばかりゐらつしやるやうに私には見えますのよ、負けぎらひの私には殊さら見えるのかもしれませんけれど。

　さうして、私にはあなたのやうに純な正直な處を澤山にもつてゐる方のねうちを認めずに乘じやすい點を利用して誘惑しやうとしたりひどい目に合はせる奴を憎まずにはゐられません。あなたが最初からそんな奴になんか會はずにずつともつと自由な道を歩いてゐらしたら屹度本當に立派な快活な人なつゝこいゝ方におなりになつたら

うと思ひます。あなたの歩いてゐらした道を私たちは本當には覗いたこともありませんから、どんなに困難であつたかもしかとは分りません。たゞあなたにもう少しエゴイスティックな點がありそしてもうホンの少し許り人の惡い處があればあなたは無事にあの道を通れたのかもしれません、けれどもこれは私の想像ですからあてにはなりません。歩いて來て仕舞つた處にはもうたゞ足跡だけです。私たちには歩いてゐるその刹那々々に一番たしかな私たちの存在の意義を見出すことが出來ると信じてゐます。あなたの御本はあなたの過去をお書になつたものとして、さういふ過去をお持ちになる現在のあなたがどういふ方であるか過去が何處まであなたに及ぼしたかと云ふことを考へるときにはじめてすべてに價値が出て來るのだと思ひます。

私はあなたの通つてお出になつた過去のことについては本當に一言半句も言葉をさへもさしはさむ資格を缺いて居ります。たゞさうした過去があなたに及ぼしたのであらうと思はれる點をあなたに無遠慮に申上げやうとしたのですけれど、考へて見ますと、私は何にも云へなくなつて仕舞ひます。何だか半分云つてあと半分ひつこめるやうですけれどかうやつてかいてゐるうちにも自分のことに思ひ至りますと決して他人樣に對して口幅つたいことは云へなくなりますからお許し下さい。それでも隨分無遠慮

に年長者のあなたに向つて甚だ潜越なことも書きましたが何卒あしからずおゆるし下さいまし。

お互ひに自分のことは矢張り自分で考へながら進んでゆくより他に仕方はありません。生きる力のびる力をもつてゐる限りのものは自分で勝手に、すきなものを吸收することの出來るやうに自然はいろ／＼なものを豐富すぎる程與へてゐますものね、私たちはいくつ取つても／＼たりないほど澤山のものに惠まれることが出來るのです。どんな醜いやうなものがどんな偉大な肥料になるかもしれませんし、どんなにか美しく見えるものがどんなに害になるかもしれません、他人には本當にわかりませんわ、深く考へ及ぶ程、自然と云ふことを考へる程微弱な自分の力をおもはずにはゐられません、深く內に向つて進む程徒らに手も足も動かせません、今私は物を考へる每にさう云ふ風に考へ流されてゆきます、これがどう流れてゆくかは自分でもまだわかりません。私は不自然なことはあくまでもしたくないと思ひます、私の眞實が本當の眞實である間は。

つまらないことをなが／＼書きましたねいろ／＼まだ外に書くつもりだつたのですけれども何時まで書いたつてつまらないことばかしですからこれで止めます。

では　左樣なら。

編輯だより

□種々なうはさに幾分不安をお感じになつた方が讀者の間にも多少あつたこと丶思ひます。けれども、どんなことがあつても永久に廢刊するなどいふことはしたくないと私自身は思つてゐます。少々位の困難はもとより覺悟の前ですから何でもないことです。

□今月號から日月社の安藤枯山氏の御厚意で私の留守中丈け雜務をとつて下さることになりました。多事ながら面倒なことをお引きうけ下すつた御厚意を深く感謝いたします。

□今月號から大分いろ／＼なことを始める計畫をたて丶居りましたけれども私が七月の末までは東京にいろいろな用をもつて忙がしいおもひをして歩きまはつてゐまして月末になつてこちらへまゐりまして、十日頃まで云ふものきまつた座り場所ももてないやうな有樣でしたし、その間にもなを、東京に殘して來た種々な面倒な用についても始終考へたり、原稿も目を通さればならずと云つた風にどれと云つて一つことに向つてゐることが出來ずに始終片附かない、半ぱな考へで頭の中は混亂してゐますし、體はおちつき先きを見出さずひきつゞく疲勞の爲めに變ですし、實に困りました。それ故何にも考へてゐることは實行が出來ずに日が迫つて來まして諸氏に對しても實に申譯けのない次第とはおもひますが今度こそは屹度、せめて考へてゐる半分丈けでも實現させるつもりです。本當に何時もながら自分の意久地なしが情なくなつてまゐります。

□此度歸京しましたら少しは人なみに働くことが出來るやうにしたいといまから考へて居ります。久しぶりに故郷にかへつて見ますといろ／＼おもしろいことを見たり感じたりします。今月六號でこれを書くつもりにして居りましたけれどもつい書けさうもありませんから來月號には澤山一緒にかくことに致して御許を願ひます。

□墮落と避妊についていゝ原稿が可なり集まりましたから出さうと思ひましたけれどこの間の今月號ですからどうかとあやぶまれもしますし少し注意をうけたこともありますので暫く見合はせて玉稿はお預かりいたして置きます、そのうちに折を見て掲げることにいたしますから何卒あしからずおゆるし下さいまし。

□日記は何時でもどんなに少くてもかまひませんからお送り下さいましお願ひいたします。それから原稿は——私は多分十一月までは此處にゐなければなりません——十二三日頃までなら私の處にその以後は東京本郷區元町二ノ廿五、日月社あてにお願ひいたします。

□滯在中九州地方に近い處の方は何卒おあそびにお出下

さいまし、なるべくこんな機會にお目に懸れる方には懸つておきたいと思ひます。博多驛から三里四の方です。福岡市内は電車の便があります。それからは輕便鐵道で六つ目の停留場で降りればいゝのです。

□かうして東京から遠くはなれてゐますといろ〳〵東京の便利ないゝことばかりが考へ出されます。そうして東京にゐますと此度は田舍のいゝ處ばかりが思ひ出されるのです。人間は何處まで虫のいゝことばかり考へるやうに出來てゐるものかと云ふことにおどろかされます。（野枝）

○岩野清子さんの「別居に就いて思ふ事ども」は私がお訪れしてお話を聞いて、私の考へでまとめました。この意味の責任は私にありますから一言斷つて置きます清子さん自身の深い考察はやがて御發表になるでありませうし私もそれを祈つて居ります。

○平塚さんは今度お喜ばしい事には御妊娠の御様子とお見受けして居ります。從つて今號の論文は本當に私たちの期待を滿たしてあまりあるものと信じます。第四週年記念號にこの論文を見ることは意味多い事と存じます。

○小林哥津ちやんを向島におたづれいたしました。さつぱりとした新築のお家で、昔のやうに、勝氣なはつきりした栞で、哥津ちやんは笑つたり話したりされました。野枝様はちつとも身體を大事にしないから私心配してゐるのよ、と云つたりして。お見受けしたところでは哥津ちやんも若いお母様におなりになるのではありますまいか。

○青鞜も戀愛のシイズンから移り動いてゆくのですれと野上八重子さまは語られました。かうして段々と青鞜上に現れてゆく女の生活も充實してゆくのが非常に嬉しくも亦貴くも感ぜしめられます。

○私は青鞜の手傳がしたかつた。金があれば金を、手足でよければ手足を、さうして今、長い間の心持が、遂げられたのを感謝して居ります。そしてその心持が私一人の心持ではない事を信じてゐます。

○野枝さんの歸京を待ち望んでゐます。本當に淋しいと思ひます。廣々した九州の山水にあの方のあの生々しさが更に研ぎすまされて歸つて來るのが嬉しうございます。編輯の餘白に一寸かうした感想を書かずには居られなくなりました。

○一二名の方の御寄稿が、原稿輻湊のために、次號にまわりましたことを厚くおわびいたして置きます。（花世）

△兒童の世紀（エレンケイ）は山田わか氏から原稿を頂きながらのせる事ができませんでした、次號から又連載いたします。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新刊紹介

■行人行歌（若山牧水著）

現在の歌壇で最も多數者にその作風を慕はれてゐるのは著者であらう、著者は二十歳の頃からいゝものを持つてゐた、旅の歌には殊に靜かないゝ歌がある。それから約十ケ年間にその作風が漸々圓熟の境に入つてきた、本書は著者が過去に出した六歌集から自選したものでどの頁からも佳作が見出される。

幾山河越えさりゆかばさびしさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

山山のせまりしあひにながれたる河といふものの寂しくあるかな

此頃齋藤茂吉、北原白秋氏らの新方面開拓のめざましさに壓されてゐる形であるが、なほ著者の厭味のない地味な溫健な歌は歌壇の大勢力として若い人々に渴仰されてゆくに違ひない。和歌選集叢書の二。六〇錢（植竹書院）

■自叙傳（森田草平作）

著者の自序に「今自叙傳を再び世に送るについて僅に自ら慰むることが一つある。之れは兎に角「煤煙」と共に當時にあつては一生懸命にかいたものだといふことである。……一生懸命になる、それは今の自分にとつては容易になれないことである。」と云つてある。この小説は當時「煤煙」よりもいゝと稱せられたもので、終りに近い方の嘗て「未練」と題せられた部分の如きは著者の特長の最もよく發揮された所であらう。まだ讀まぬ方には是非一讀をすゝめたい。木版刷布裝幀、四百頁九十錢（日月社）

■萬葉集選前編（窪田空穗著）

■續編萬葉集選（窪田空穗著）

著者が常に愛誦してゐる萬葉集の名歌玉詠をぬいて之に親切な註釋と批評とを加へた書である。このごろの人々が今更のやうに稱讚するだけあつて、遉に尊い歌が多い。續編の方には附錄として「萬葉集の中心思想」と題する紹介的批評が載せてある。兩編共に中村不折氏の絹地に極彩色の裝幀で感じのいゝ手頃の本である。前編四五錢、續編五五錢（日月社）

寄贈書籍

■黑耀集　前田夕暮氏著

■天理教祖觀　奥谷文智氏著

■子規居士と余　高濱虛子氏著

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一冊金貳拾五錢(郵税壹錢五厘)
■前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
■廣告料(一頁)特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、(半頁)七圓
■振替貯金口座は(東京二一一一六青鞜社)に拂込まれたし。
■郵券代用は一錢五厘切手に限る(但し一割増のこと)。
■編輯事務、補助團會費拂込は青鞜社へ。
■廣告申込、交換廣告は日月社へ。
■圖書、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。
■原稿〆切期日は毎月十日限とす。

大正四年八月卅一日印刷納本　(特價金三十五錢)
大正四年九月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社內
編輯兼發行人　伊藤野枝

東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田杠一郎

東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　青鞜社　振替東京二一一一六番

發賣所　本郷區元町二丁目廿五　日月社　電話下谷三二〇六番　振替東京二八九一四番

大賣捌　東京堂

昭和44年10月30日発行　【第７回配本】

青鞜第5巻　9月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
L
A56
S45
v.5
no.8

University of Colorado at Boulder

[redacted]304 6746555

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第五卷
大正四年九月一日發行（毎月一回一日發行）　第八號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER